広江・浜遺跡

倉敷市教育委員会

1979年　8月

序

本書は、倉敷市立第三福田小学校校地にあたる広江・浜遺跡の調査報告書であります。広江・浜遺跡につきましては、1966年に、第三福田小学校を現在地に移転新築いたしました折、(財)倉敷考古館に依頼して一部調査を行い、調査概報も刊行いたしております。それによりますと、同校の運動場をのぞく校地全域を中心として、さらに校地外にも広がりを持った大規模な遺跡であります。この地は近世まで、吉備の児島の西岸で、水島灘に面した海岸の砂浜であり、三千年も前にさかのぼる縄文時代の後期から、先人の居住の場となり、千四百年ばかり前の古墳時代後期には、当地方の特産品として知られた塩作りが盛んに行なわれ、さらにその後は鎌倉・室町時代に至るまで、集落が栄えていたことが判明しており、倉敷市としては、有数の古代遺跡として注目されるものであります。

そのため、この度の第三福田小学校の児童増に伴う増築工事にあたりましては、校地内の地下に残存している古代の遺跡に留意して増築場所や工事方法も検討いたしましたが、将来の学校運営のことを考えますと、遺跡部分に新築せざるを得ないことになりました。そのため、止むなく広江・浜遺跡文化財調査委員会を発足させ、事前に遺跡調査を行って、増築工事に対応いたしました。

この報告書は、その結果を学界に報じると共に、市民の皆様の参考に供する目的で作成いたしました。それには、今回1978年の増築時の調査成果のみならず、1966年の調査結果をも再度加えることで、広江・浜遺跡の状況をより正確に報じる様につとめました。また、近接する遺跡で、近年、当市教育委員会が、(財)倉敷考古館の協力を得て対応した金浜古墳についてもあわせ掲載しましたのは、遺跡周辺の古代についての理解を深める資料として、対比しておくのがふさわしいと考えたからであります。

最後に、調査と報告書作成に全面的な協力をおしまれなかった広江・浜遺跡調査委員会の各位をはじめ、(財)倉敷考古館その他多くの関係者の方々に厚くお礼を申し上げますと共に、かつて、前回1966年度の調査概報の結果が充分生かされず、遺跡への対応がないまゝ、校舎一棟と体育館などの増築が行なわれた事実を深く反省し、本報告書が、いまだ、校地内とその周辺の地下に残存する遺跡地の保護のために将来共、役立てられることを願うものであります。

昭和54年8月31日

倉敷市教育委員会

教育長　三　島　一　夫

広　江・浜　遺　跡

目　　次

Ⅰ章　位置と周辺の関係遺跡 …… 2
一、遺跡の位置 …… 2
二、周辺の縄文時代遺跡 …… 2
三、周辺の彌生時代遺跡 …… 4
四、周辺の古墳時代遺跡 …… 5
Ⅱ章　遺跡の地形と調査経過 …… 9
一、遺跡地の状況 …… 9
二、調査の経過 …… 9
三、発掘後の資料整理 …… 12
Ⅲ章　遺跡の調査と遺構 …… 13
一、第Ⅰ地点（第一次調査） …… 13
1）発掘区の位置 …… 13
2）遺跡の状況 …… 13
3）土器出土状況 …… 15
4）遺構 …… 19
二、第Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ地点（第二次調査） …… 25
1）第Ⅱ地点発掘区の位置 …… 25
2）第Ⅱ地点遺跡の状況 …… 25
3）第Ⅲ地点遺跡の状況 …… 30
4）第Ⅳ地点遺跡の状況 …… 31
5）土器出土状況 …… 32
6）第Ⅱ地点の遺構 …… 38
Ⅳ章　縄文・彌生時代の遺物 …… 46
一、縄文後期前半の土器 …… 46
二、縄文後期中葉から後葉の土器 …… 46
1）A類土器 …… 47
2）B類土器 …… 53

3）C類土器 …… 57
4）小結 …… 63
三、晩期の土器 …… 64
1）A群の土器 …… 66
2）B群の土器 …… 70
3）C群の土器 …… 74
4）D群の土器 …… 89
5）E群の土器 …… 105
6）小結 …… 109
四、石器 …… 111
1）第Ⅰ地点出土の石器 …… 111
2）第Ⅱ地点出土の石器 …… 114
五、土製品 …… 125
六、彌生時代の遺物 …… 127
1）彌生前期の土器 …… 127
2）彌生中・後期の土器 …… 127
3）銅戈 …… 131
Ⅴ章　古墳時代とそれ以後の遺物 …… 132
一、製塩土器 …… 132
A）Ⅰ類土器 …… 132
B）Ⅱ類土器 …… 136
C）Ⅲ類土器 …… 143
D）Ⅳ類土器 …… 143
E）Ⅴ類土器 …… 150
二、類製塩土器 …… 152
三、その他の製塩土器 …… 153
四、師楽的土師器 …… 153
五、土師器 …… 161
1）古墳時代の土師器 …… 161
2）奈良、平安時代の土師器 …… 165

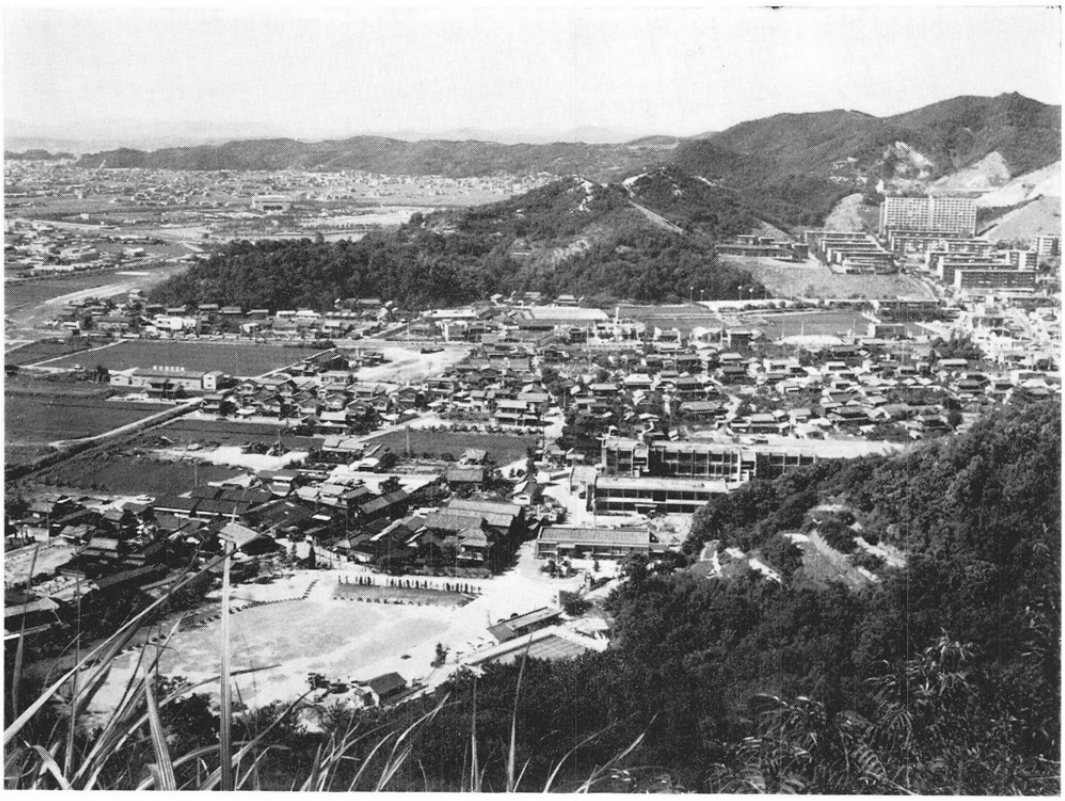
六、須恵器 …… 167
七、緑釉・灰釉陶器 …… 178
八、中世の土器・陶器・磁器 …… 181
1）青白磁 …… 181
2）陶質土器 …… 183
3）土師質土器 …… 185
九、鉄器 …… 187
十、紡錘車 …… 189
十一、不明滑石製品 …… 190
十二、砥石 …… 190
十三、土錘、飯蛸壷など …… 191
十四、銅銭 …… 195
VI章　製塩土器についての一、二の問題 …… 197
一、当遺跡の製塩土器の編年 …… 197
二、師楽的土師器と土師器の問題 …… 199
むすび …… 202

金　浜　古　墳

目　次

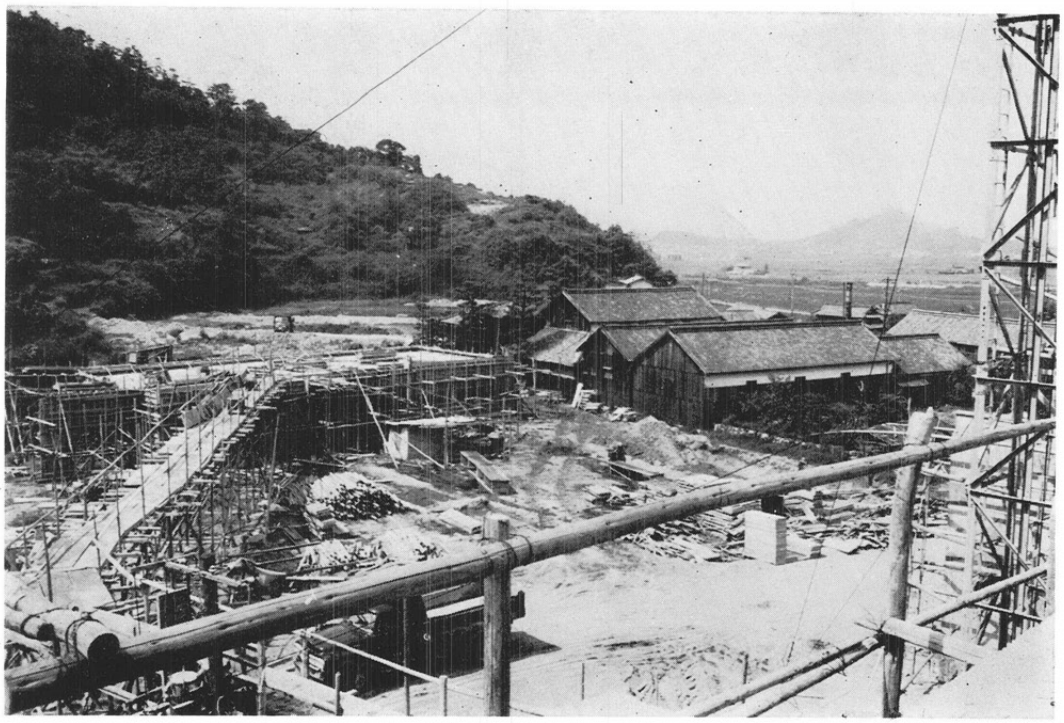
一、位置と調査経過 …… 204
二、外形 …… 205
三、墳丘の状況 …… 205
四、石室 …… 207
五、遺物出土状況 …… 208
六、副葬遺物 …… 210
七、中世及び縄文時代の遺物 …… 221
八、むすび …… 223

（両遺跡とも、図中の方位は調査時の磁北、高さは海抜高）

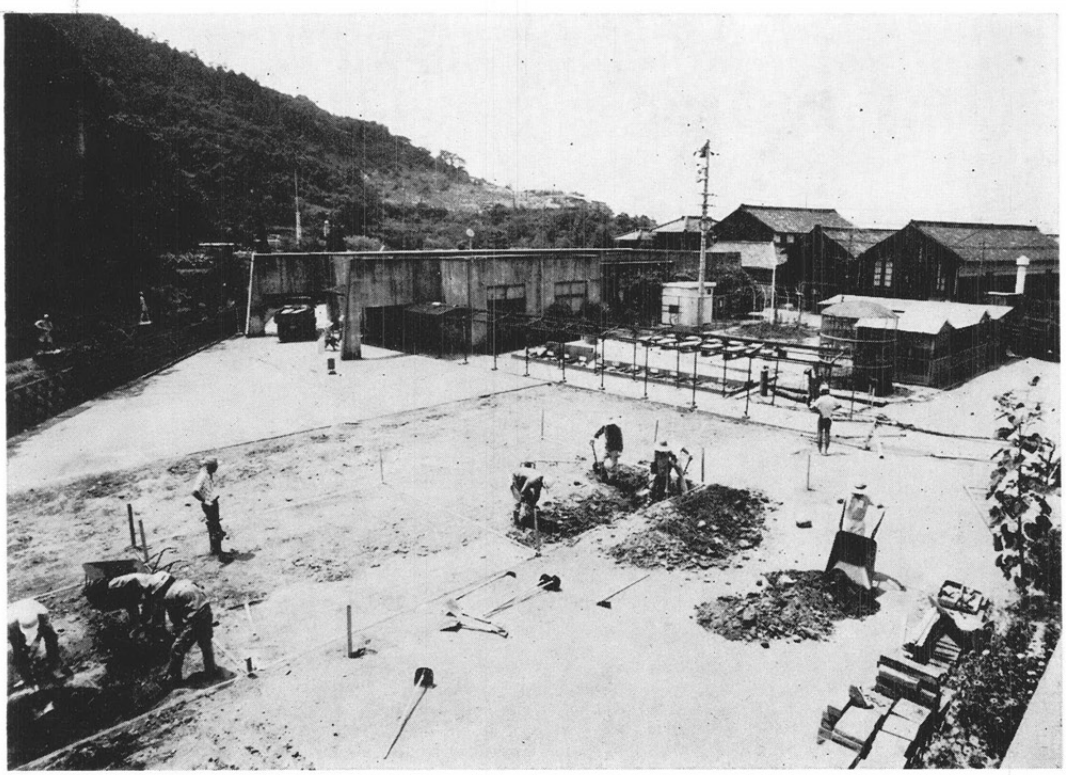


（1）南山腹より望む（写真中央、右寄りの校舎付近が遺跡）　1978年8月

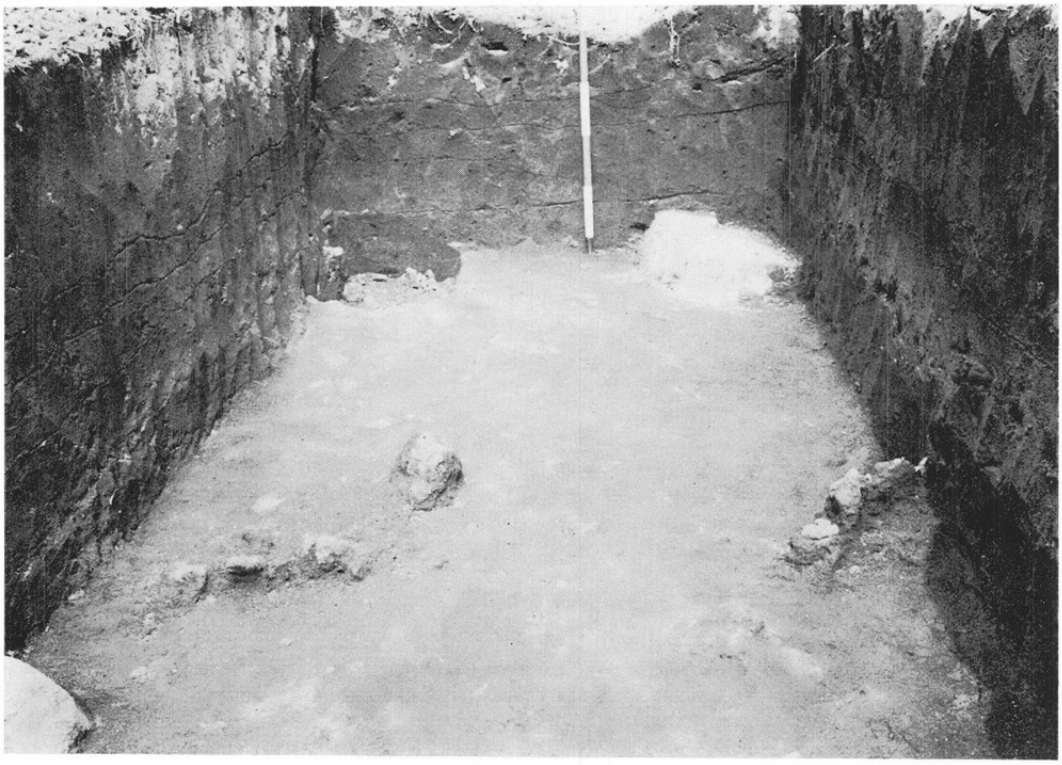
（2）南西より見た第Ⅰ地点発掘風景　1966年6月



（1）1966年の校舎新築時、北東より第Ⅱ地点方向を望む



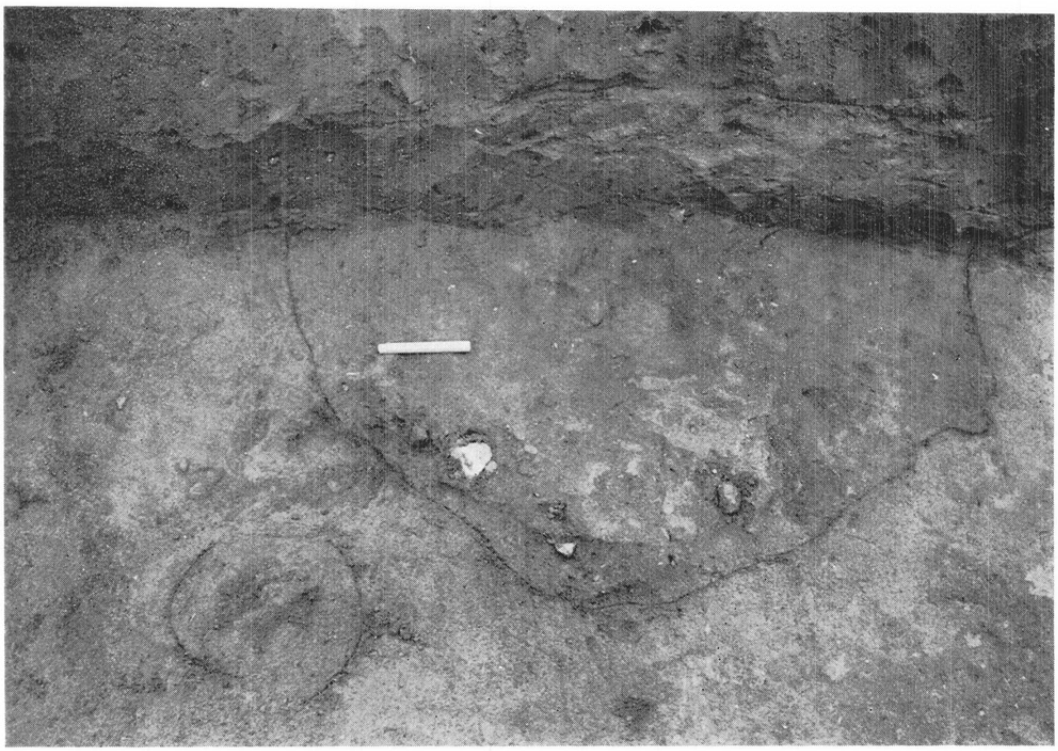
（2）北東より見た第Ⅱ地点、発掘開始時　1978年7月



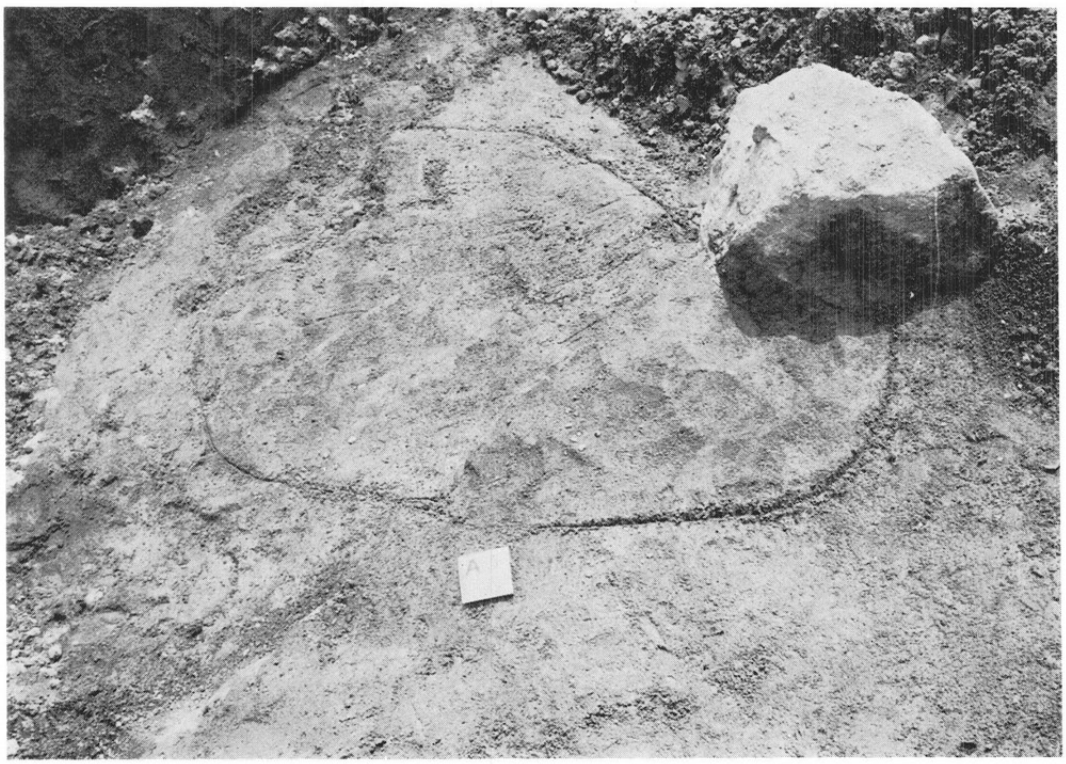
（1）D・3区東壁を西より見る

（2）G・3区北壁

図版第四　広江・浜遺跡（第Ⅰ地点）

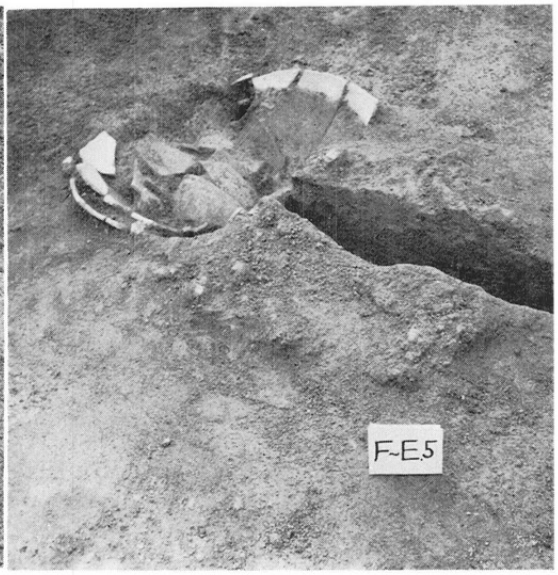


（1）B・0，B・1区のR－1遺構



（2）A・2，A・3，B・2，B・3区にわたるR－2遺構

図版第五　広江・浜遺跡（第Ⅰ地点）

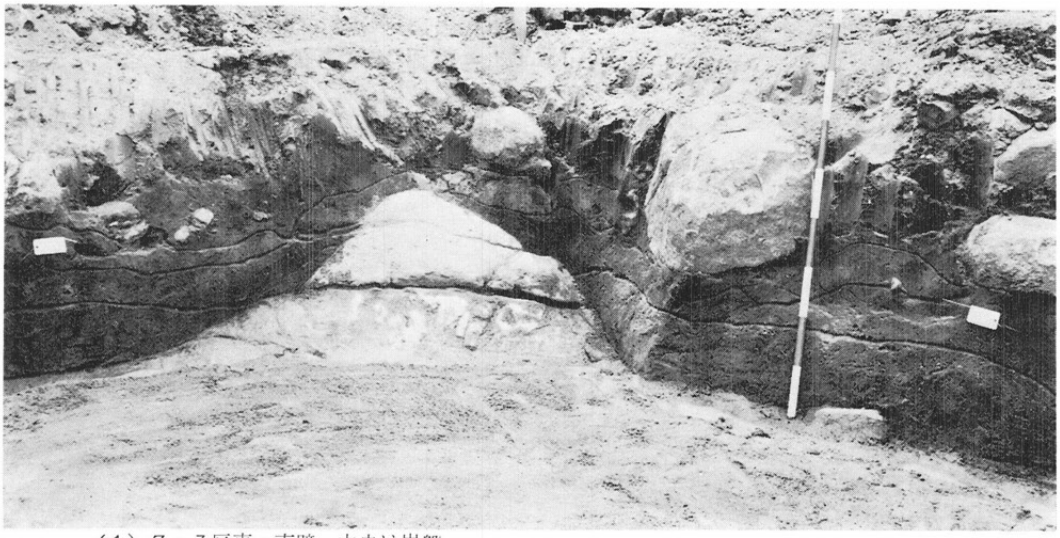


（1）E・5，F・5区のR—5遺構

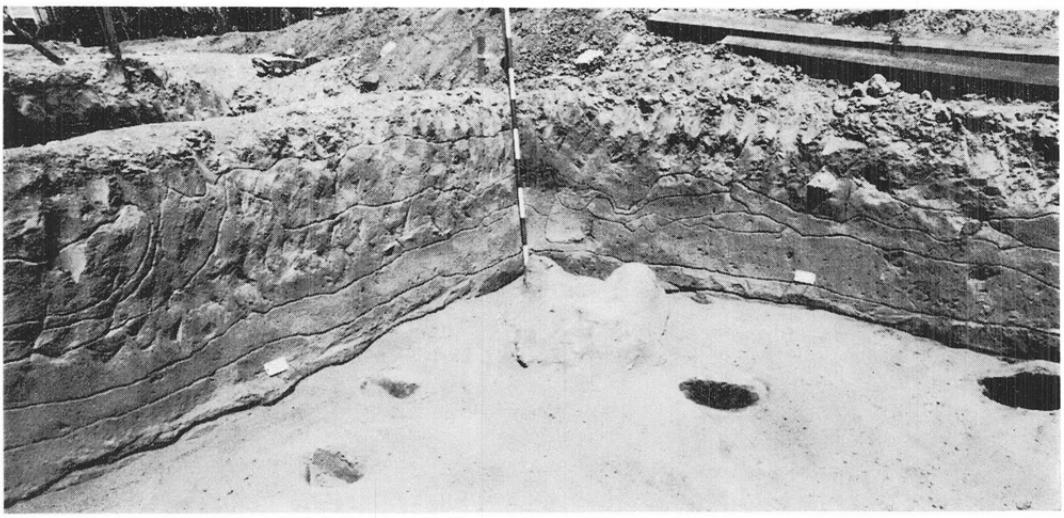
（2）D・7区2層土錘出土状況

（3）D・7区1層土師質鍋出土状況

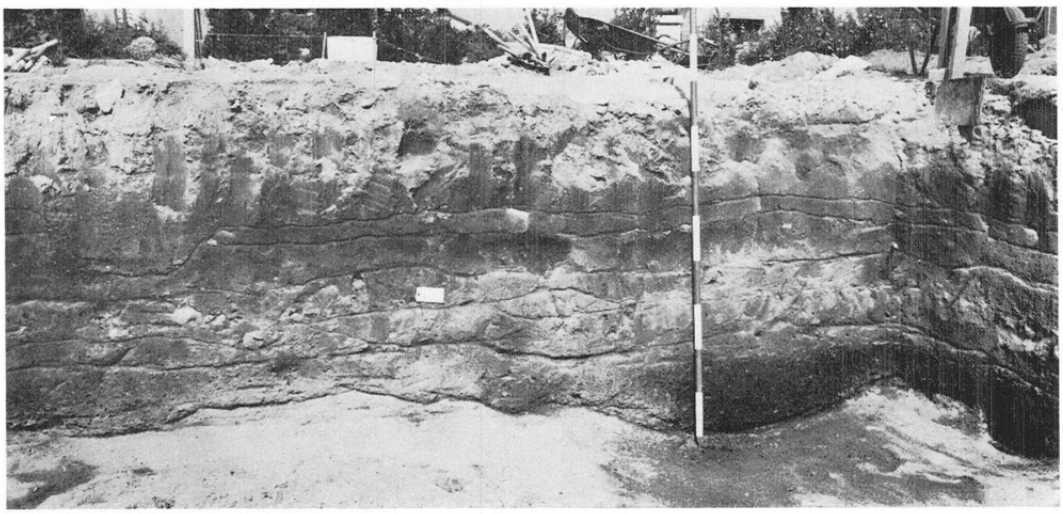
図版第六　広江・浜遺跡（第Ⅱ地点）



（1）Z・3区東・南壁　中央は岩盤

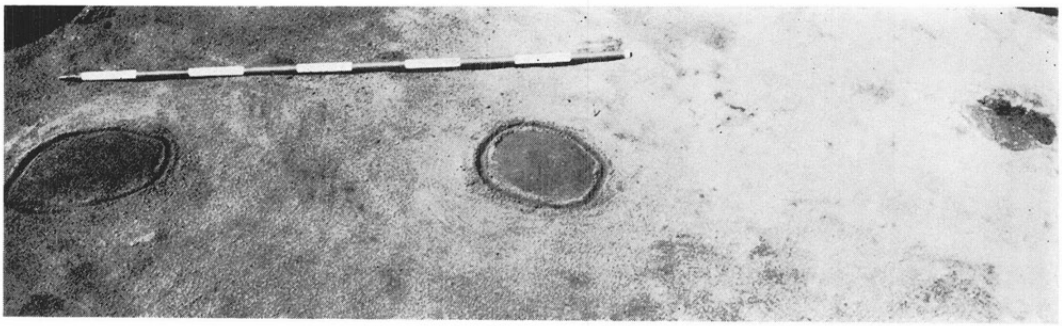


（2）X・4区西・北壁とR—21遺構



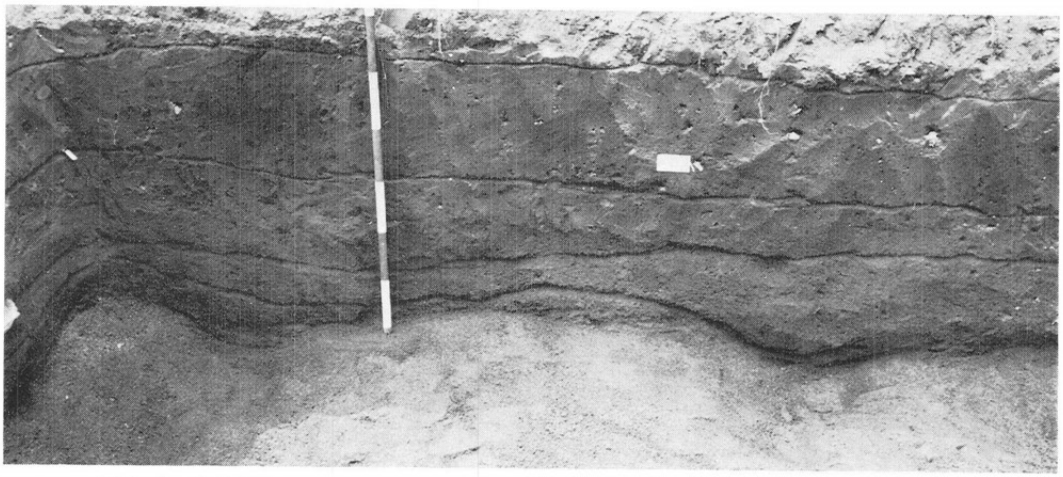
（3）X・5区西壁

（1）X・7区北西部柱穴



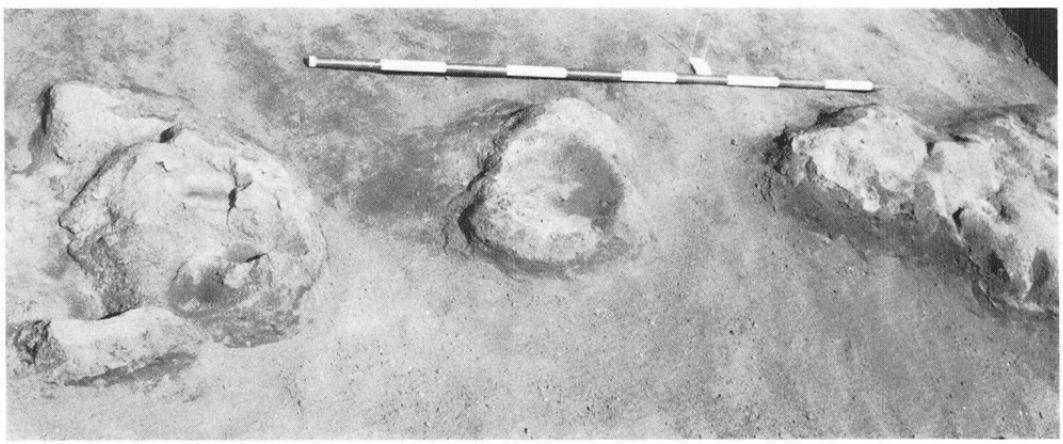
（2）X・3区柱穴

（3）W・6～7区柱穴



（1）Z・8区南壁

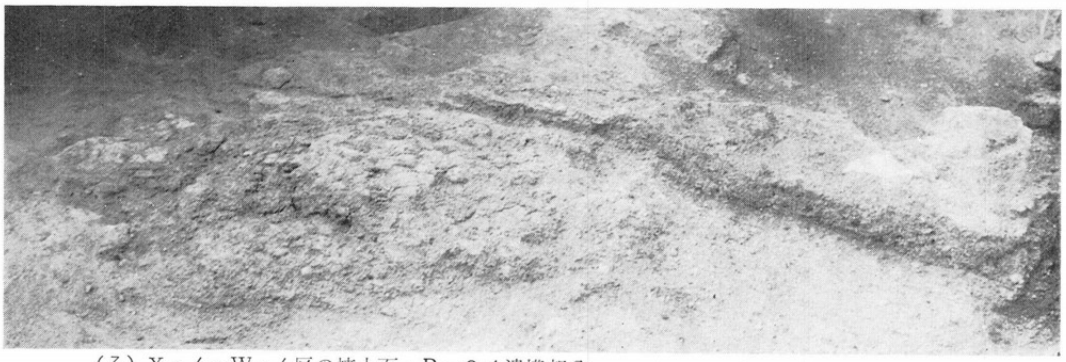
（2）X・4西北隅の山土・R－21遺構部分



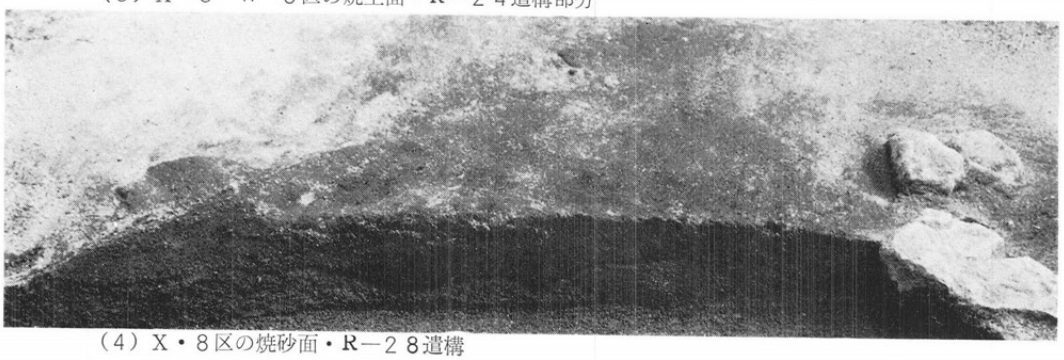
（3）Y・4区の山土・R－22遺構部分

（1）W6～7区東部焼土面・R－23遺構部分

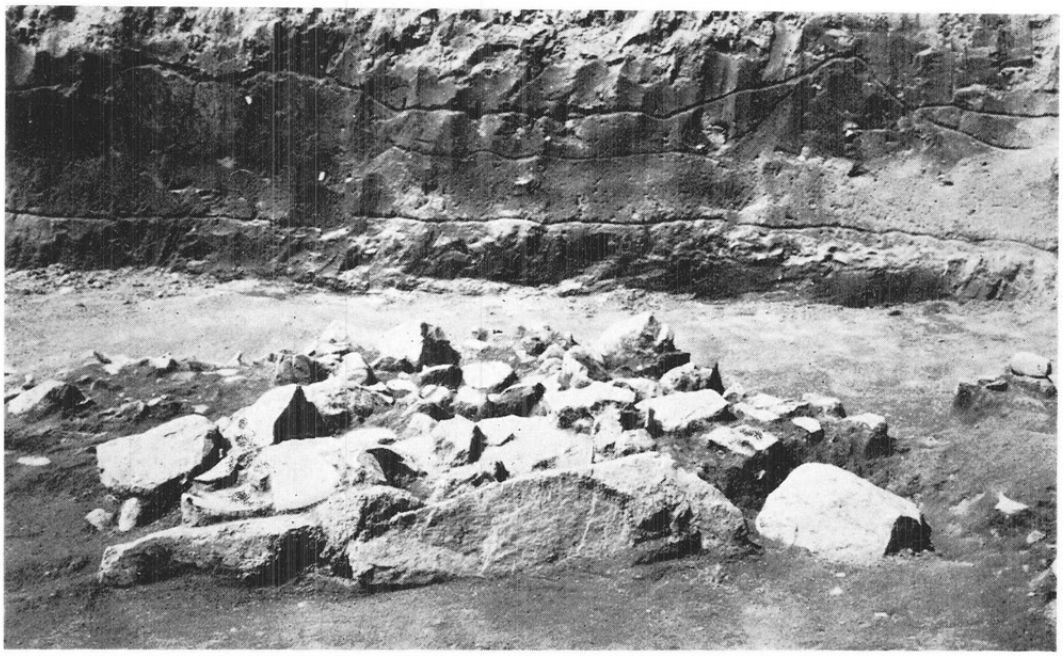
（2）同上焼土断面



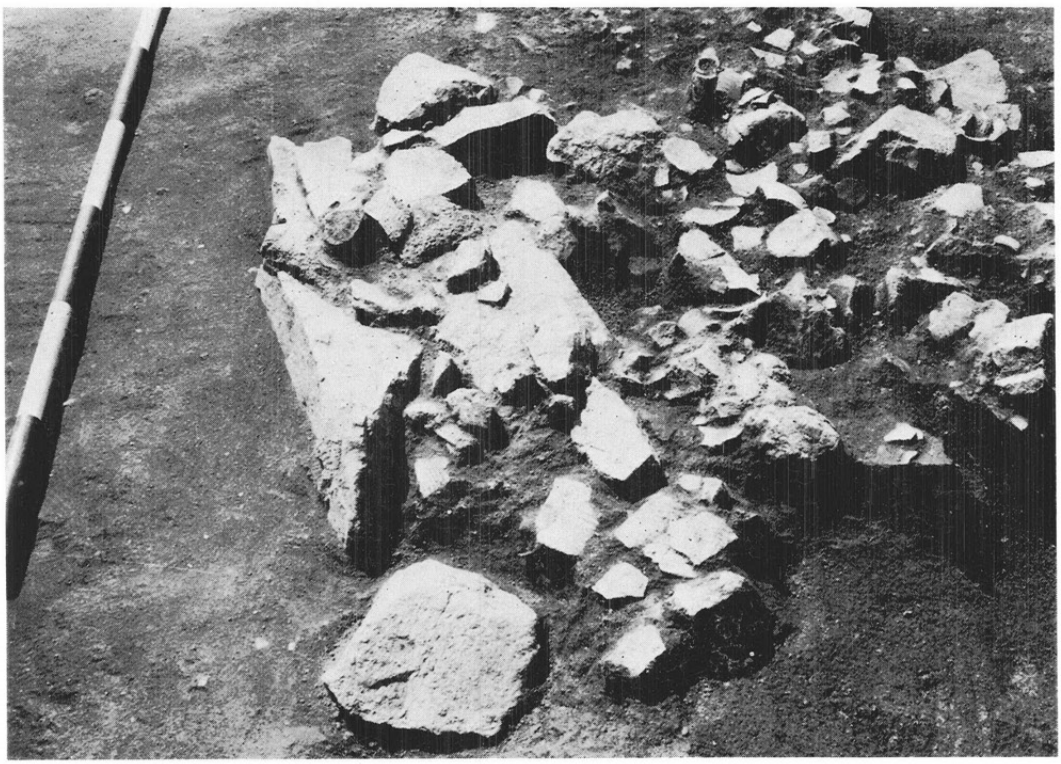
（3）X・6～W・6区の焼土面・R－24遺構部分



（4）X・8区の焼砂面・R－28遺構

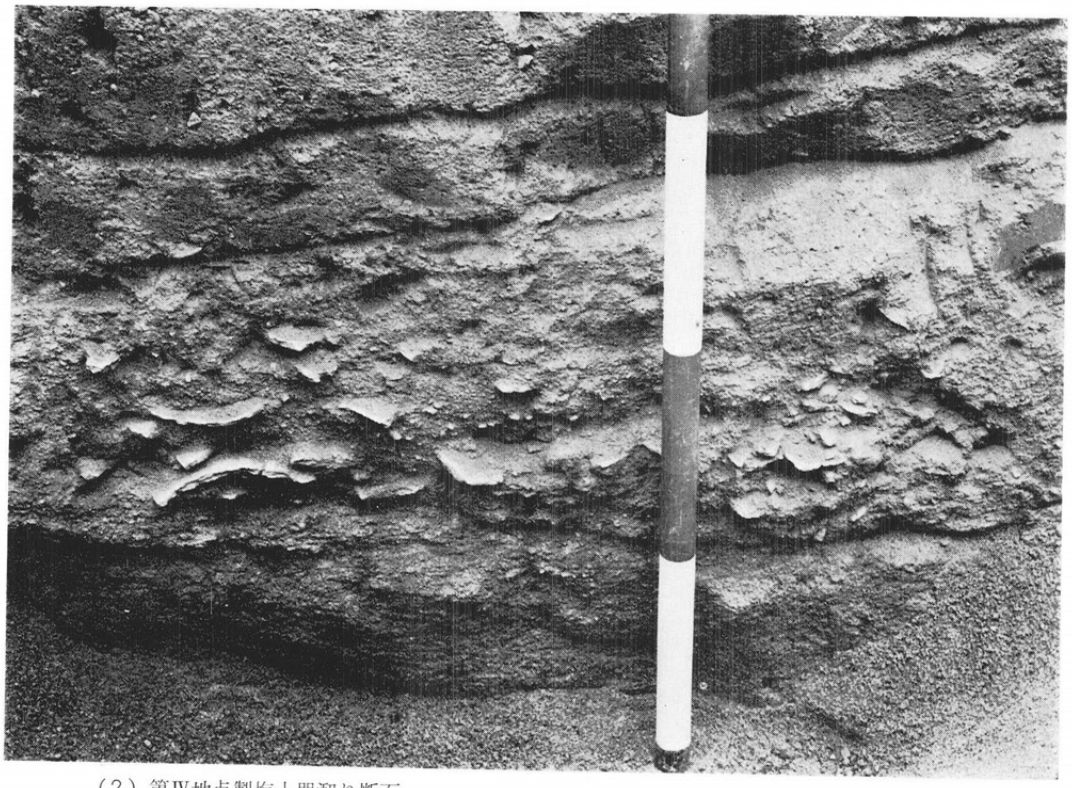


（1）X・6区の石と土器溜り・R－25遺構南から



（2）同上　東から

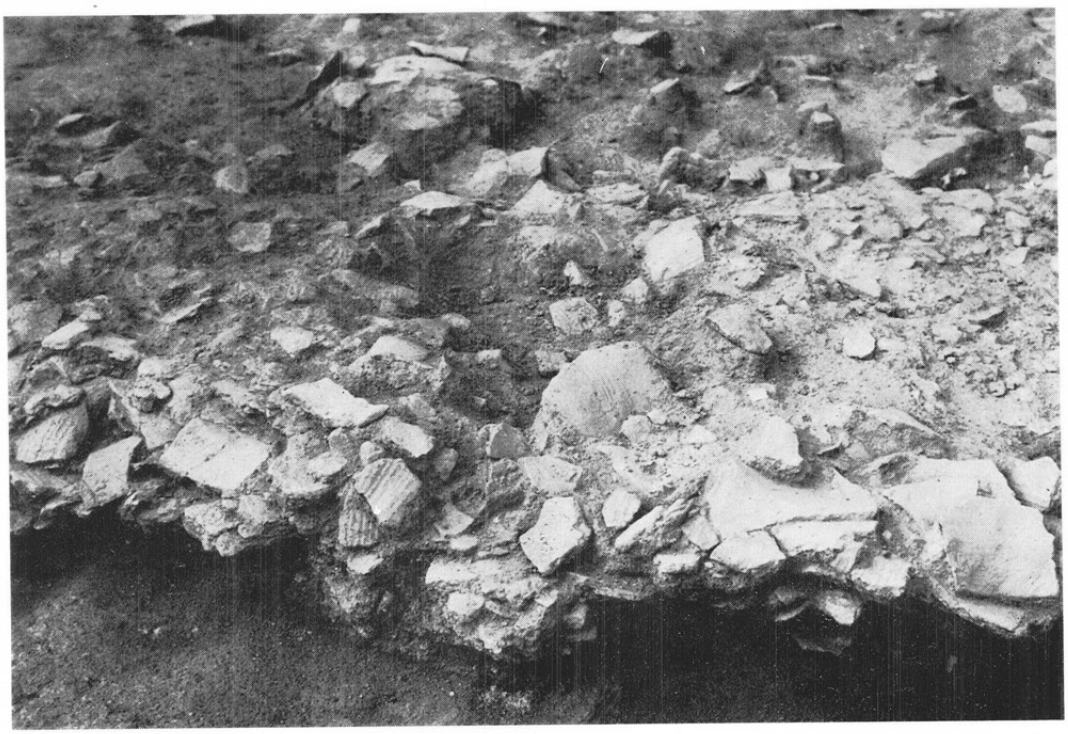
（1）第Ⅱ地点Y・8区西北薄手無文製塩土器（V類）溜り・R—29遺構



（2）第Ⅳ地点製塩土器溜り断面

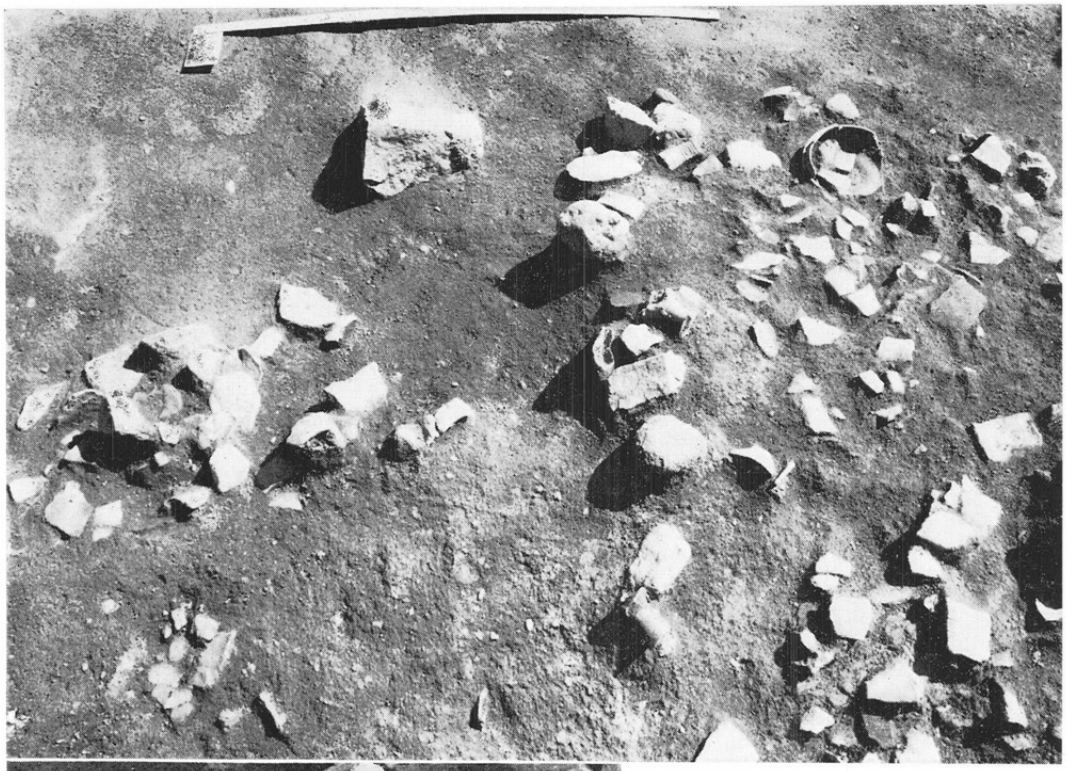
図版第十二　広江・浜遺跡（第Ⅱ地点）

（1）Ｘ・５区製塩土器溜り・Ｒ－２１遺構部分



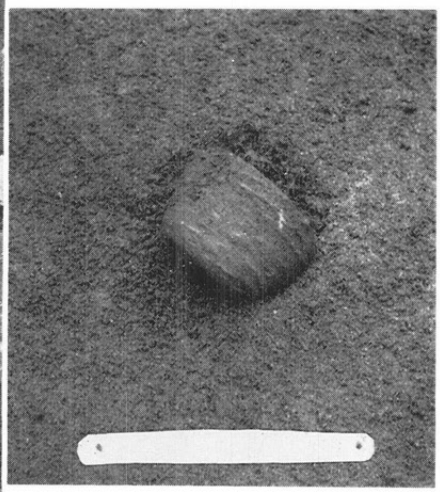
（2）同上部分断面

図版第十三　広江・浜遺跡（第Ⅱ地点）



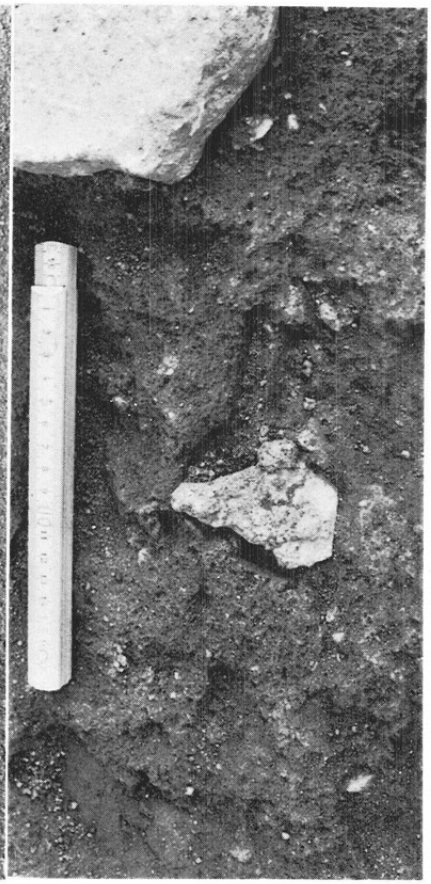
（1）Y・7区土器溜り・R－27遺構

（2）Y・5区土器溜り



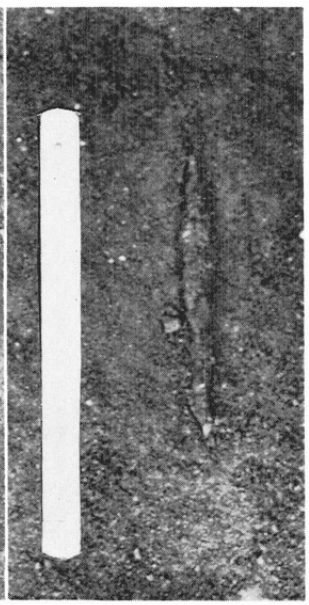
（3）W・5区2層下部出土小形土器
（類製塩土器）

（1）X・5区東北2層下部・製塩土器と須恵器



（2）Y・6区2層・土器溜り中の鉄器

（3）X・5区西北2層下部・製塩土器と須恵器



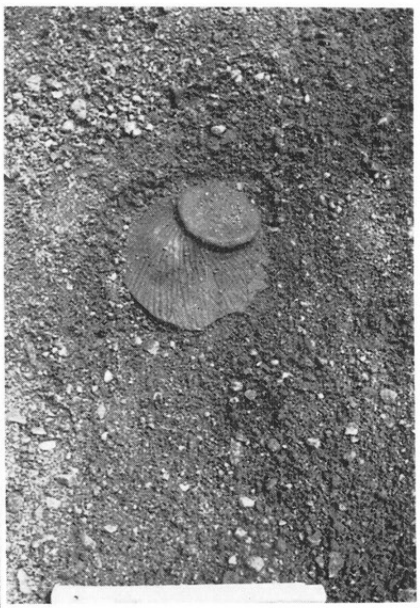
（4）Z・8区2層下部・鉄鋸

（1）X・5区西北3層・縄文晩期遺物

（2）Y・2区3層・縄文晩期遺物

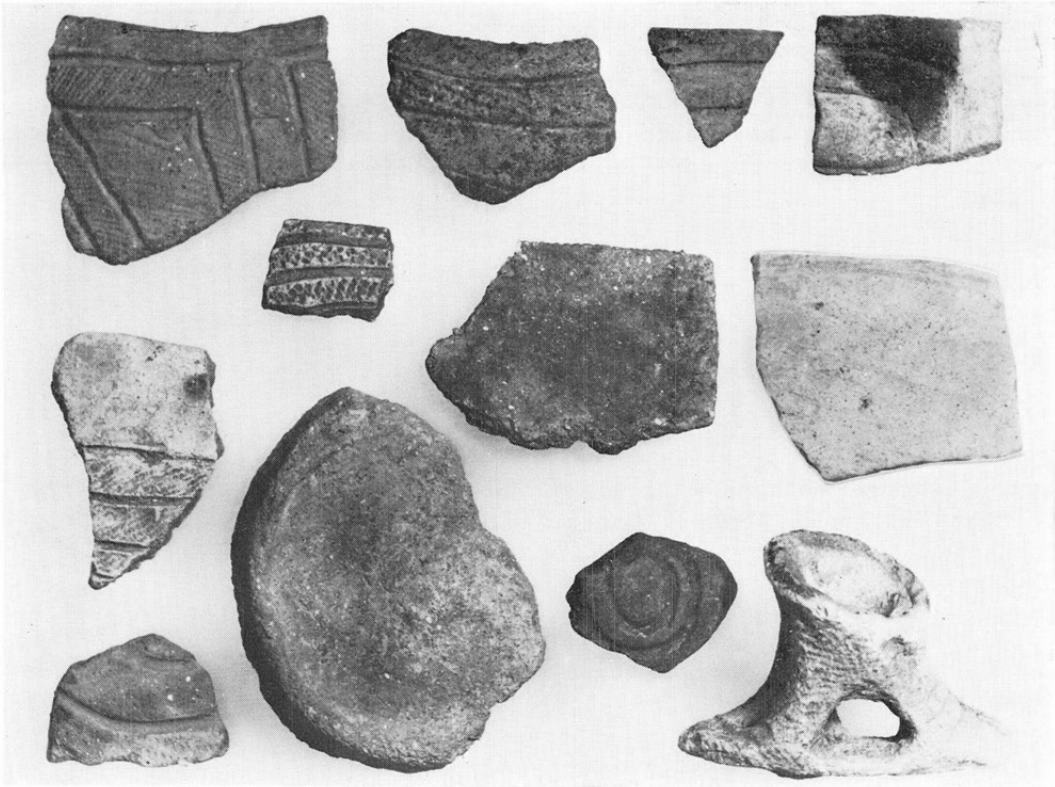
図版第十六　広江・浜遺跡（第Ⅱ地点）

（1）W・6～7区3層縄文晩期土器



（4）Y・6区3層縄文晩期土器

（2）中はZ・4区3層　縄文晩期石錘と土器
（3）下はY・2区3層　サヌカイト原石



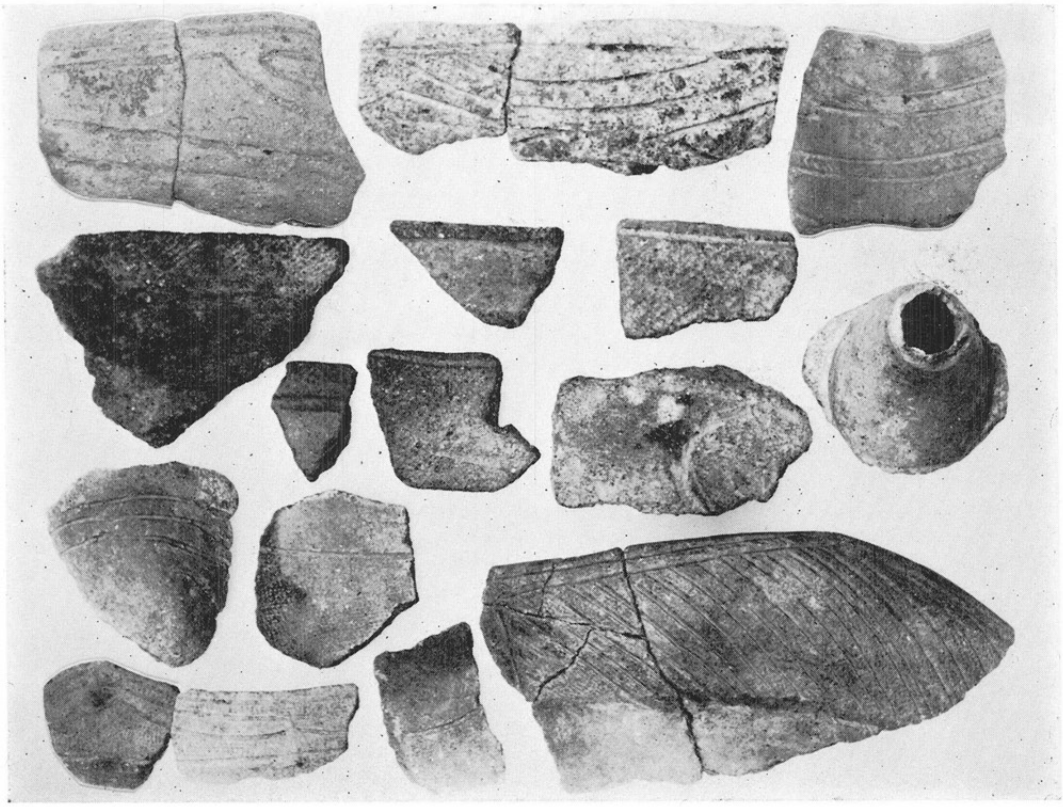
（1）後期　前半の土器（中津・福田KⅡ）　約 1/2

（2）後期　中・後葉A類土器（彦崎KⅠ）　約 1/2

図版第十八　広江・浜遺跡（縄文土器）

（1）後期　土版表裏　L．6.9cm

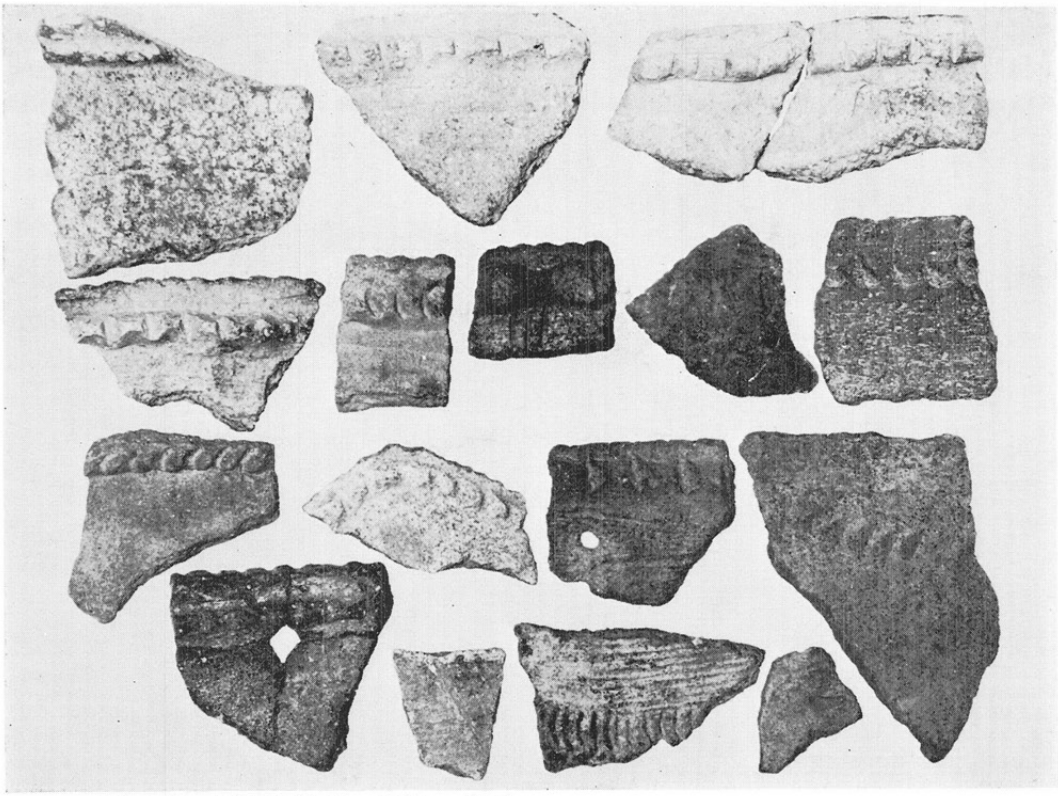
（2）後期　中・後葉B類土器（彦崎KⅡ）H．17.5cm



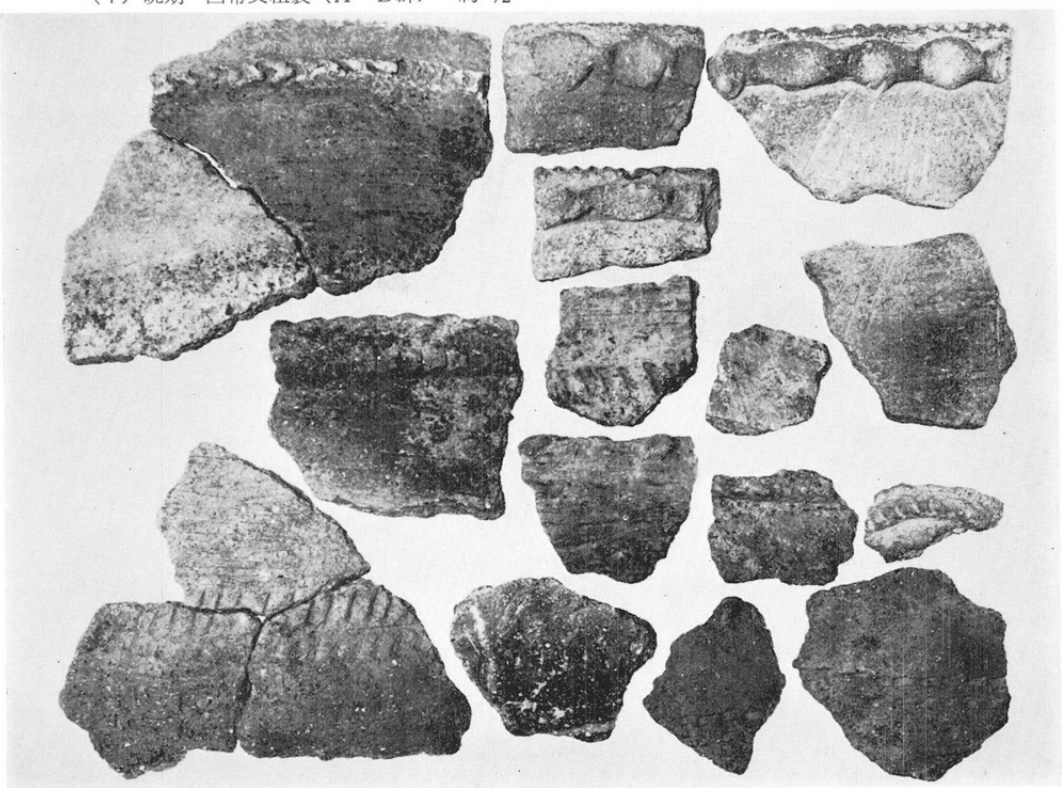
（3）後期　中・後葉B類土器（彦崎KⅡ）　約 ½

（1）後期　中・後葉C類土器（宮滝平行）H・14cm

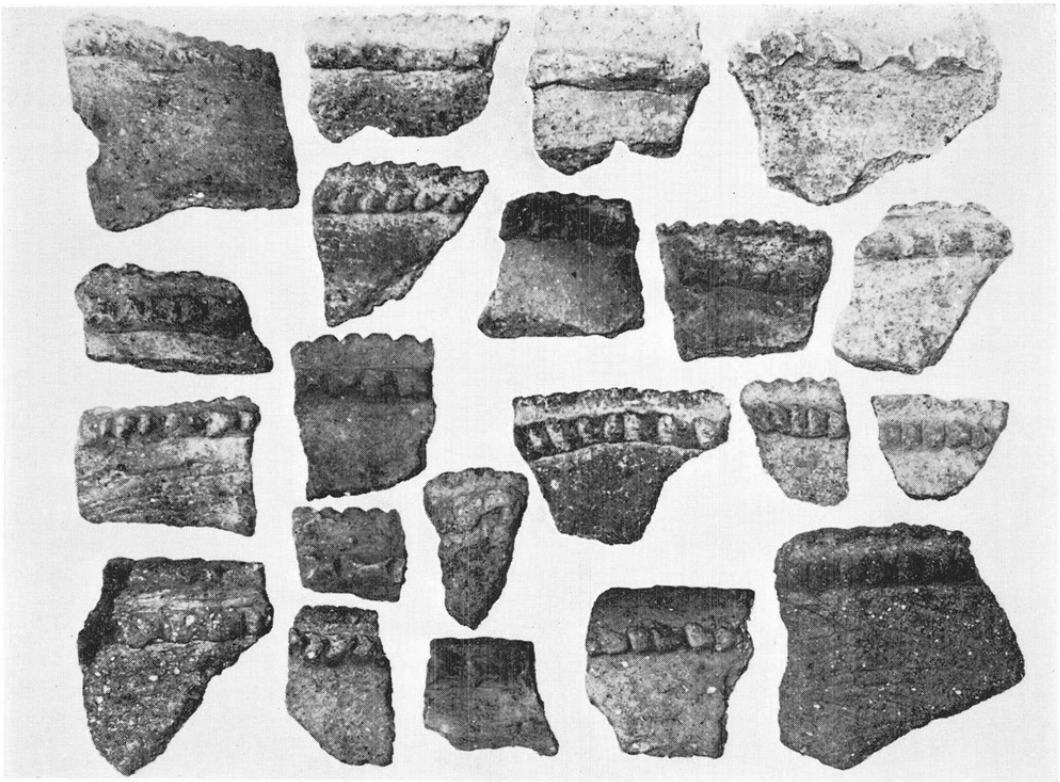
（2）後期　中・後葉C類土器（宮滝平行）　約 1/2



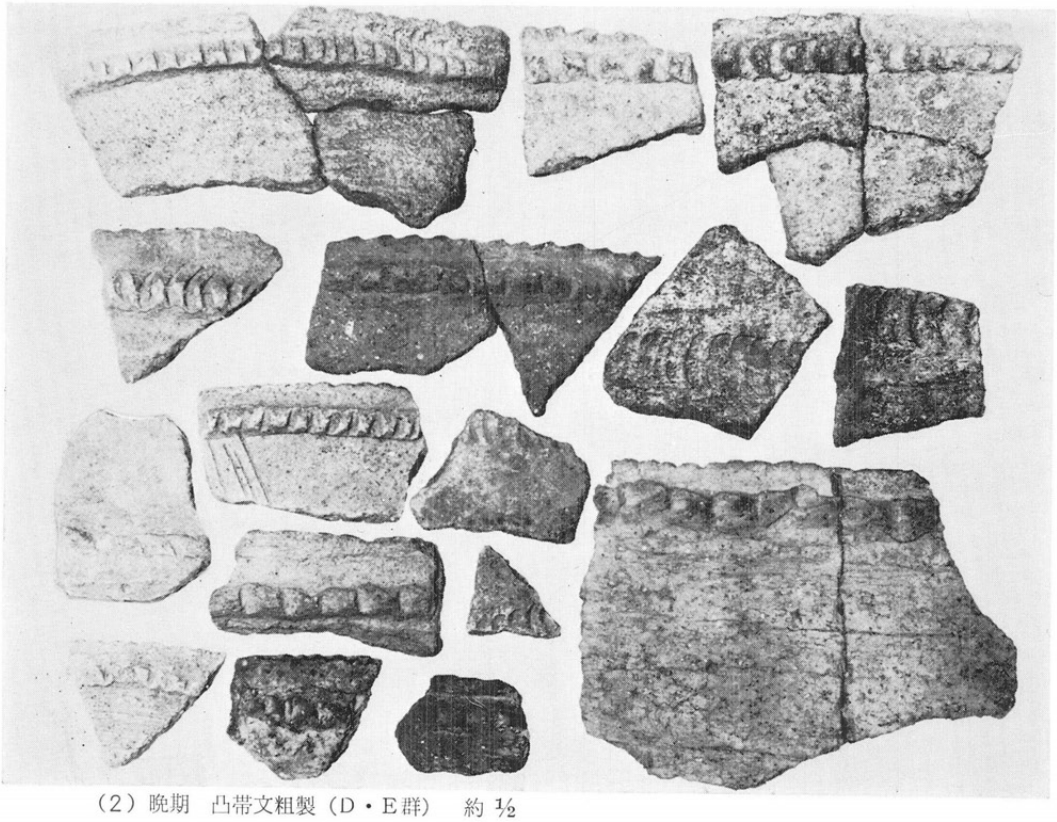
（1）晩期　凸帯文粗製（A・B群）　約 ½



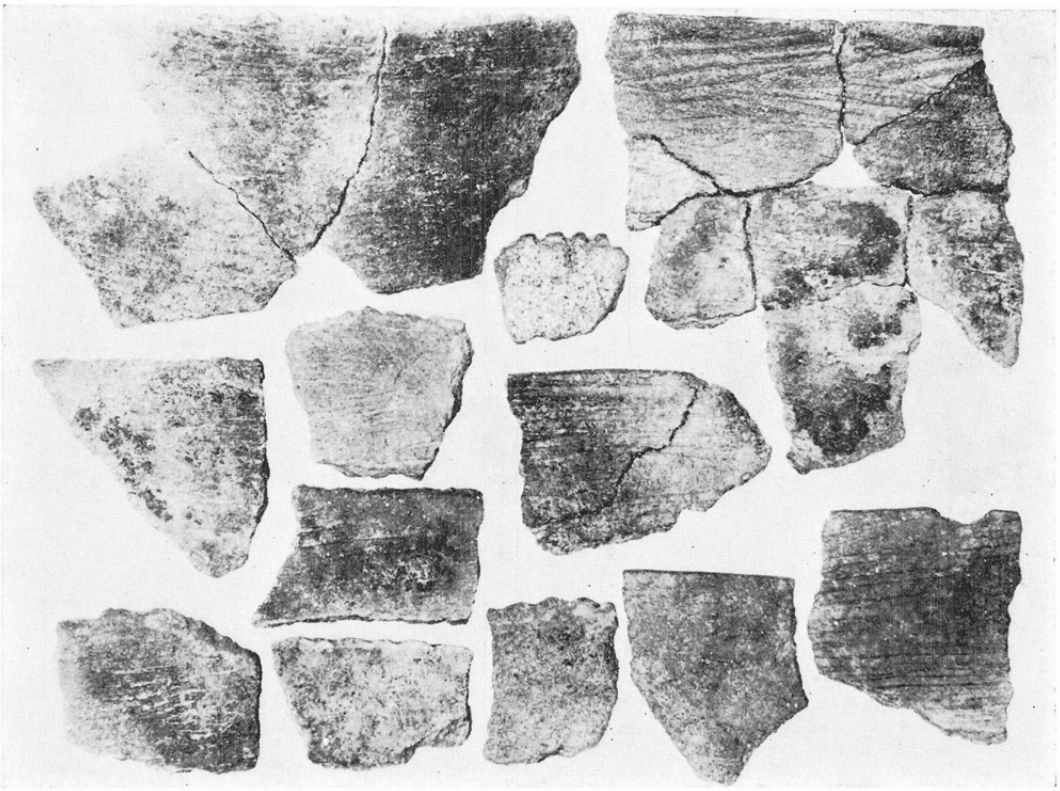
（2）晩期　凸帯文粗製（C群）　約 ½



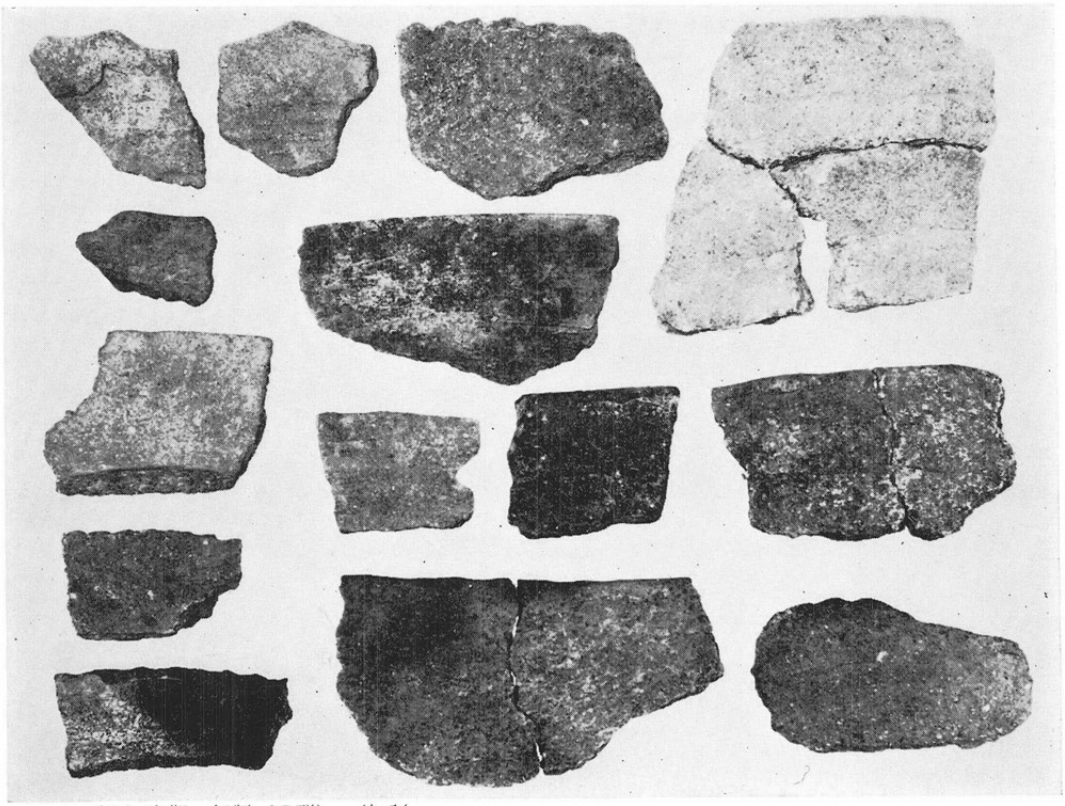
（1）晩期　凸帯文粗製（C群）　約 ½



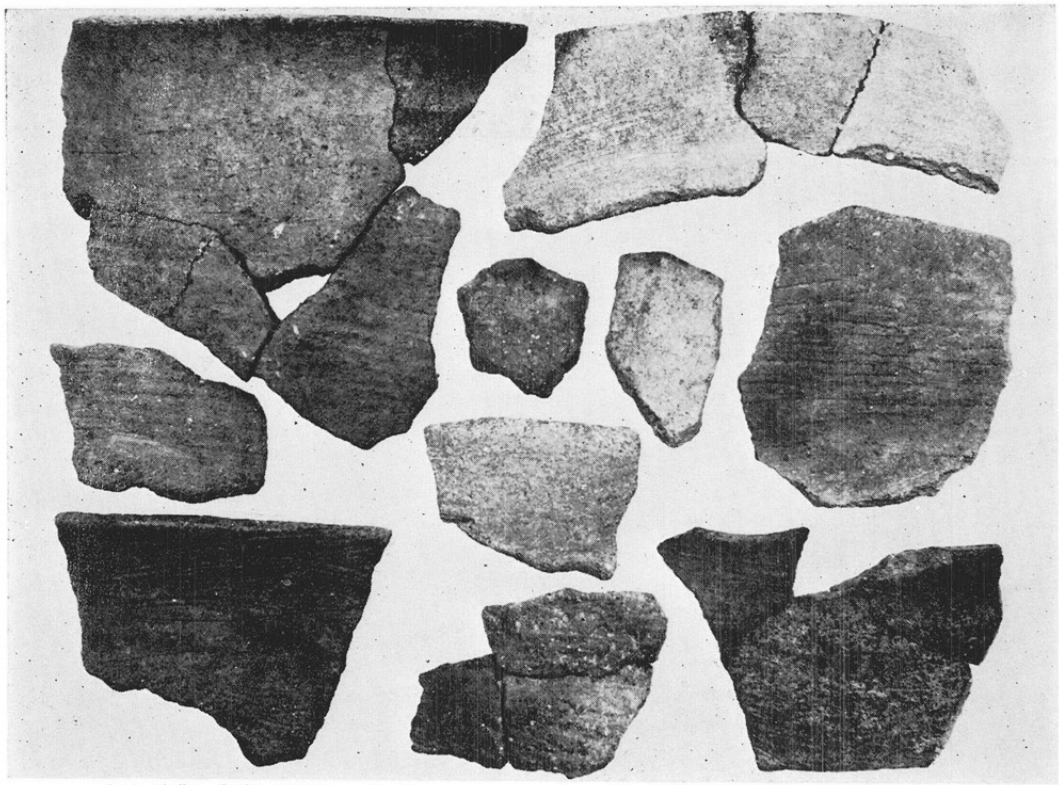
（2）晩期　凸帯文粗製（D・E群）　約 ½



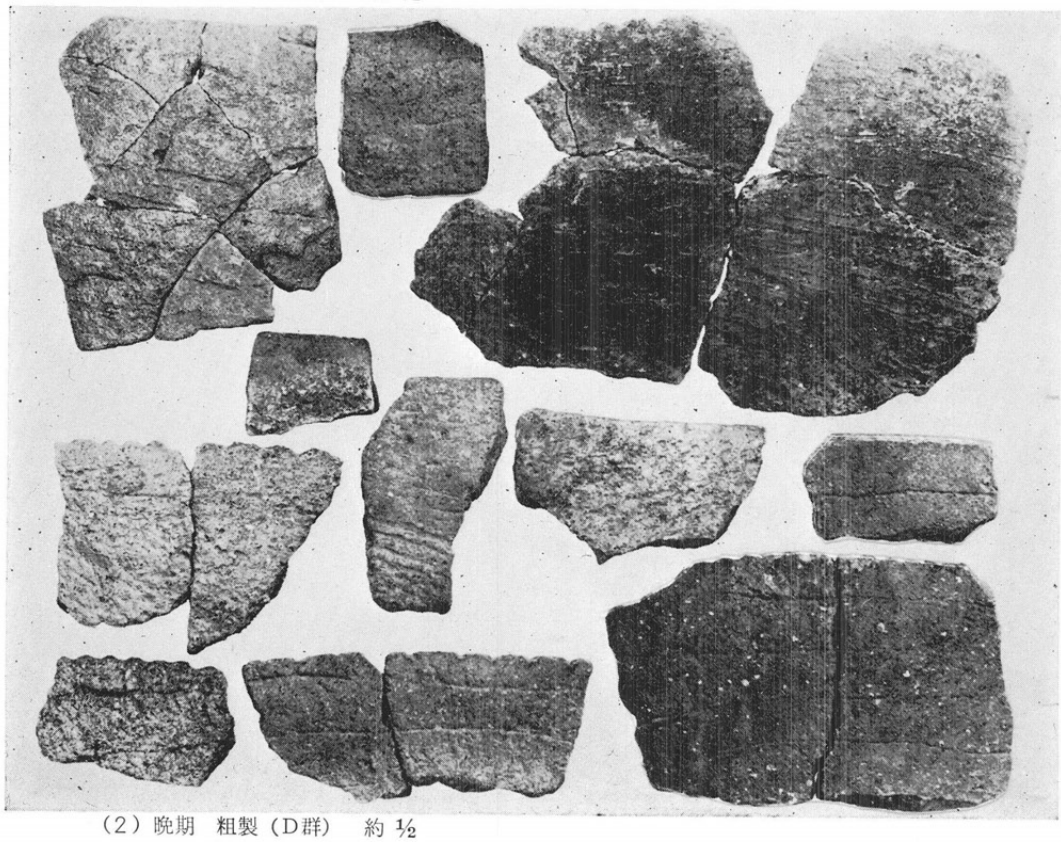
（1）晩期　粗製（C群）　約 ½



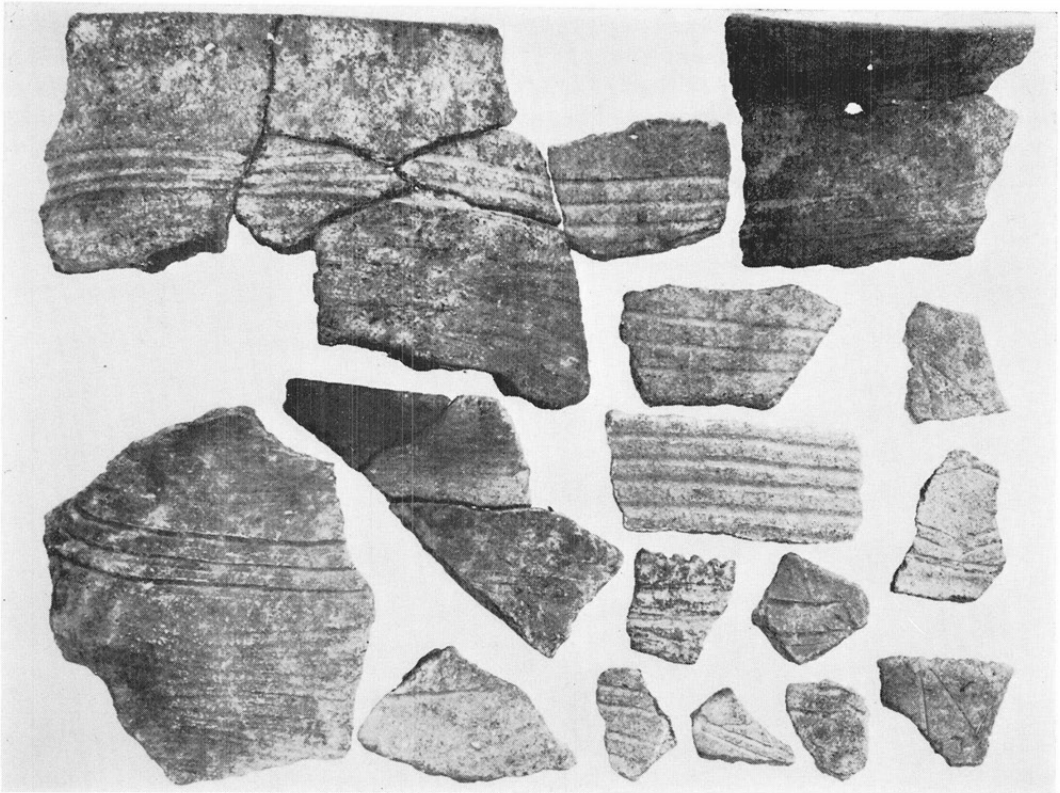
（2）晩期　粗製（C群）　約 ½



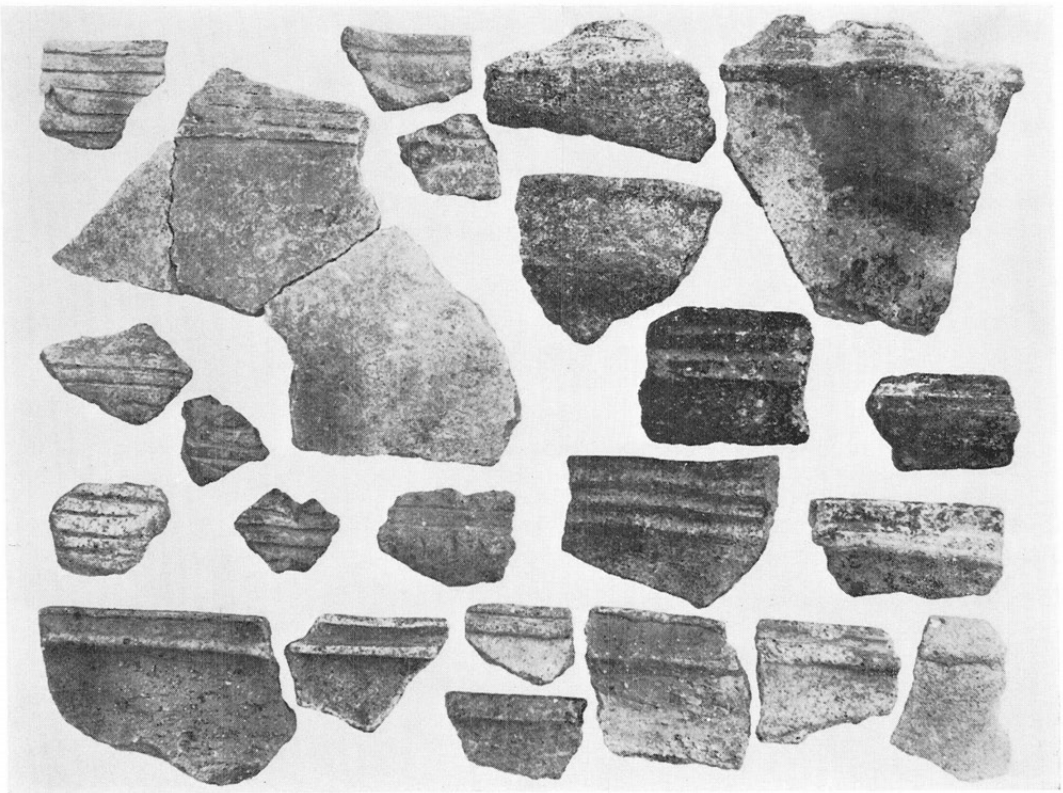
（1）晩期　粗製（D群）　約 ½



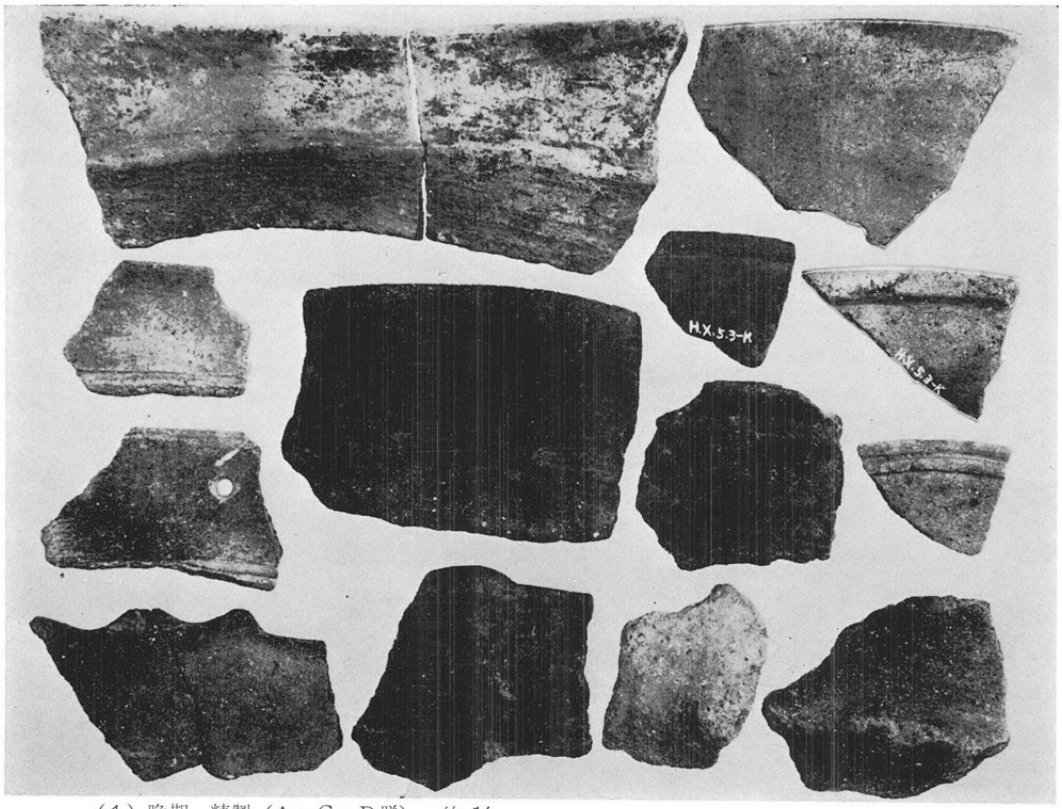
（2）晩期　粗製（D群）　約 ½



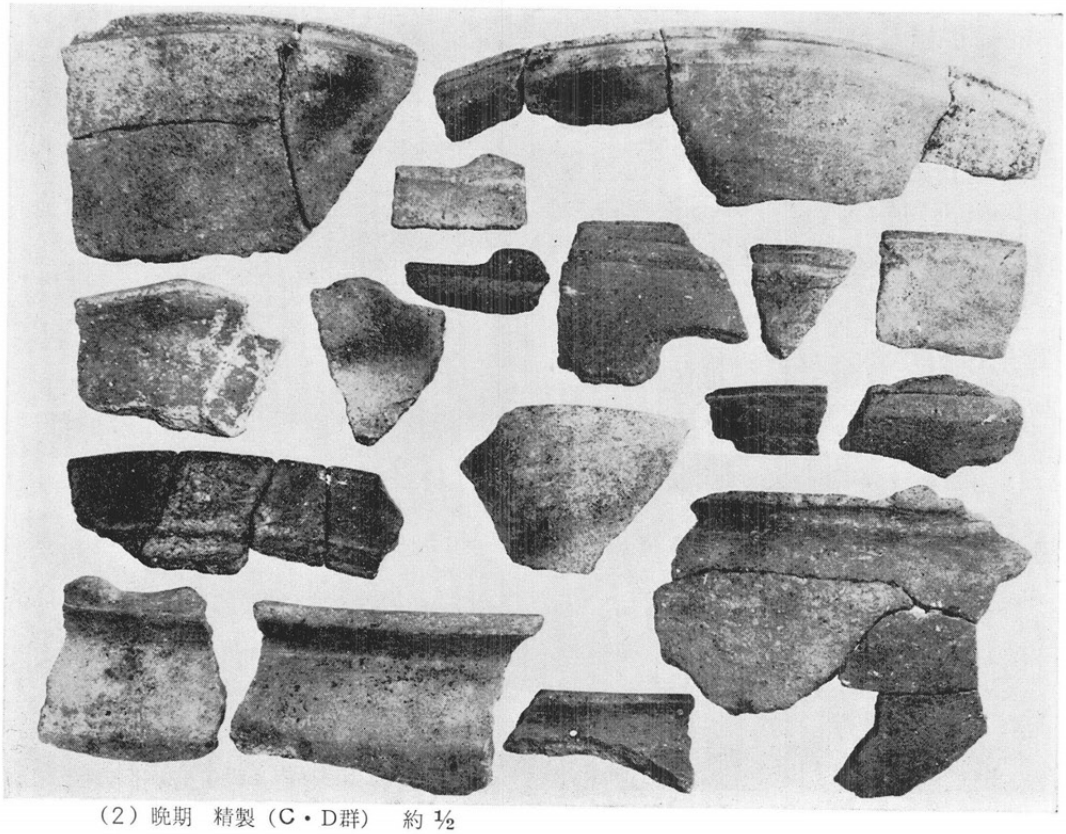
（1）晩期　沈線文精製・半精製（B～D群）　約 ½



（2）晩期　沈線文精製・凸帯文半精製（A～D群）　約 ½

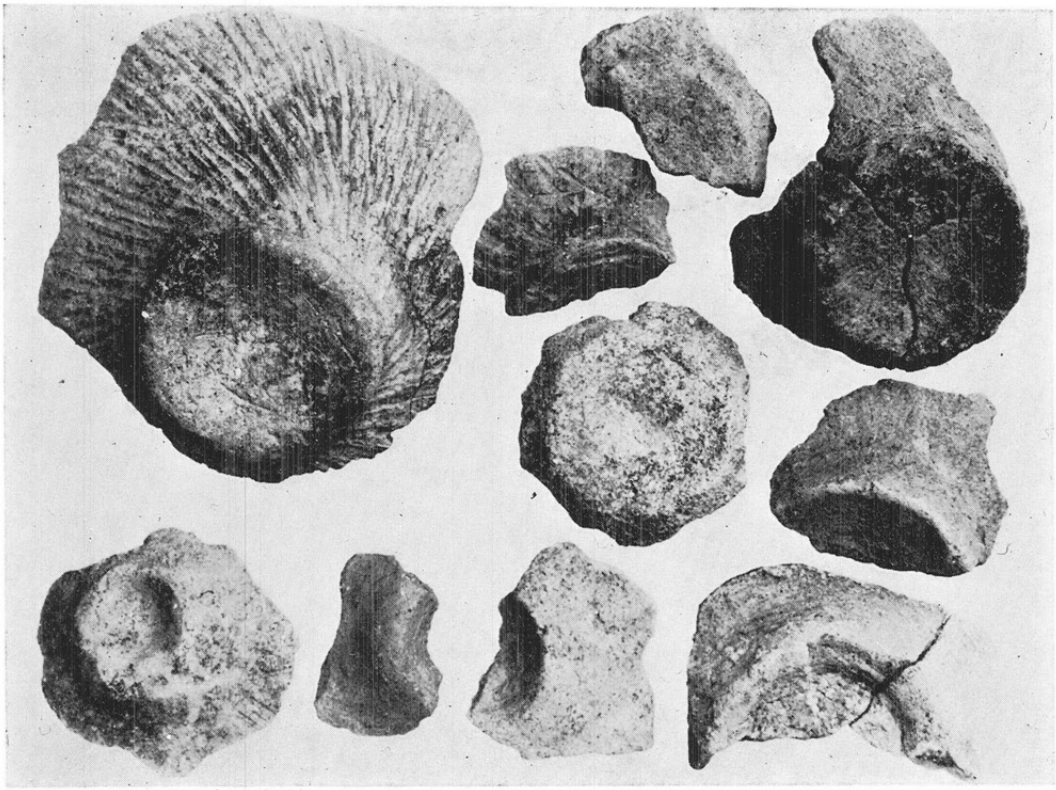


（1）晩期　精製（A・C・D群）　約 ½

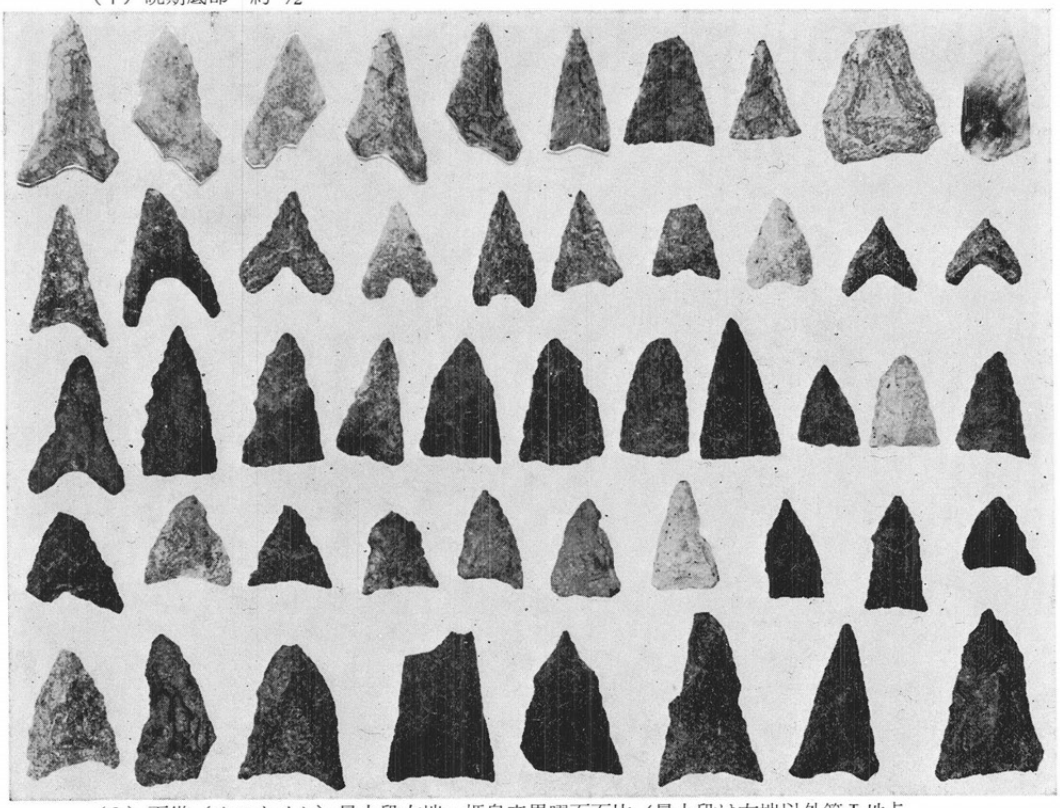


（2）晩期　精製（C・D群）　約 ½

図版第二十六　広江・浜遺跡（縄文土器・石器）

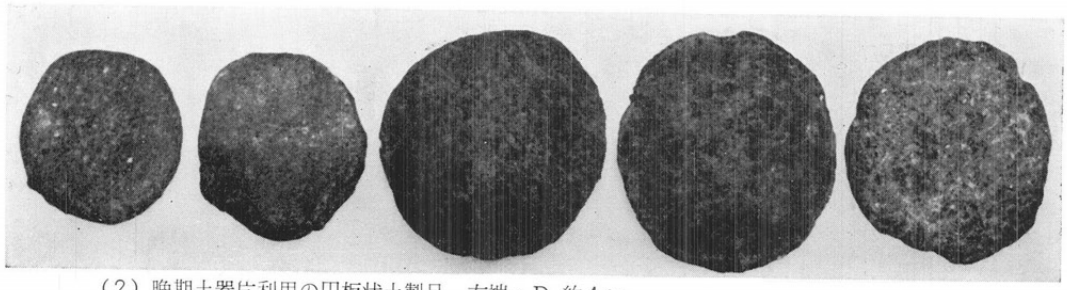


（1）晩期底部　約 ½

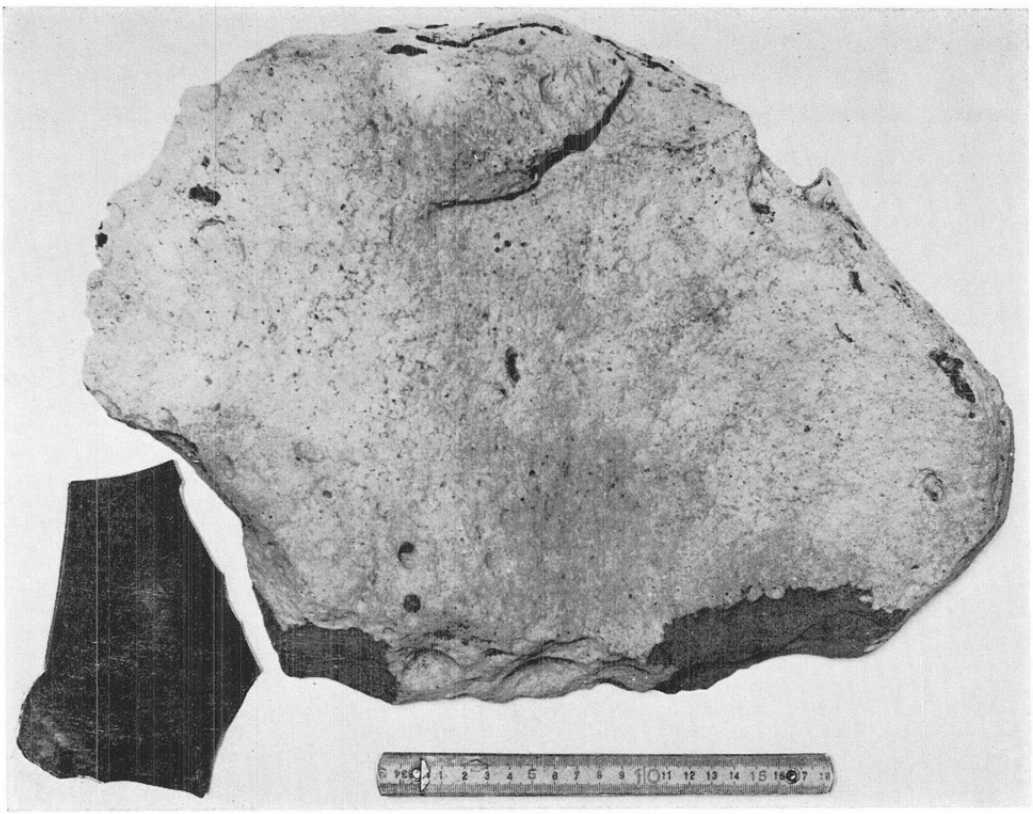


（2）石鏃（サヌカイト）最上段右端・姫島産黒曜石石片（最上段は右端以外第Ⅰ地点、他は全て第Ⅱ地点）　約 ⅔

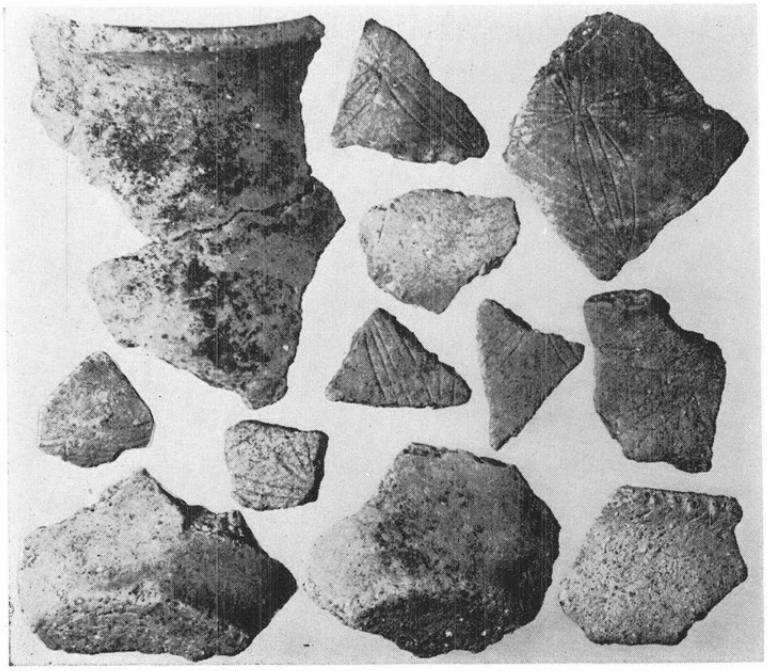
（1）スクレーパー（サヌカイト、最下段右端のみ黒曜石）最下段左より２番目石錐
同３番目石錐　約 ½



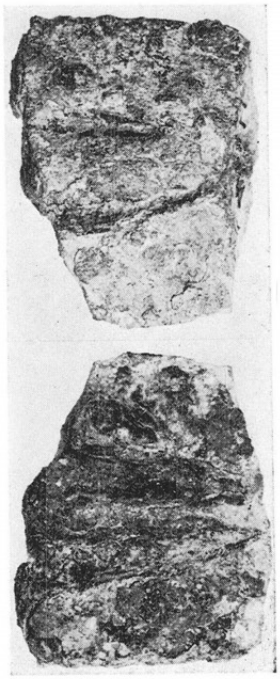
（2）晩期土器片利用の円板状土製品　右端・D.約4 cm



（1）縄文　サヌカイト製砥石（左）・サヌカイト原石（右）　約 1/3

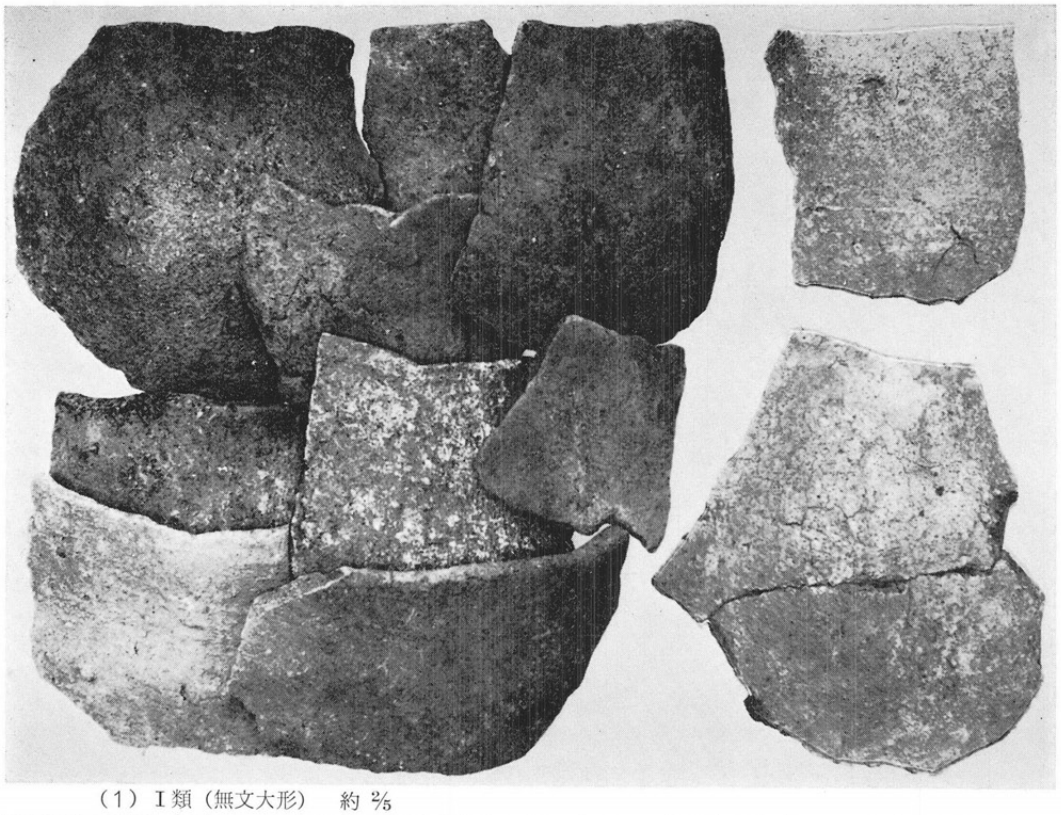


（2）弥生前期土器　約 1/2

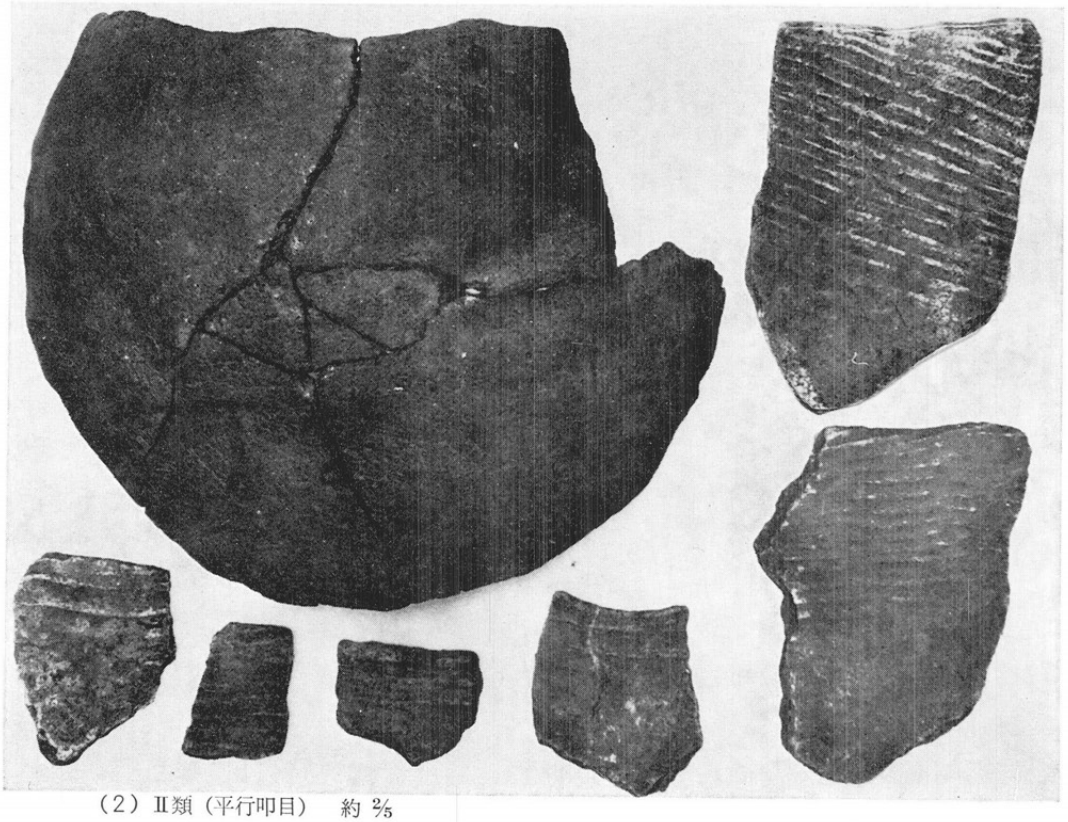


（3）銅戈片（両面）約 4/3

図版第二十九　広江・浜遺跡（古墳後期　製塩土器）

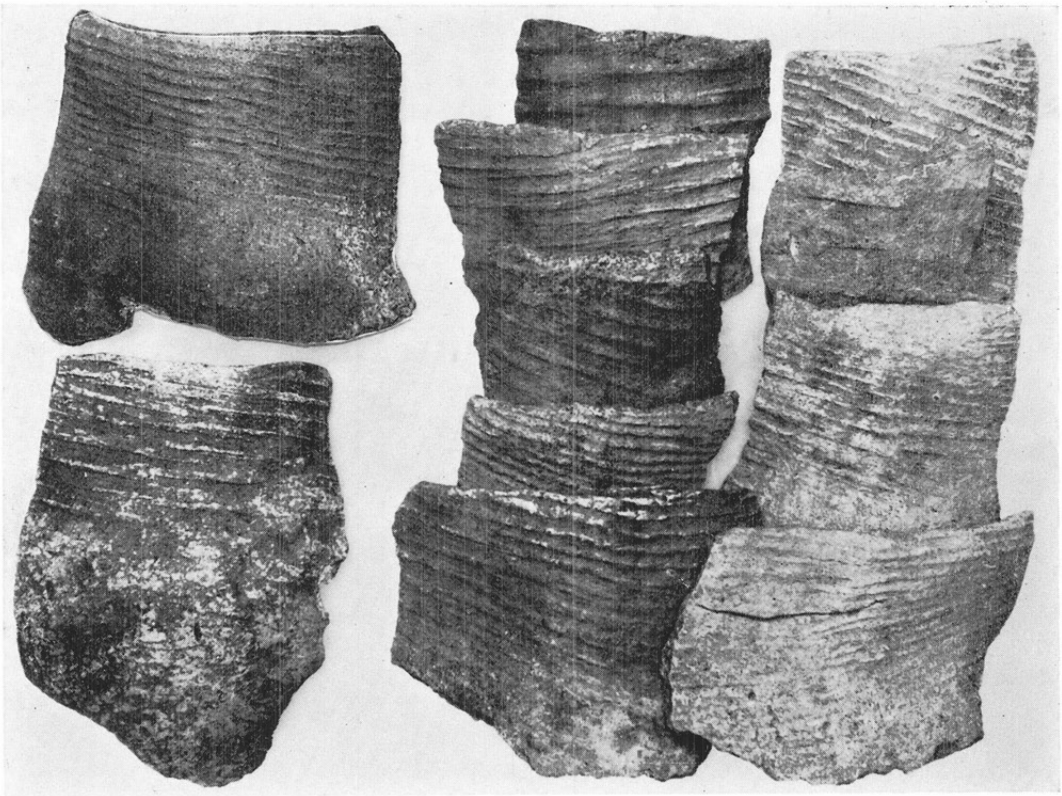


（1）Ⅰ類（無文大形）　約 2/5

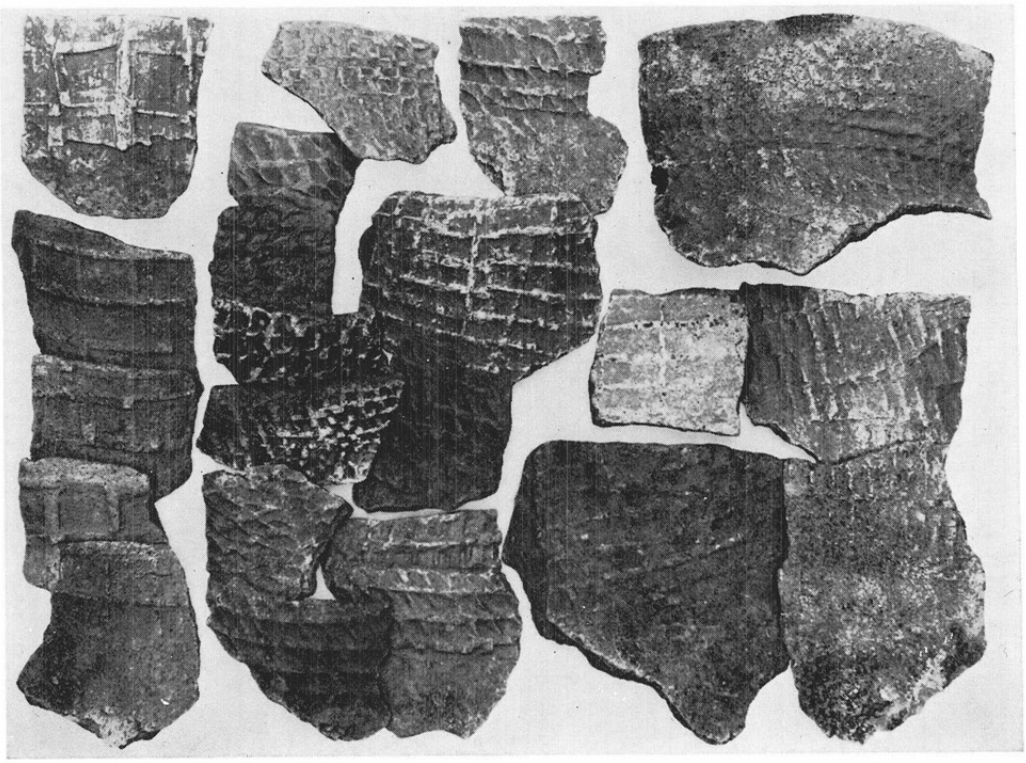


（2）Ⅱ類（平行叩目）　約 2/5

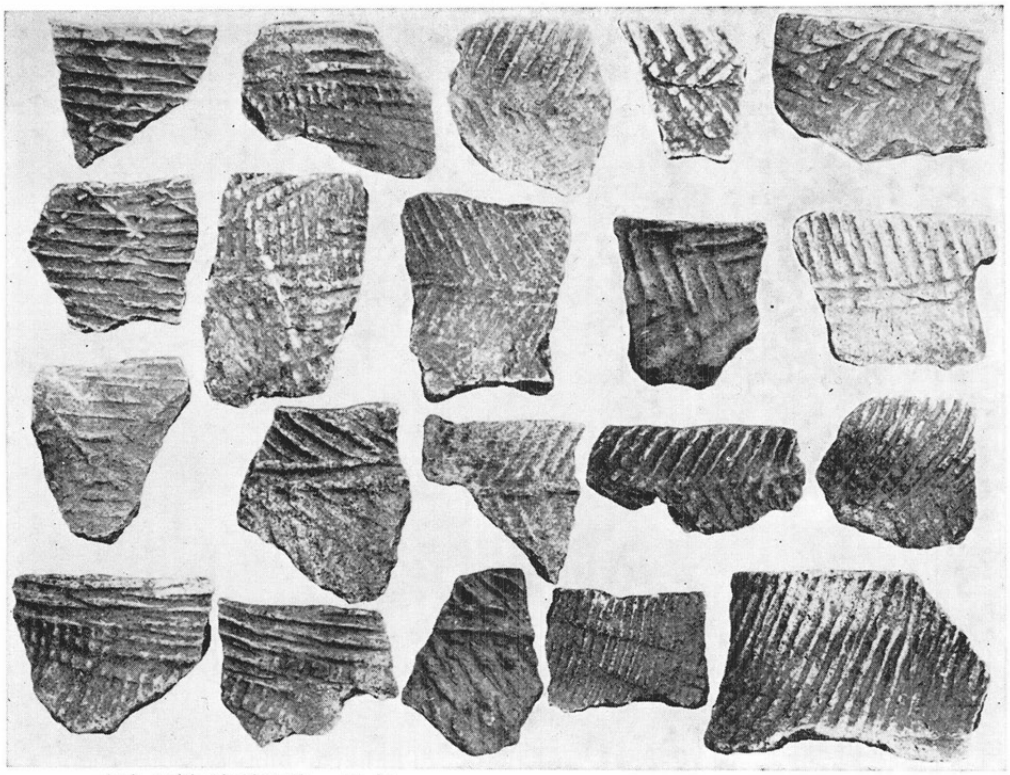
図版第三十　広江・浜遺跡（古墳後期　製塩土器）



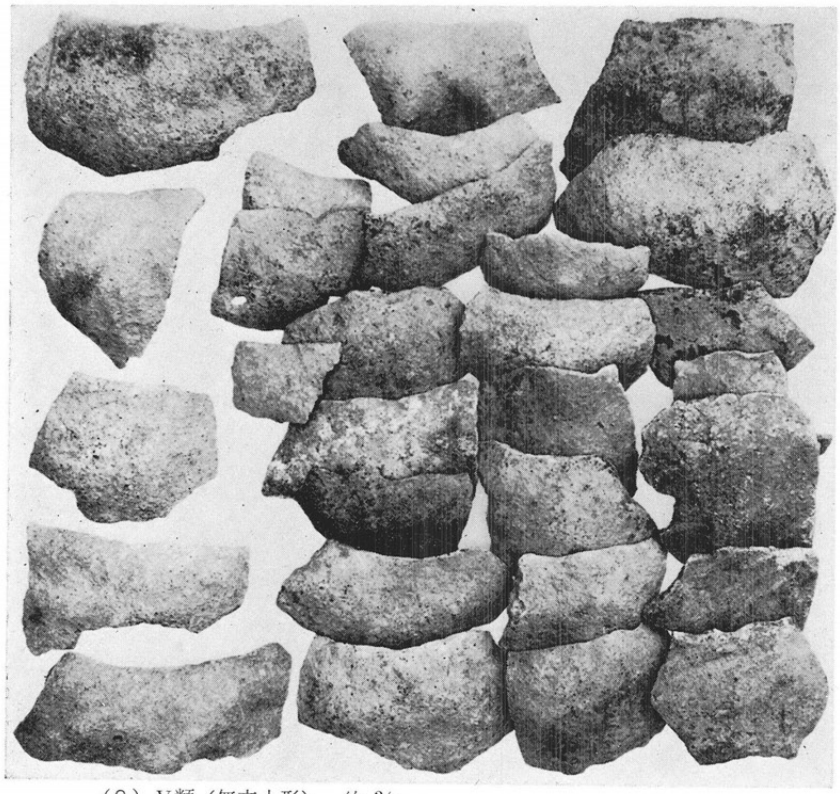
（1）Ⅱ類（平行叩目）　約 2/5



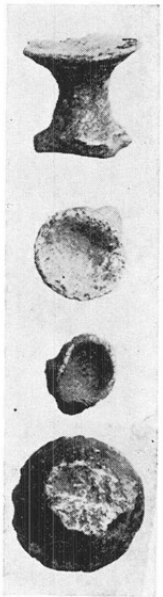
（2）Ⅲ類（格子叩目）　約 2/5



（1）Ⅳ類（各種叩目）　約 2/5

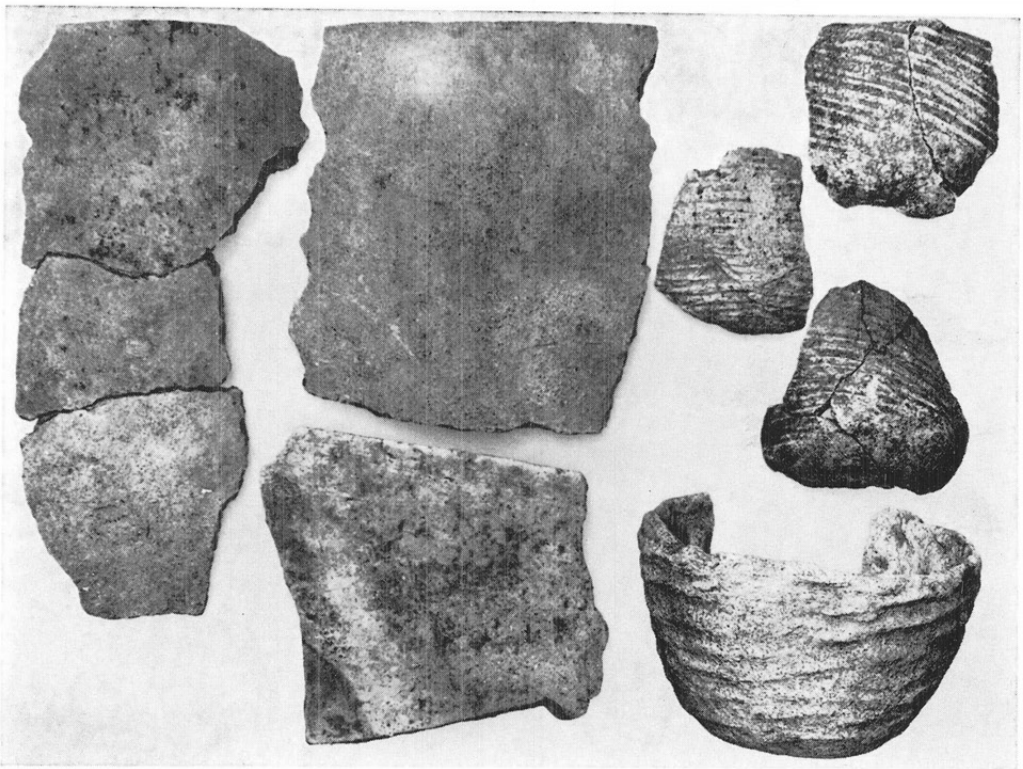


（2）Ⅴ類（無文小形）　約 2/5

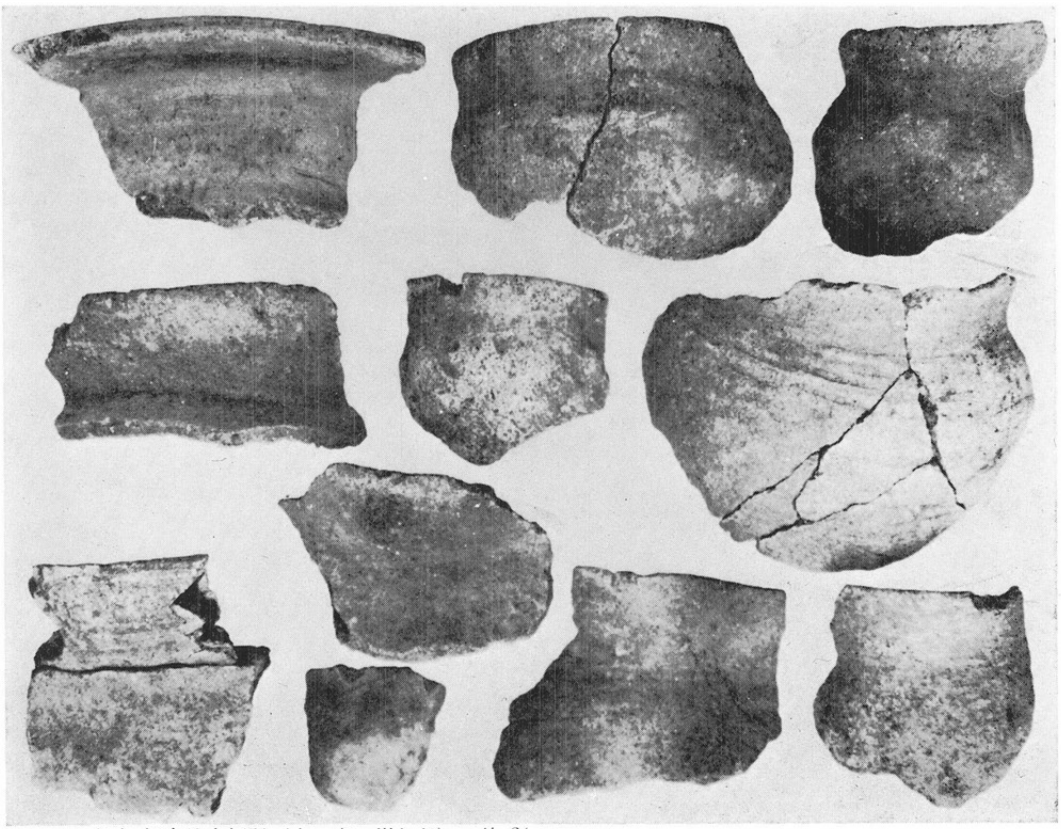


（3）台脚付
約 1/2

図版第三十二　広江・浜遺跡（古墳後期　土器）

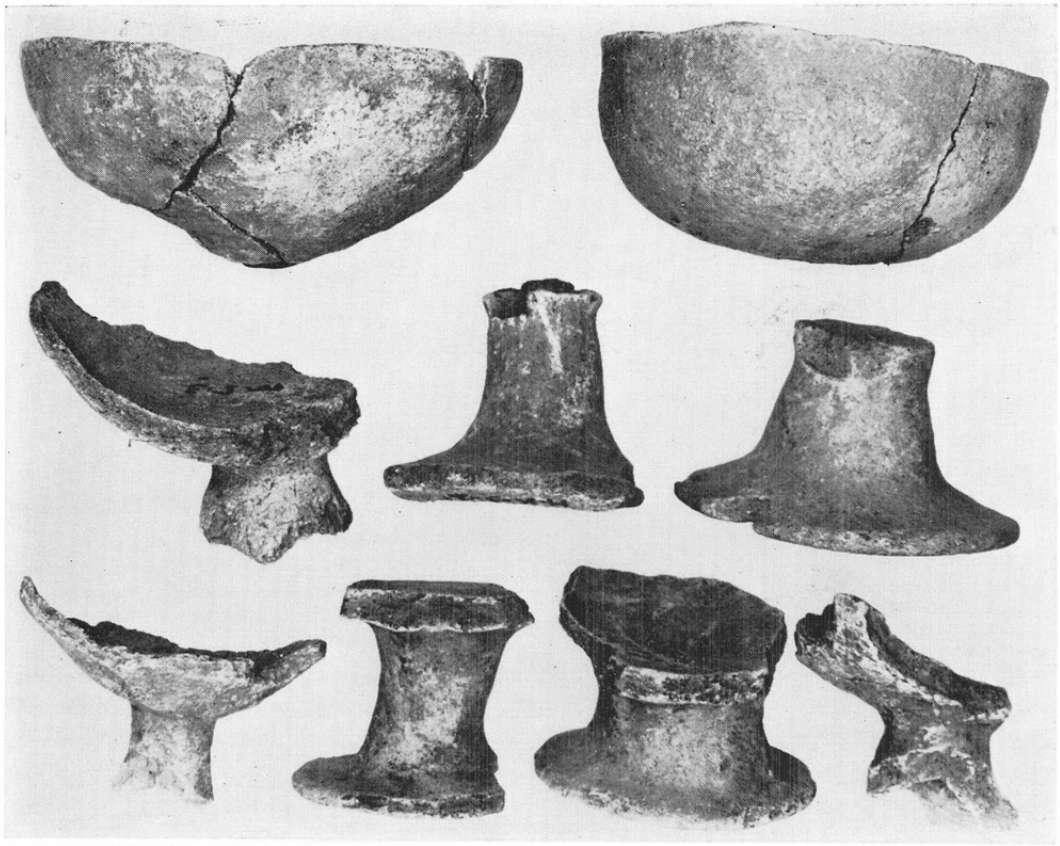


（1）類製塩土器　約 2/3

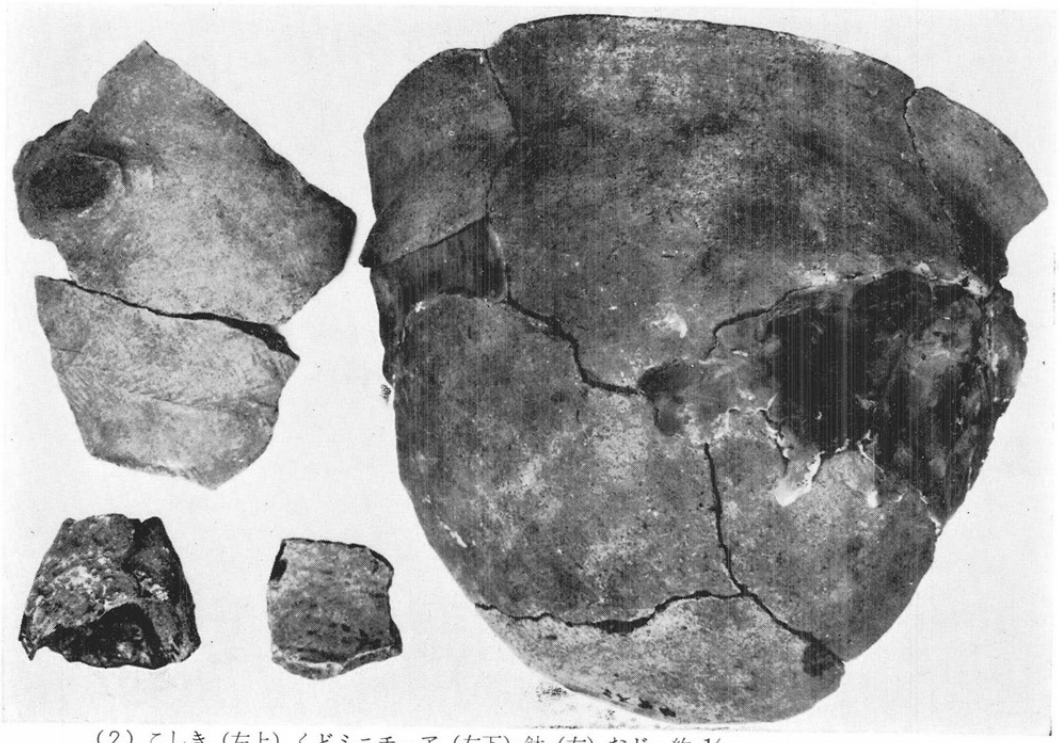


（2）師楽的土師器（壷・甕・坩など）　約 2/3

図版第三十三　広江・浜遺跡（古墳後期　師楽的土師器）

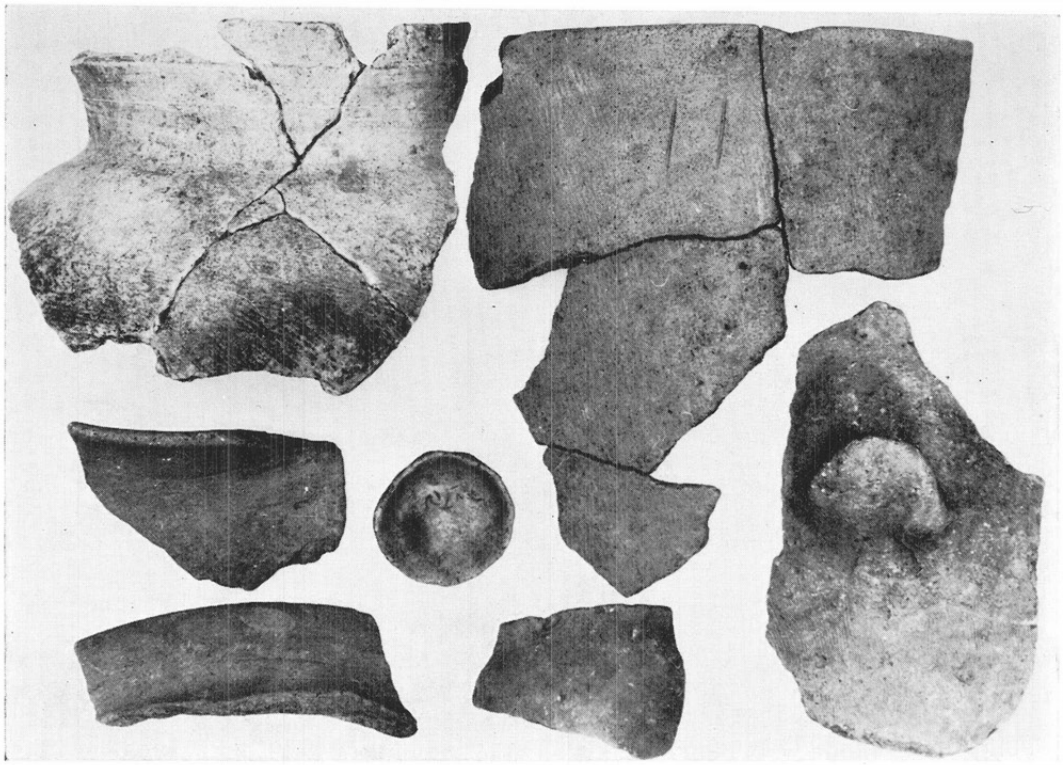


（1）高坏・椀など　約 ½

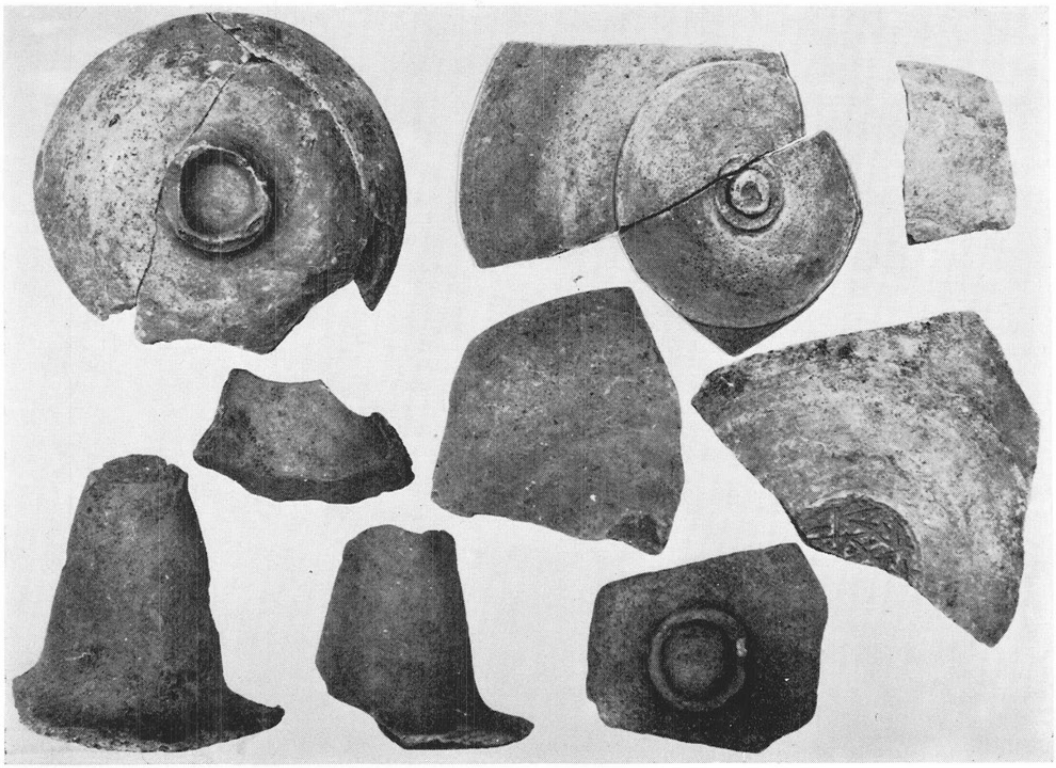


（2）こしき（左上）くどミニチュア（左下）鉢（右）など　約 ⅓

図版三十四　広江・浜遺跡（古墳後期　土師器）

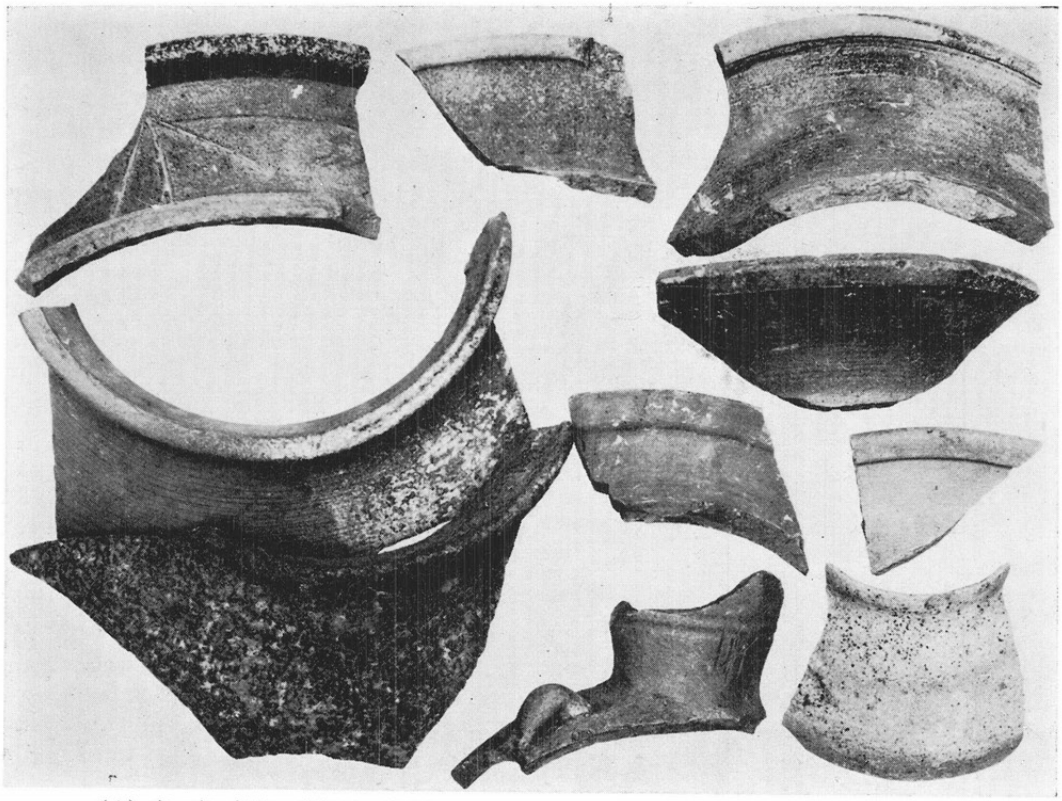


（1）壷・甕・こしき（右下端）など　約 2/5



（2）高坏　約 2/5

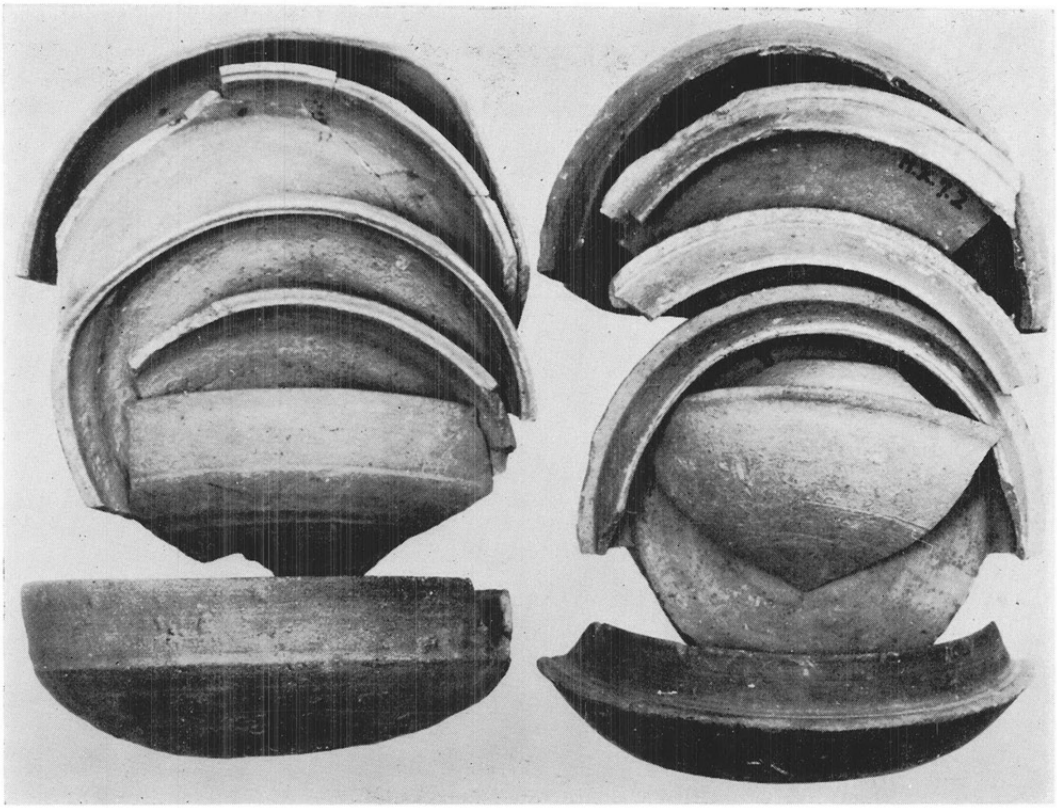
図版三十五　広江・浜遺跡（古墳後期　須恵器）



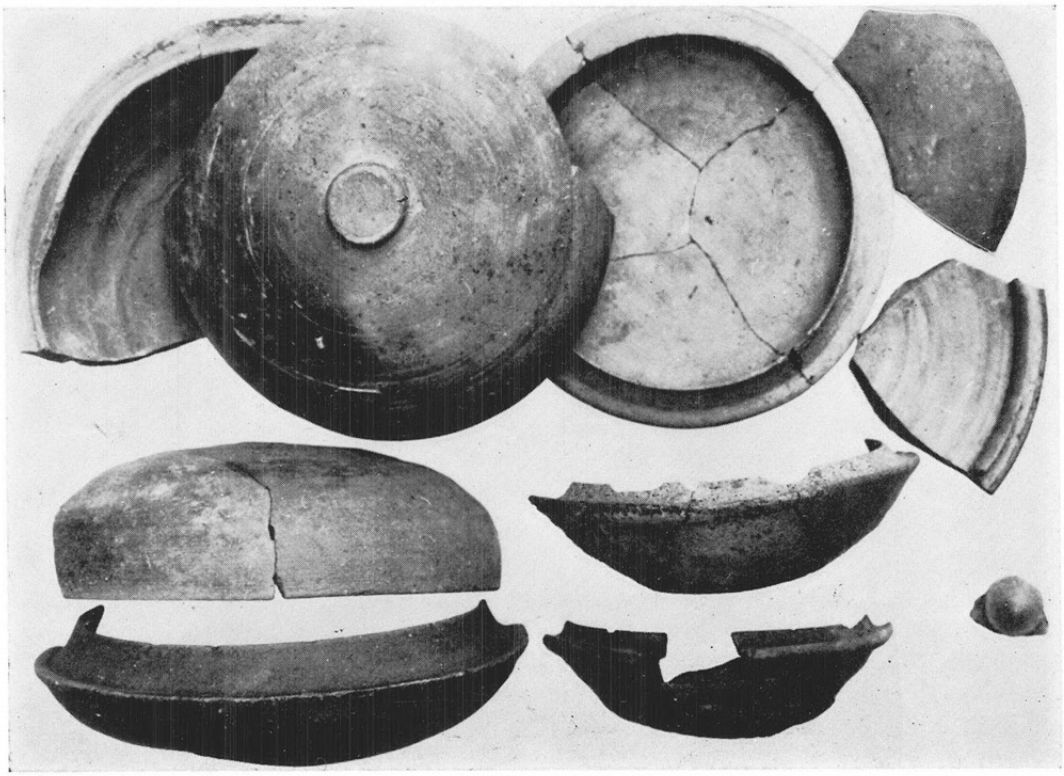
（1）壷・甕・提瓶・坩など　約 1/3

（2）高坏など　約 1/3

図版三十六　広江・浜遺跡（古墳後期　須恵器）

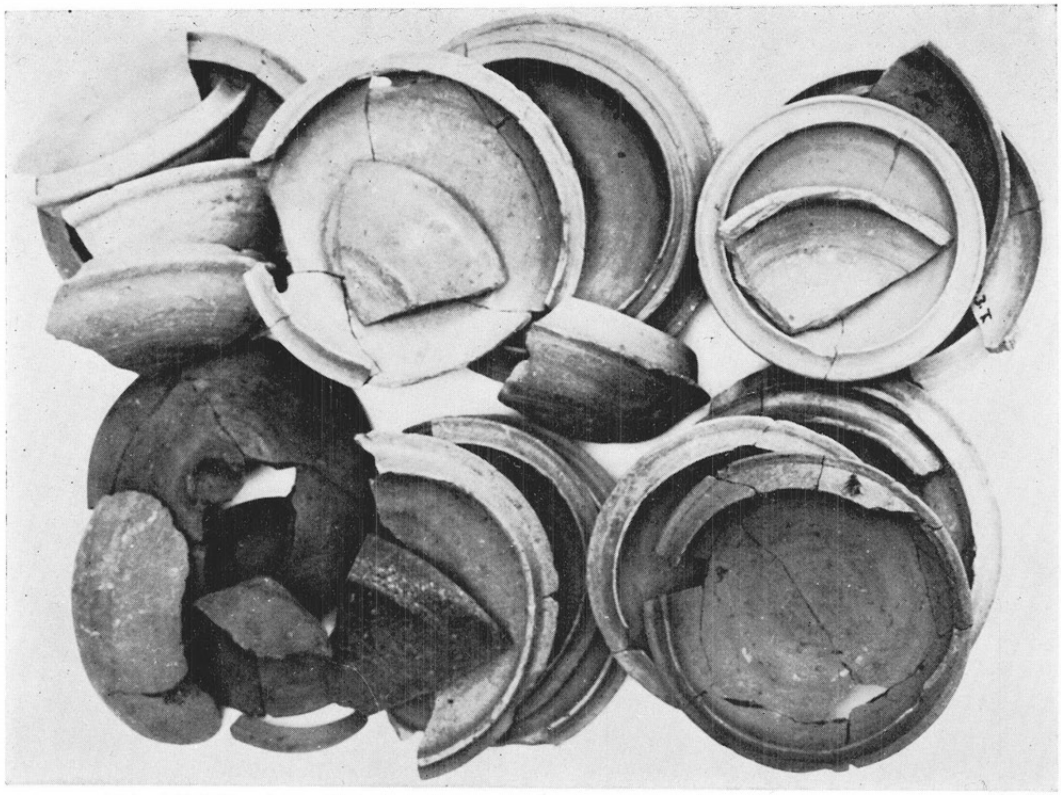


（1）蓋坏　約 2/5

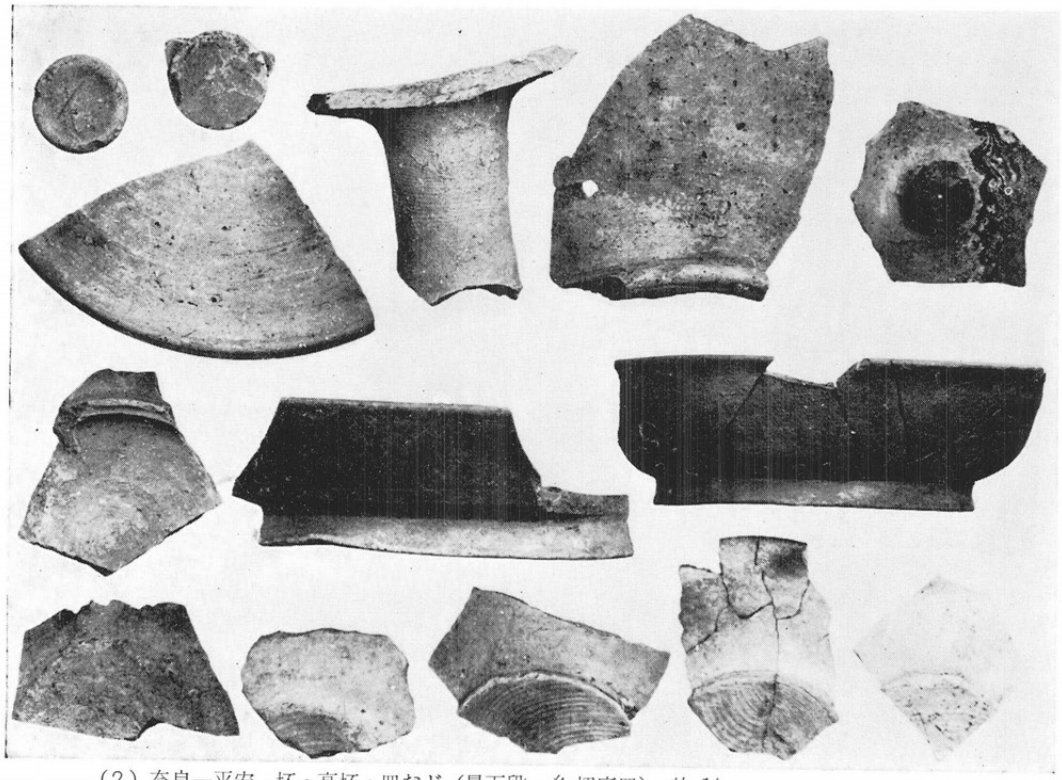


（2）蓋坏　約 2/5

図版第三十七　広江・浜遺跡（古墳後期〜平安　須恵器）

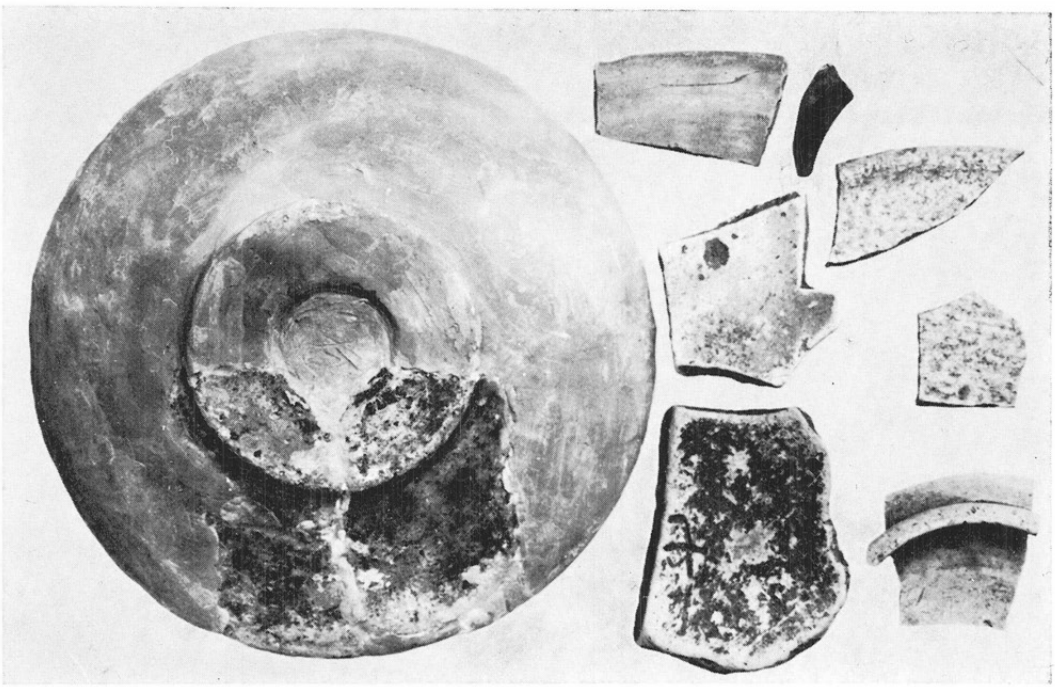


（1）古墳後期　蓋坏・高坏など　約 1/3

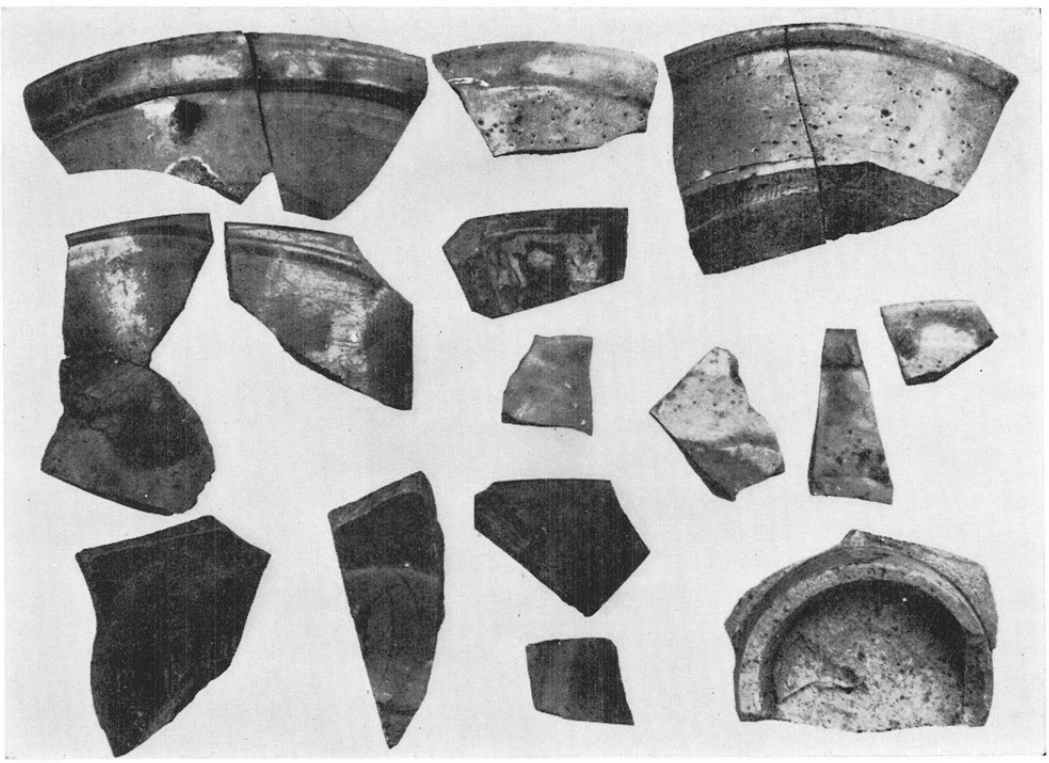


（2）奈良—平安　坏・高坏・皿など（最下段、糸切底皿）　約 1/3

図版第三十八　広江・浜遺跡（平安〜鎌倉　陶磁器）

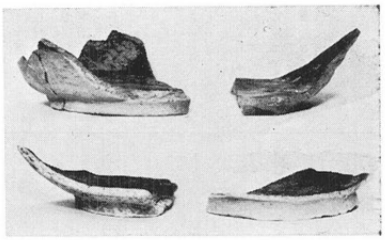


（1）平安　右端3点灰釉・中央下端記銘陶片・他は緑釉　約 ½

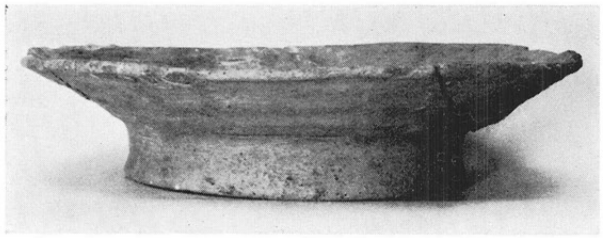


（2）平安末—鎌倉　青・白磁　約 ½

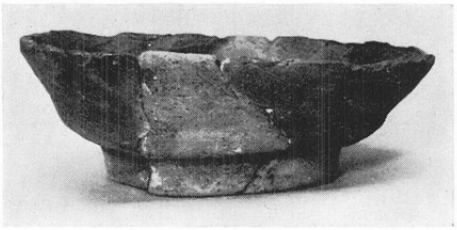
（1）平安　内黒土師器椀　D.19cm



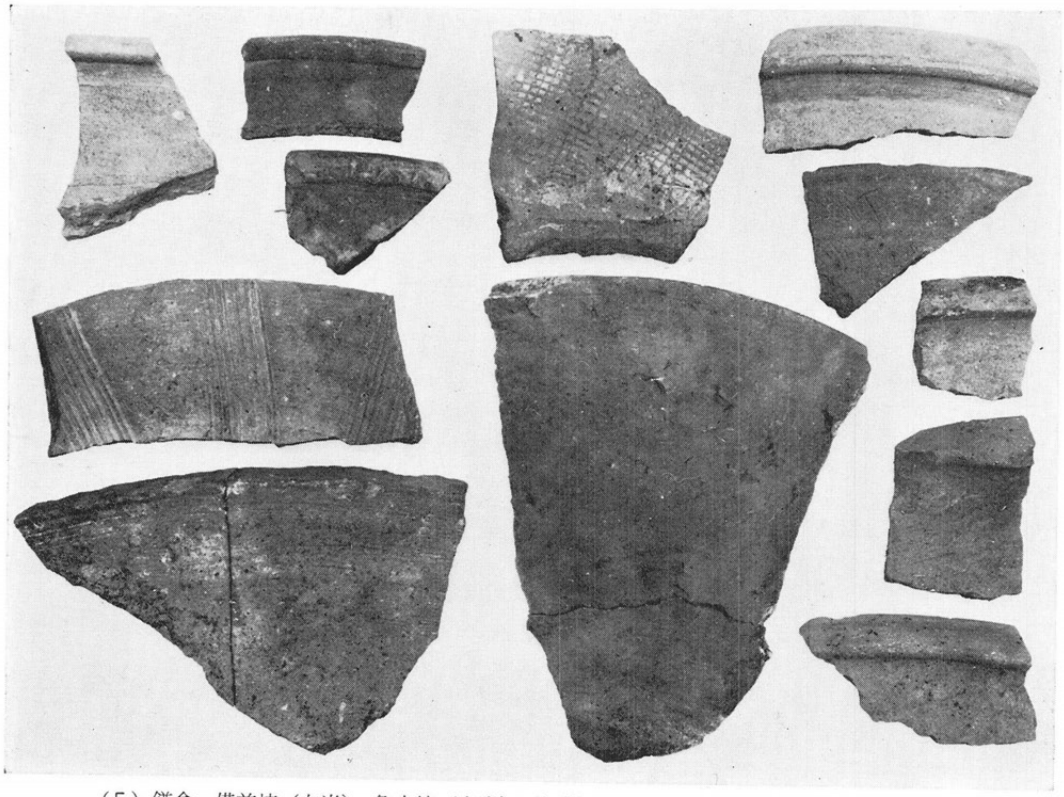
（2）平安　内黒土師器椀　約 1/3



（3）平安　土師器皿　D.14.5cm

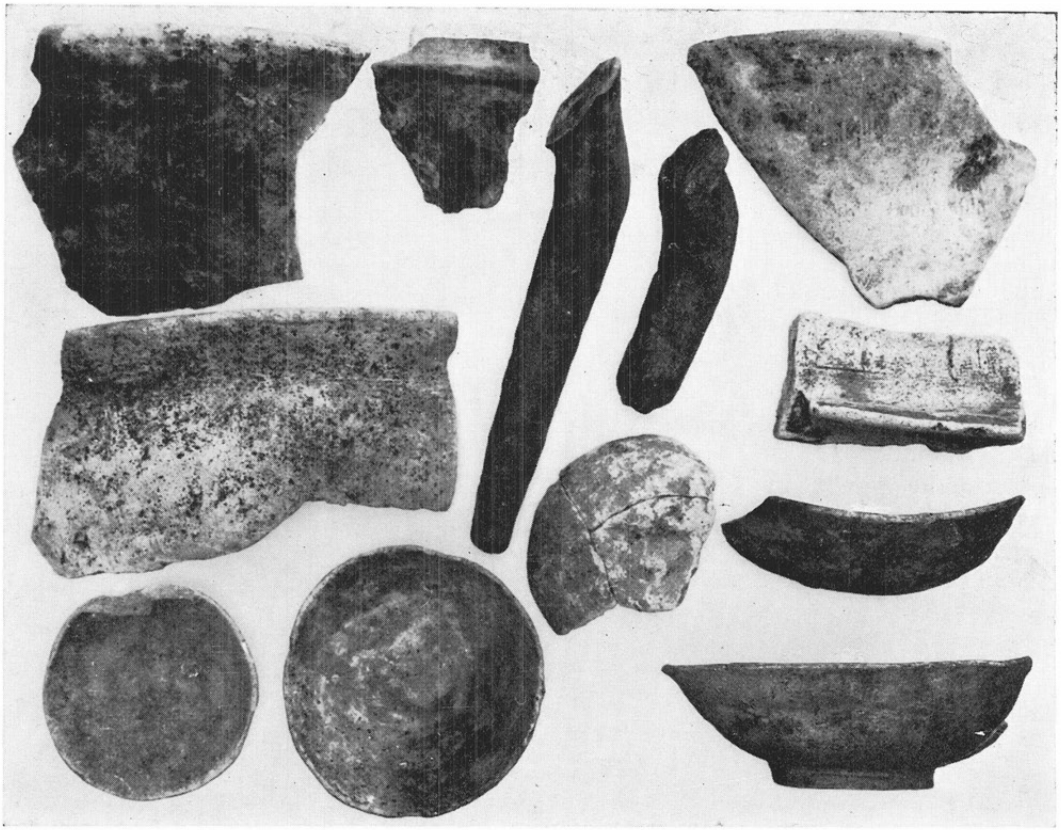


（4）平安　土師器椀　D.14cm

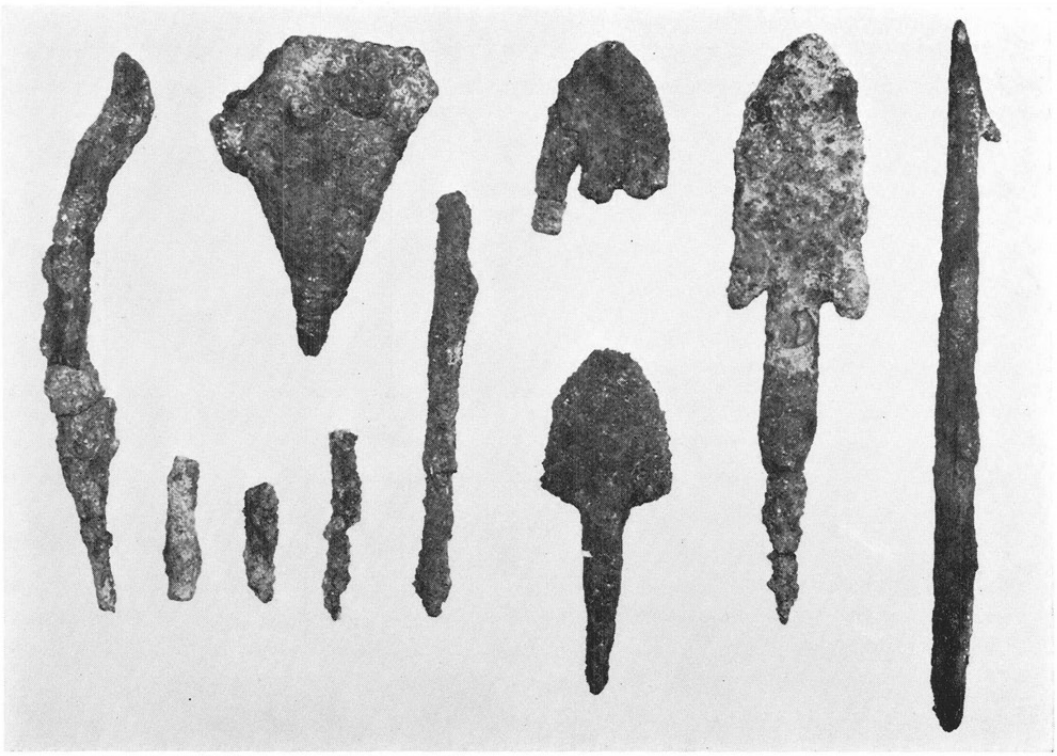


（5）鎌倉　備前焼（左半）・亀山焼（右半）　約 2/5

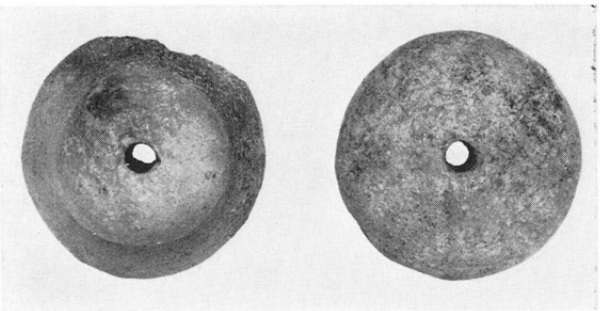
図版第四十　広江・浜遺跡（中世土師器・古墳後期鉄器）



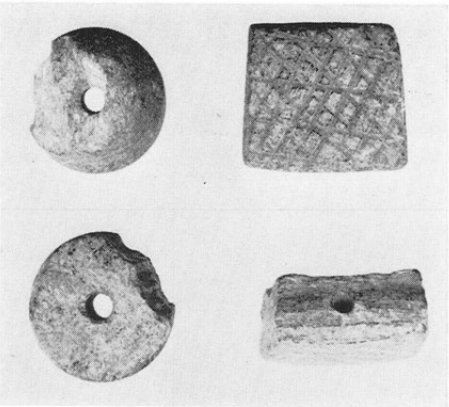
（1）中世土師器　土鍋・椀・小皿　約 1/3



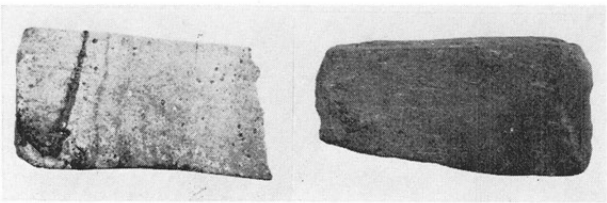
（2）古墳後期鉄器　鏃・鋸など　約 2/3



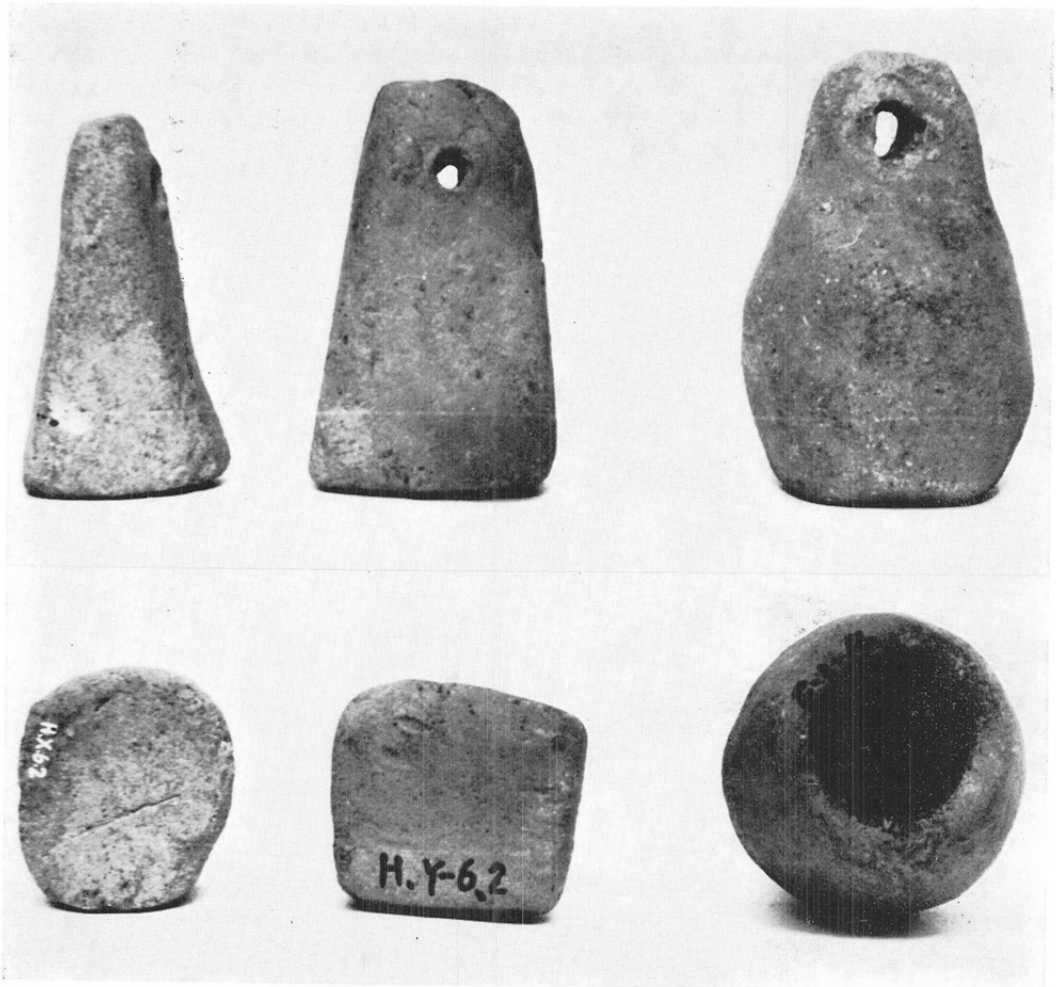
（1）古墳後期　土製紡錘車　右・D.5.5cm



（2）古墳後期　滑石製紡錘車・中世不明滑石製品断片（上・表面、下別面）左・D.3.4cm



（3）古墳後期　砥石　約 1/2

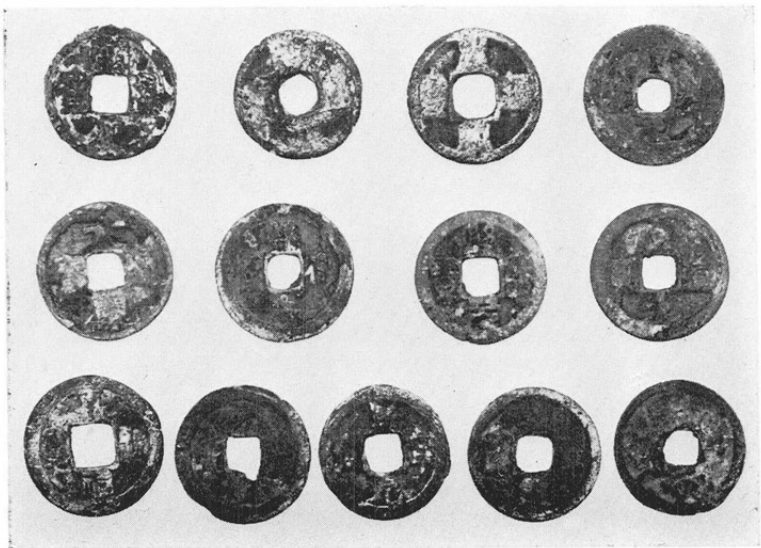


（4）古墳後期　鐘形土錘・飯蛸壷（右端）の側面と下面　約 2/3

図版第四十二　広江・浜遺跡（古墳後期～中世　土錘・銅銭）

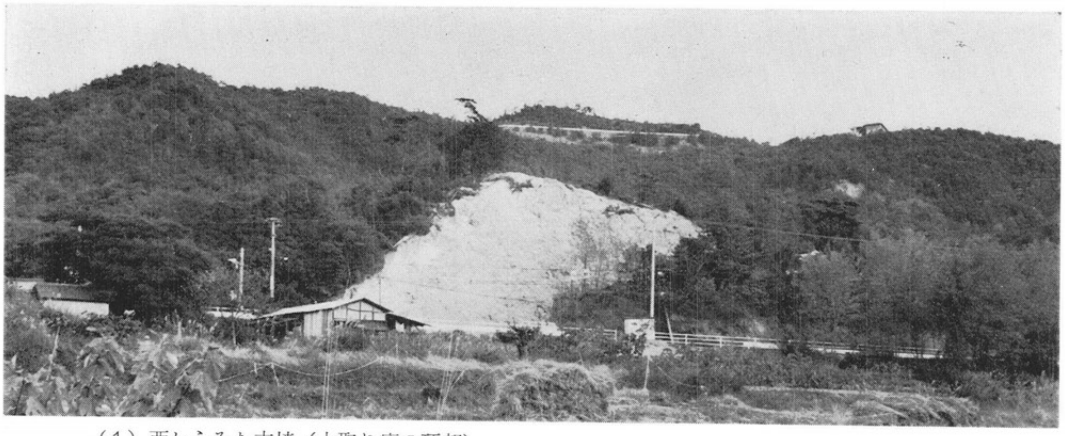
（1）古墳後期～中世　土錘　約 2/3

（2）「億」字刻文土錘
L.4.4cm



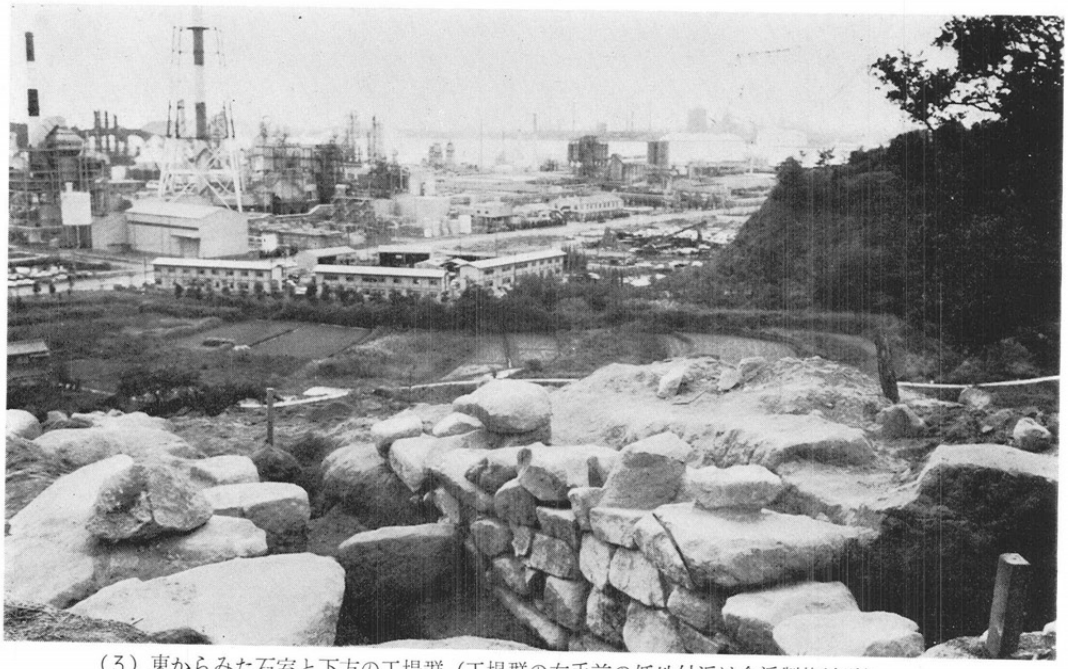
（3）宋銭　右上・D.2.5cm

図版第四十三　金浜古墳（遺跡の状況）



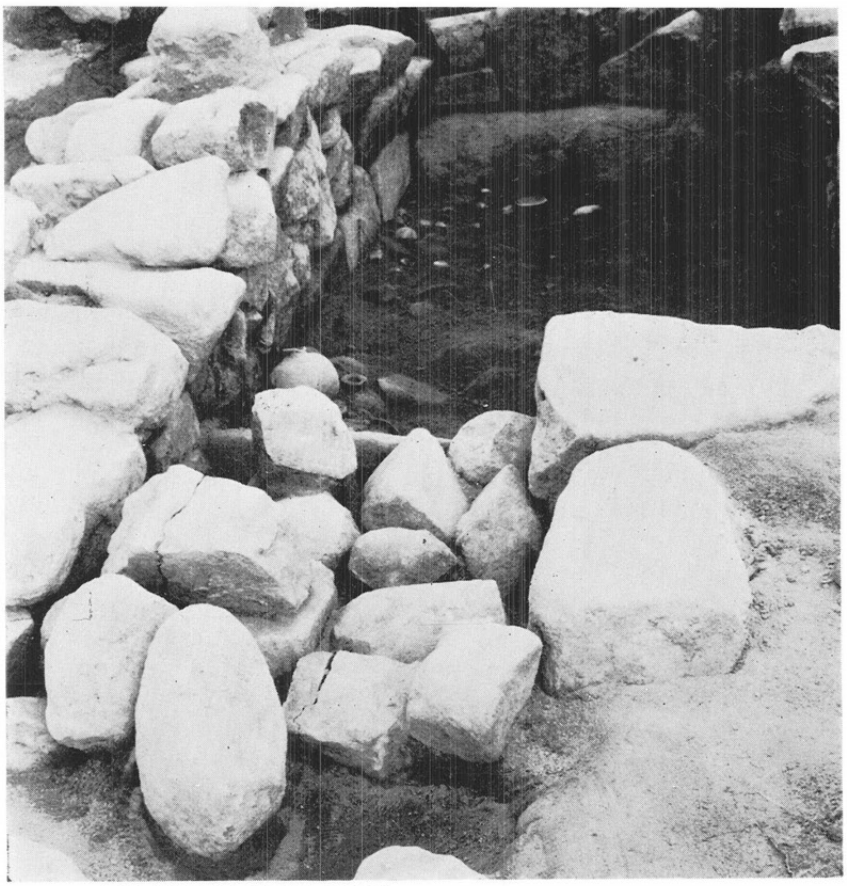
（1）西からみた古墳（土取り痕の頂部）

（2）東からみた墳丘

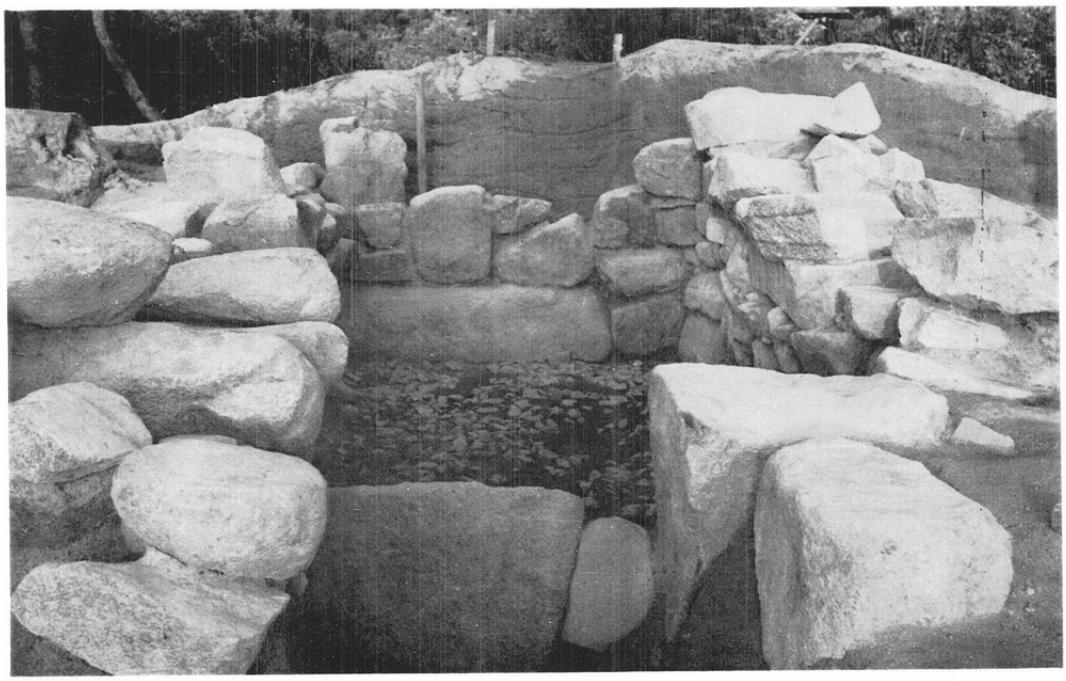


（3）東からみた石室と下方の工場群（工場群の左手前の低地付近は金浜製塩遺跡）

図版四十四　金浜古墳（石室の状況）



（1）羨道閉鎖（手前）と玄室



（2）閉鎖石を一部除いた羨道部より玄室をみる

図版第四十五　金浜古墳（石室の状況）

（1）玄室遺物出土状況全景（奥壁側から羨道方向をみる）

（2）玄室入口部分須恵器出土状況

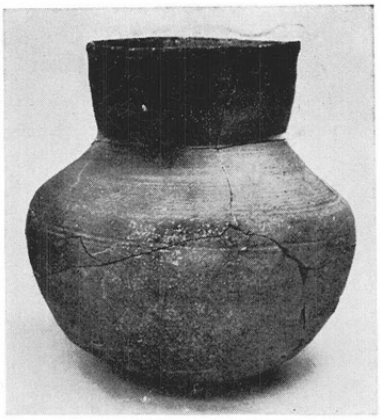
図版第四十六　金浜古墳（石室の状況）

（1）奥壁側より羨道をみる

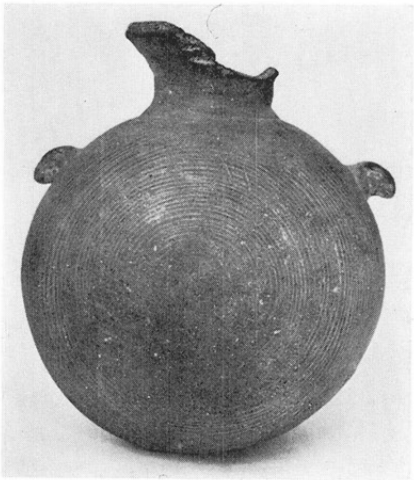
（2）羨道南より奥壁をみる

図版第四十七　金浜古墳（遺物　須恵器）

（1）横瓶　H.22.3cm



（2）坩　H.14.6cm



（4）提瓶　H.17.1cm

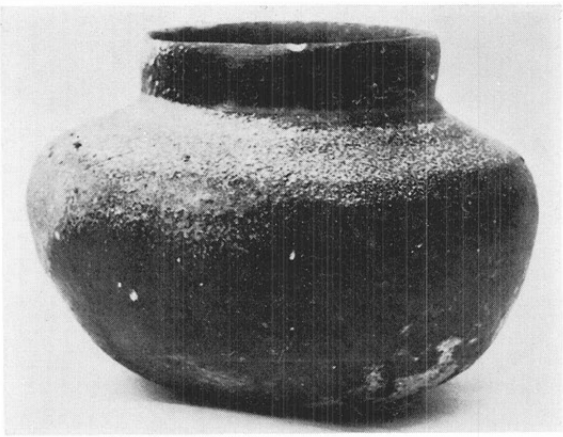
（3）提瓶　H.25.2cm

（5）提瓶　H.19cm

図版第四十八　金浜古墳（遺物　須恵器）

（1）壷　H.20.1cm

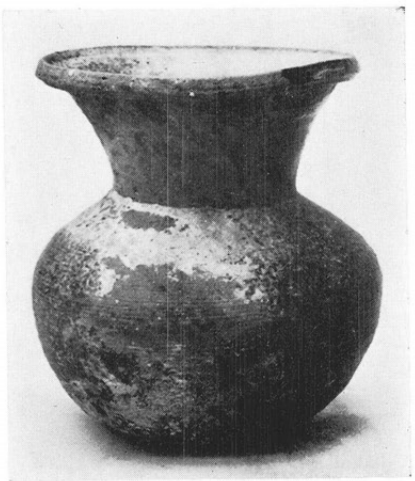
（4）壷　H.13.4cm



（2）坩　H.11cm

（5）壷　H.12.8cm

（3）坩　H.14.8cm

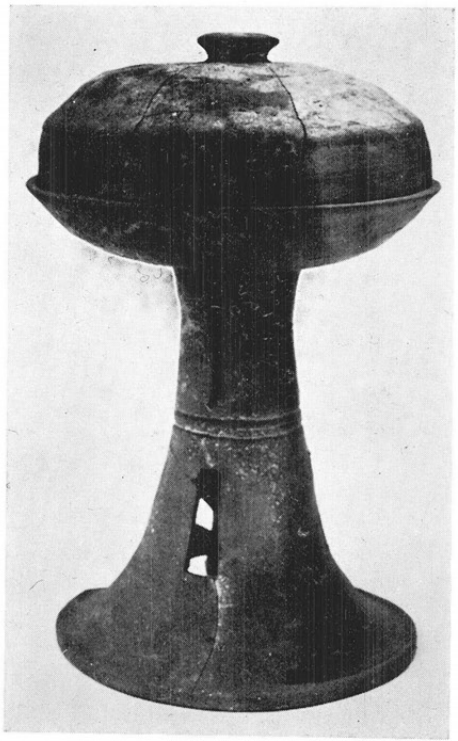


（6）壷　H.12.7cm

図版第四十九　金浜古墳（遺物　須恵器）

（1）高坏　H.19cm

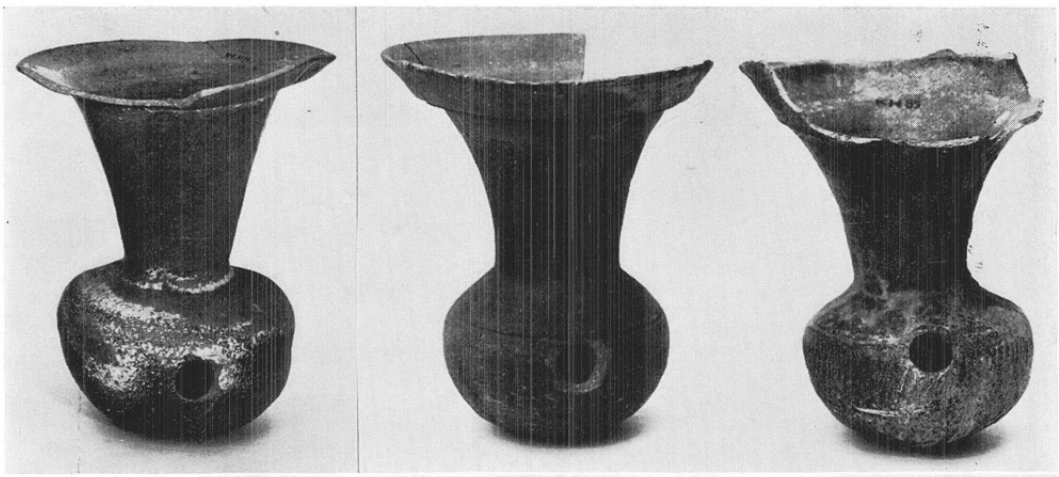
（2）高坏　H.23.8cm



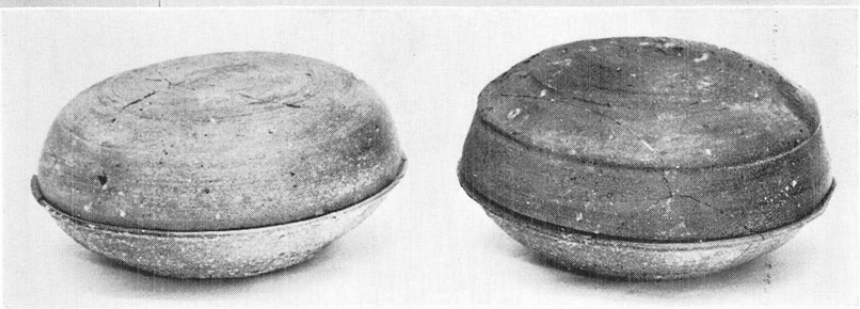
（3）高坏　H.24.4cm

（4）高坏　H.17.5cm

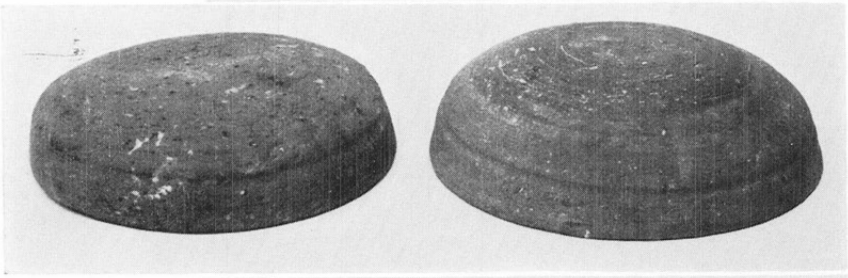
図版第五十　金浜古墳（遺物　須恵器）



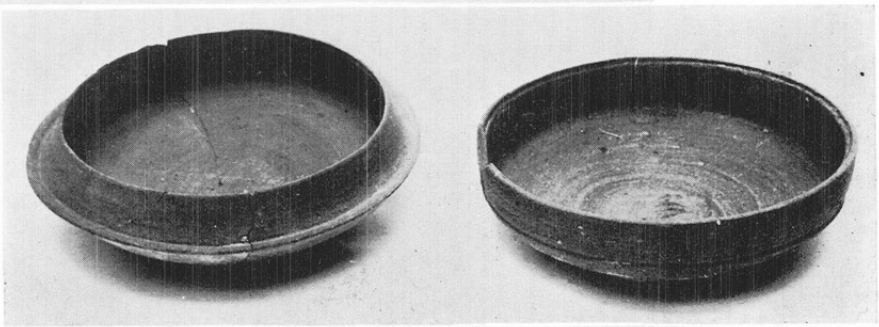
（1）はそう
左・H.15cm



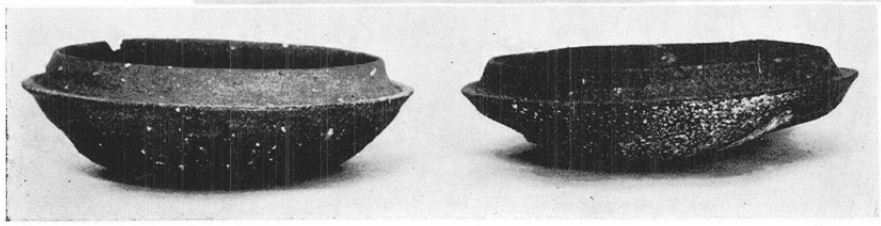
（2）蓋坏　約 1/3



（3）坏蓋
約 1/3



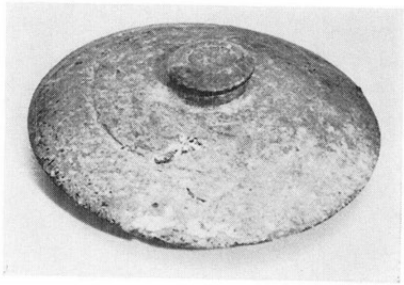
（4）坏身・蓋
約 1/3



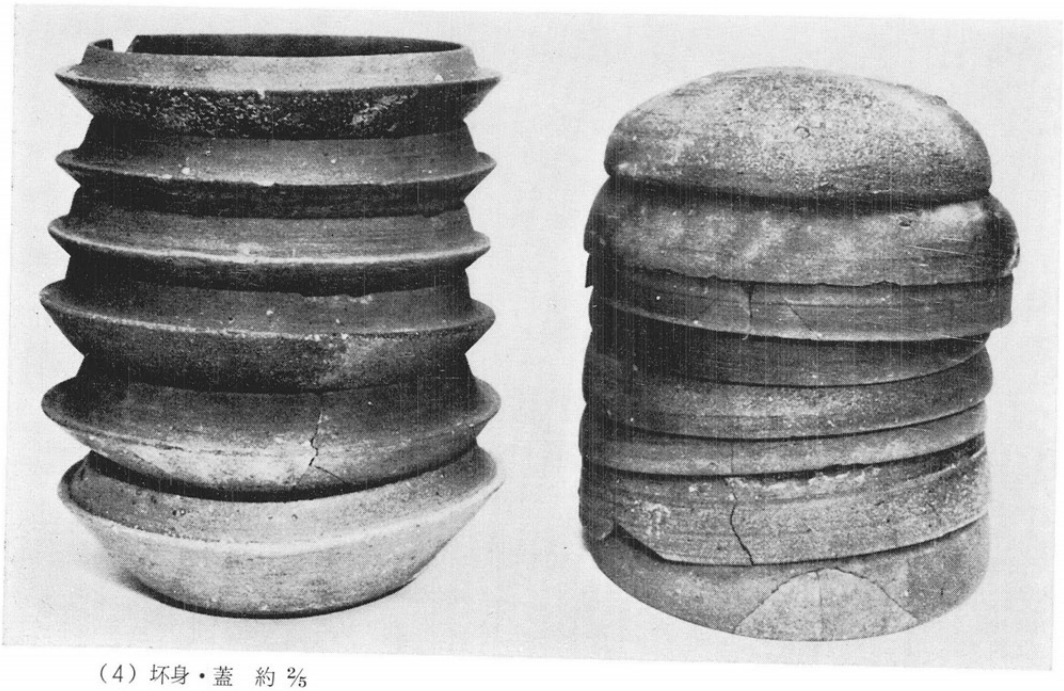
（5）坏身　約 1/3

（1）坏身　約 1/3

（2）坏身内面　約 2/3

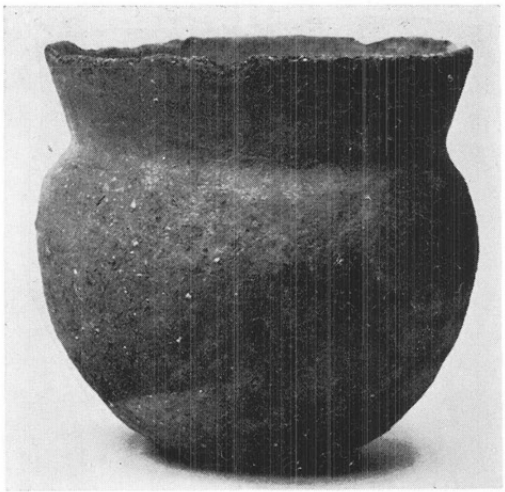


（3）蓋　D.10.9cm



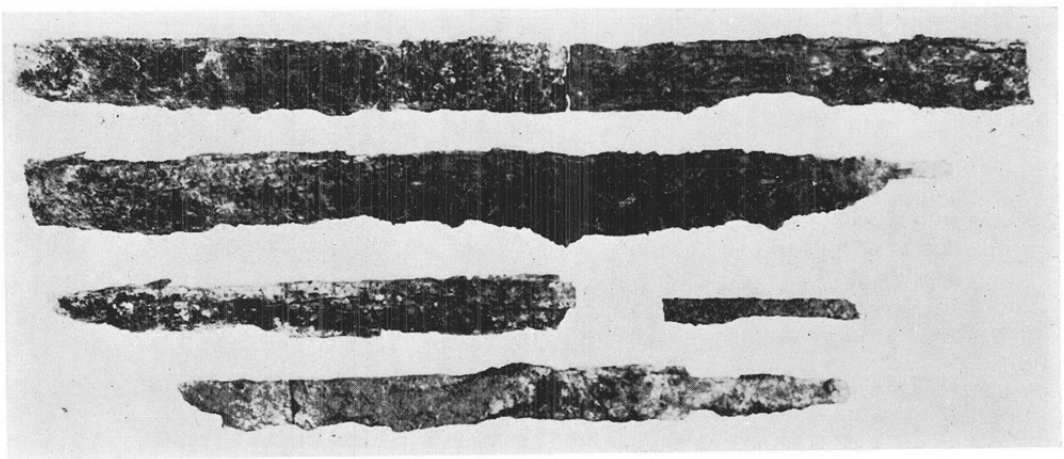
（4）坏身・蓋　約 2/5

図版第五十二　金浜古墳（土師器　鉄器など）

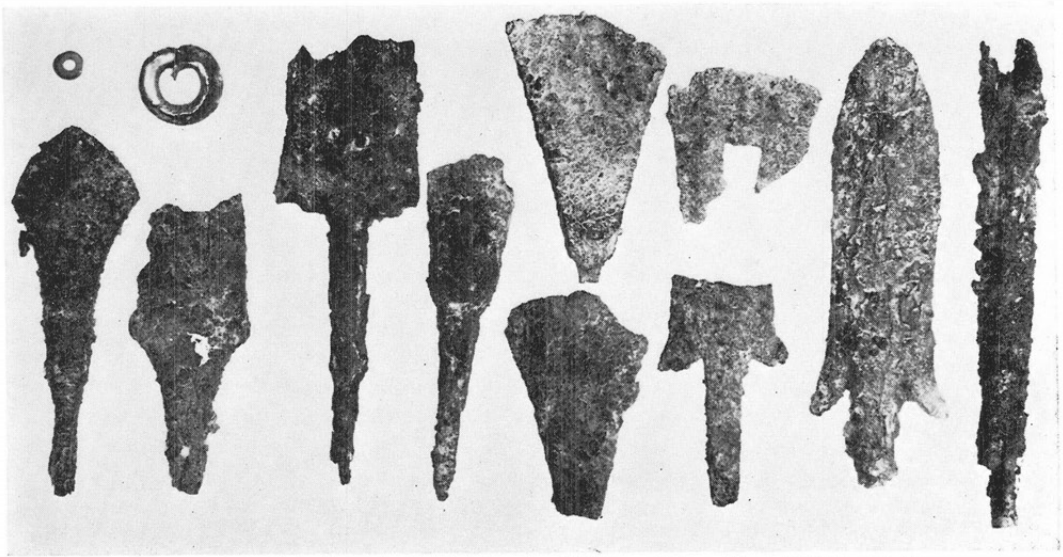


（1）土師器　壺　H.11.2cm

（2）土師器　椀　上・D.13.6cm



（3）鉄器・刀　約 1/6



（4）ガラス小玉（上左端）・金環（上左端より二番目）・鉄鏃・「やす」（右端）　約 1/2

広　江・浜　遺　跡

凡　例

本報告書は、調査を担当した間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司・小野一臣の共著であり、下記にその分担を記す。

1. 写真は、間壁忠彦・間壁葭子が撮影。
2. Ⅰ章・Ⅱ章は、間壁忠彦が製図執筆し、間壁葭子が加筆。
3. Ⅲ章は、間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司が製図、間壁忠彦・間壁葭子が執筆。
4. Ⅳ章の一、二は間壁忠彦が製図執筆し、三及び六の(1)、(2)は藤田憲司が製図執筆し、間壁忠彦が加筆。そのうち土器手拓の一部は近藤益二・高田明人が援助。Ⅳ章四、五及び六の(3)は間壁葭子が製図執筆。
5. Ⅴ章、Ⅵ章は、間壁葭子が製図・執筆。そのうち土器の手拓の一部は近藤益二が援助。
6. 原稿の浄書には大池満子・赤沢和子があたる。
7. むすびの執筆と全体の編集は間壁忠彦・間壁葭子が行う。

金　浜　古　墳

凡　例

本古墳の報告は、間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司・小野一臣の共著による。

執筆は〔一〕を間壁忠彦、〔二、三、四、五〕を間壁葭子、〔六、七〕を藤田憲司、〔八〕を間壁忠彦・間壁葭子が行い、遺物の実測・製図の一部を高田明人・近藤益二が援助。写真撮影と編集には間壁忠彦・間壁葭子、原稿浄書には、大池満子・赤沢和子があたる。

広　江・浜　遺　跡

Ⅰ章　位置と周辺の関係遺跡

一、遺跡の位置（図版第一．二）、図1．2．4）

広江・浜遺跡は岡山県倉敷市福田町広江の小字名では浜にある縄文時代から弥生・古墳・奈良・平安・中世まで続いた遺跡である。

小字名に「浜」の地名をとゞめるように、こゝは近来まで、海に面した浜であった。遺跡名を広江・浜としたのは、広江では広範囲であり「浜」だけであると、きわめて一般的な名で、地域が固定し難いため「広江・浜」と呼んだものであり、本来「広江浜」と連ねて言う固有地名はない。

この遺跡は、国鉄山陽線倉敷駅から、ほゞ真南に直線距離で９㎞あまりの地点にあり、記・紀に吉備の児島と記された地域の西端に位置する。1953年（昭和28）に倉敷市へ合併されるまで、児島郡福田町であった。現在では、水島コンビナートと呼ばれる工場地帯を西にのぞんでいるが、児島がその名の通りに島であった古代から中世にかけては、水島灘に直面し、岡山平野の南に浮んだ大きな島の西岸であったのである。図２の地形図を見ると、北から福田町福田の浜、当遺跡のある福田町広江の浜、児島塩生の金浜及び浜などのように浜の地名をとゞめる地点が、児島の西山裾に並んでいる。それは、この地域が、海岸地帯としての長い歴史を持っていたことをうかゞわせる。広江・浜遺跡の西方沖合が陸化したのは、江戸後期の福田干拓により、干拓新田が出現したことによるものであり、さらに南方の金浜や塩生の浜の西側にあった海面が埋めたてられたのは、二次大戦後に出来上る水島工場群の成立の中でも新しい段階になってのことであった。このあたりが、瀬戸内海に直面しなくなってからの期間は、長い歴史の中ではきわめて短いものなのである。

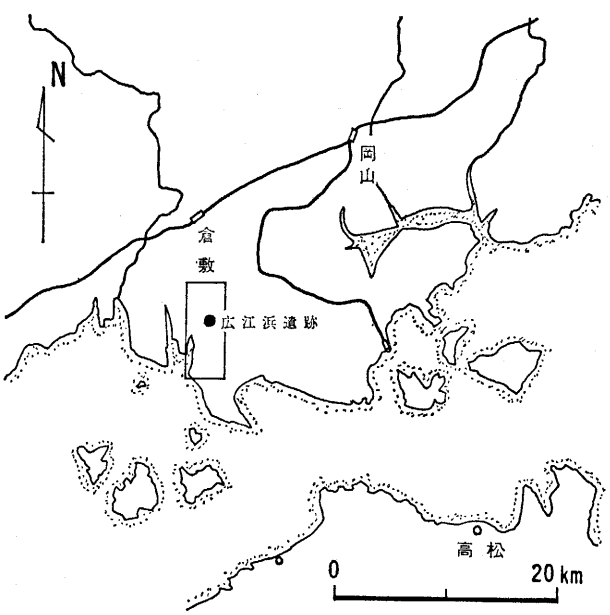


図1．広江・浜遺跡の位置（□部分は図2）

そうした、児島の西海岸の中ほどやゝ北寄りに東にむいて入り込んだ広江の谷があり、その谷の入口南側で、西に面した山裾が広江・浜遺跡である。

二、周辺の縄文時代遺跡

児島は、島であったとはいえ、古代以来行政区として一郡を構成するほどの大きな島であったから、その北岸に並ぶ、灘崎町彦崎貝塚、倉敷市舟津原貝塚、同磯の森貝塚、同船元貝塚というように、縄文時代の著名遺跡を持ち、これ等遺跡は、前面の海のみでなく南側背後の山野が鹿・猪など狩猟動物の豊かな地であったことを推測させられるのである。そうした山野に関しての条件は、児島の西岸も、北岸地域と大した

差異はなかったと思われる。児島の西岸が、面した海面については、北岸の縄文貝塚群の場合、南を児島がさえぎって本土との間にできた入海に面したのに対し、広い水島灘に面したため、北岸と西岸が全く同じ条件であったとはいえないが、当時の高梁川河口からも10Kmあまりにすぎず、瀬戸内海でも海の幸にも恵まれた条件であったと考えられる。そうした自然条件の下で、児島の西岸とその周辺には、縄文時代遺跡がかなり点在する。そのうちで、縄文海進で完全にこの地が海浜化したと見られる前期以後の遺跡を列挙しておこう。

イ）福田貝塚（図２のＡ）

当広江・浜遺跡の北方３Km余りの地点に、福田町古新田の福田貝塚がある。二次大戦後に、近くの第二福田小学校の運動場造成の土取りで発見され、1950年（昭和25）とその翌年に、日本考古学協会の縄文式土器文化時代特別委員会の仕事として、山内清男・鎌木義昌両氏らの調査があり、今日まで報告書の刊行がないまゝではあるが、縄文前・中・後・晩の各期にわたった出土遺物のうち、福田ＫⅡ、ＫⅢなどの土器型式名が、ごく一般に使用されるほど著名な遺跡となっている。当時の調査地点の大部分は土取りされてしまったが、現在も、その東部にあたる古城池の堤下には、遺跡部分が残存している。遺跡の地形は、東に向って入り込んだ小さな谷間の出口に形成された砂洲状地形である。

ロ）船着遺跡

福田貝塚の北西約800mの地点で、図２からは少しはずれるが、福田貝塚の北方を西へ延びた支丘陵北側にある福田

図2. 広江・浜遺跡と周辺の遺跡

町浦田の谷の南側山裾のゆるやかな傾斜地で、近来、縄文中・後期の土器片が採集され、この地域の新遺跡を追加することゝなった。

ハ）連島西之浦貝塚

福田貝塚や船着遺跡は児島の西北端近くに位置するが、その西で、間に現在では400～500mの平地をはさんで連島と呼ばれる山丘がある。かつては、この平地部分は海であった。児島と同様、連島も古くは児島のすぐ西に接する島であった。近世干拓の結果、周辺が陸化してからも、児島と連島の間は大正年間まで東高梁川の流路がこゝを南下していた。縄文前期以後、長い間、連島は、水島灘の北東端をさえぎる島であった。その南岸にあたる倉敷市連島町西之浦の西浦小学校の敷地には、縄文中期の土器を出土した貝塚があったといわれるが、現在では、その痕跡もうかゞえない。福田貝塚の西方約3.5Kmの地点であり、南に面した浅い入江の奥のゆるやかな傾斜地に存在したものと思われる。

ニ）北宇野津遺跡（図２のB）

広江遺跡の南方２Km余りの場所には、東に向って入った倉敷市児島宇野津の谷がある。この谷の入口北側に出来た砂洲状地形と思われる地点の宅地の庭と畑地で縄文後期の土器が採集される。

ホ）金浜遺跡（図２のC）

宇野津の南 約600m、西へ向って延びた天神ケ鼻の南東つけ根に形成された海浜砂洲状地形の部分で、縄文土器の採集が伝えられる。我々は直接に確認したことはないが、縄文時代遺跡だとされている。現在は、西方海面を埋めたて工場化されると共に遺跡部分と思われる場所も盛り土され、確かめることはかなり困難となった。また、遺跡の北に接した先土器時代石器の散布地の舌状台地も南半の大部分が土取りで消滅した。

ヘ）六口島柳谷遺跡

広江・浜遺跡から南方へ約10Kmの海中に、水島灘の南東端の島、六口島がある。倉敷市児島下津井に属するこの島の北にむいた入江柳谷では、縄文後期中津式土器が採集されており、水島灘東部域の縄文遺跡の一つである。

ト）上水島西岸遺跡

広江・浜遺跡の南西約８Kmの水島灘中に浮ぶ上水島の西にひらいた海岸砂洲で、縄文後、晩期と思われる土器片が採集され、この地域の縄文遺跡の一つに数えられる。

三、周辺の弥生時代遺跡

児島は平地の少ない海面にとりかこまれた土地柄であったが、弥生時代の遺跡もかなりの数知られている。広江・浜遺跡の北側の谷を東へ進んで低い峠を越すと、現在では倉敷市域となっているが、元児島郡郷内村に属した谷あいの平地であり、こゝは児島の中では最も広い平地を持った地域であった。この谷あい平地をめぐっては、数個所に弥生時代遺跡があり、そのうち弥生中期の福江前山遺跡は広江・浜から2.5Kmばかりと近接した地点であるが、図２の地形図中に入る弥生時代遺跡をあげるだけでも、広江・浜遺跡を見るための参考となると思われるので、次に列挙しておこう。

イ）福田貝塚（図２のA）

福田貝塚の縄文の層の上層部には、弥生前期の遺物を包含し、また、弥生中期後半の凹線文発達期の土器片も若干発見されている。遺跡がのる海岸砂洲の背後の現在古城池となる後背湿地が、せまい

ながらも水田農耕の可能な土地であったと見られ、小規模ながら弥生時代の住居の場となったのである。

ロ）塩生（しょうなす）遺跡（図2のD）

広江・浜遺跡の南5㎞、倉敷市児島塩生には、埋めたてで西面した海を失うまで、南北に長い砂洲の西側に美しい砂浜があった。この砂洲上には近世以来も集落がのり、その北寄り部分で、弥生前期の無頸壺が単独出土したことがある。遺跡の性格は明瞭でないが、こゝも弥生前期の遺跡であるに違いない。砂洲の東側で現在も水田となっている浜堤後背湿地は、かなりの広さを持っている。

ハ）種松山真菰谷貝塚（図2のE）

大正年間に発掘された資料は京都大学に保管される。弥生中期後葉の凹線文発達期に属する標高180*m*の高地性遺跡であり、伴出の鹿角製組合せ釣針は、貝塚を形成したことゝ共に高地性遺跡でありながら、西方と北方にのぞまれる水島灘などの海とのかゝわりを伝えている点、注目される。貝塚の南方60〜70*m*の地点で、1962〜1963年ごろ、貝塚のある尾根の西斜面を走る登山道建設で出来た東の山側法面に、同じ時期の竪穴住居跡らしい落ち込みを観察したが、その後の道幅拡張で、今では切り落されている。貝塚と一連の遺跡地が尾根上に広がっていると見てよかろう。また、種松山出土の銅鐸は、貝塚のある尾根筋の一つ東の尾根から出土したものと地元では伝えているが、その地点は現在すでに土取りにより削られている。

ニ）真弓池遺跡（図2のF）

種松山山頂の東南にあたる谷あいの、真弓池内と周辺から、倉敷在住の杉山次郎氏が弥生中期後葉の凹線文発達期の土器を採集されている。サヌカイト打製の石包丁や石鏃も含まれていて、谷あいの集落遺跡と考えてよい。同遺跡付近では、ナイフ形石器や縄文時代としても古い時期かと思われる石鏃の採集もある。

四、周辺の古墳時代遺跡

備前国が古代以来の塩生産の地として著名であったことは、多くの資料で有名である。その主要な産地の一つが児島の地区であった。奈良時代には、平城宮出土木簡が児島産塩のことをよく伝えている。この水島灘東縁の西児島の地域もその地域のうちに含まれたと思われ、古墳時代の土器製塩遺跡が知られると共に、その時期に築造された古墳も点在する。図2の範囲内で、それらの遺跡地を次に記すのであるが、その他、図2から少しはずれた地点でも、付近の縄文遺跡として記した船着、上水島西岸、六口島柳谷の各遺跡では、師楽式製塩土器が採集され、六口島では、柳谷の西方首の峠遺跡、島の南岸の二番谷も、古墳時代製塩跡である。また、塩生の南にあたる児島西海岸の古い港町児島通生の浜でも師楽式土器が採集される。また児島の北岸にある縄文貝塚の上層とか、その周辺の浜地形の地点でも、多くの師楽式製塩土器の出土が知られ、児島全域にわたって古墳時代製塩の地だったことが遺跡の面でも明瞭にうかゞえる。

イ）福田貝塚（図2のA）

貝塚上層の表土層近くから、小形台脚付や一般的な大きさの丸底及び、小形薄手丸底の師楽式土器と共に土師器、須恵器が採集されており、古墳時代にも海浜集落が存在したことを示している。

ロ）湾戸遺跡（図2のG）

福田貝塚から山裾ぞいに約1.5㎞南下した福田町湾戸の谷口でも、師楽式製塩土器、土師器、須恵

器の散布があり、こゝも古墳時代の海浜集落であったと考えられる。

ハ）北宇野津遺跡（図２のＢ）

縄文土器が採集されるこの遺跡付近でも、師楽、土師、須恵の断片が採集され、宇野津の谷口にも同様な遺跡の存在が判明している。

ニ）金浜遺跡（図２のＣ）

金浜遺跡では、二次大戦前から古墳時代後期の師楽式土器の採集があり、この種の遺跡としてはよく知られていた。

ホ）塩生遺跡（図２のＤ）

塩生の浜も師楽式土器片の散布が観察される地点として古くから有名で、砂洲の中央あたりの小学校が所在する付近では、師楽式土器製塩に伴うと見られるいわゆる「たゝき面」の断片が見られたこともある。

ヘ）高島東浜遺跡（図２のＨ）

水島工場群のための埋めたてまでは、塩生の西沖に浮ぶ小島であった高島には、東山裾に現在も集落がある。こゝは、ごく最近まで海浜であり、小さな浜に人家が建て込んでいて、現状では確認が困難であるが、師楽式土器の採集されたことのある地点と伝えられている。

以上が、今日知見にのぼる師楽式土器を含む古墳時代遺跡であるが、この周辺では、現在も集落がある旧海岸の地点では、まだまだ数多くの新発見が追加されるものと考えられる。また、付近には、これらの古墳時代遺跡と直接関係したと思われる古墳が存在する。

ト）福田古城池古墳群（図２のＩ）

福田貝塚の北側の丘陵に横穴式石室を内部主体とした古城池古墳群があり、図示した地点は９号墳にあたり、石室巾1.8*m*、石室残存長6.5*m*の規模を示し、南に開口する径８*m*の円墳。９号墳から尾根を北方へ２基、さらに西方へ尾根ぞいに６基所在し、それらの中には、若干の石材が露出するだけのものもあるが、石室の規模を計り得るものは、９号墳とほゞ同大のものである。

チ）古城池南古墳（図２の○）

福田貝塚の南の尾根上にある径10*m*の円墳。西に開口する横穴式石室は巾1.4*m*、長さ５*m*を計る。

リ）湾戸古墳群（図２のＫ）

湾戸遺跡の東背後に並んだ横穴式石室を持った古墳群。５基が知られたが、現在では、南端の１号墳（１）と北端の５号墳（５）が現状をとゞめるのみで、他は宅地造成や道路改修で消滅した。１号墳は、西に開口し、石室巾１*m*、長さ３*m*。５号墳は径12*m*の円墳、石室巾1.7*m*、長さ5.7*m*。

ヌ）三軒屋古墳群（図２のＬ）

湾戸の南500～600*m*には福田町広江三軒屋の集落があり、こゝの東に入った谷をめぐっても、横穴式石室を主体とした６基からなる三軒屋古墳群がある。このうち１号から５号は、谷の北側に並び、６号は南側にあった。１号（１）は径12*m*の円墳、石室巾1.3*m*、長さ５*m*。２号（２）は径６*m*の円墳、石室巾1.1*m*、長さ２*m*。３号（３）は石室らしい石材が見え、４号（４）は、石室巾1.1*m*、長さ３*m*。５号（５）は石室天井石露出。１・２・４号の石室は南にむき開口。６号（6）は宅地造

成工事で消滅したが、石室 巾1.6m、長さ6mを計測していた。この古墳の状況から推測すると、三軒屋の集落付近にも、古墳時代の集落遺跡が存在した可能性が考えられる。

ル）広江北地西古墳群（図2のM）

広江・浜遺跡から谷あい平地をはさんで北にのぞまれる丘陵上に2基の横穴式石室を主体とした古墳がある。西側の1号（1）は、円墳径6m、石室巾1m、長さ4m。2号（2）は円墳径15m、石室巾1.8m、長さ4mで、共に南に開口する。

ヲ）広江北地東古墳群（図2のN）

広江北地の集落の東端の低丘陵上に2基の古墳が知られる。1号（1）は、ゆるやかな南に下る斜面にあり、西に開口する横穴式石室の基部をとゞめ、2号（2）は小丘上にあって、墳丘らしい土盛りと須恵器の散布が知られる。

ワ）広江南地古墳群（図2のO）

広江・浜遺跡東方の丘陵に2基の横穴式石室を持つ古墳がある。西側の1号墳は径10mの円丘、石室 巾1.3m、長さ5m。東側の2号墳は、石室 巾1.8m、長さ7m。

カ）広江・浜南古墳（図2のP.図3）

広江・浜遺跡の南方の台地上に、ちょうど遺跡の方に向いた北東に開口した横穴式石室が存在し、石室 巾1.3m 程度のものであったが、土取りにより消滅した。

ヨ）上町古墳（図2のQ）

広江・浜遺跡の南方の倉敷市呼松町上町の宅地内に、横穴式石室の痕跡と思われる遺構があり、わずかに残った石室石材が庭石に利用されている。

タ）天神山古墳（図2のR）

児島塩生の字頭間の西の丘陵上で、ハニワ片が採集される円墳、径約10m。

レ）金浜古墳（図2のS）

金浜遺跡を西に見下す丘陵上にあった横穴式石室を主体とする古墳。1977年秋、土取りで消滅。この古墳については、本報告に続いて、その調査記録を記す。

ソ）金浜東古墳（図2のT）

金浜古墳の東方丘陵上に、横穴石室と見られる石材と組合せ箱式石棺かと思われる石材が露出している。

ツ）溝落谷古墳群（図2のU）

金浜遺跡の東南、ゆるやかな斜面に4基の横穴式石室を持つ古墳がある。全て内部が埋まり石室の内のりを計測できるものはない。

ネ）馬乗場古墳群（図2のV）

塩生集落の北東の丘陵斜面にある2基の横穴式石室。西むきに開口。

図3．消滅した広江浜南古墳の旧状（1965年ごろ）

ナ）高島北の鼻古墳（図２のW）

児島塩生の西方高島の北端に延びた台地先端にある組合せ箱式石棺。

ラ）高島エビス鼻古墳群（図２のX）

高島の西南台地上に２基の横穴式石室が知られ、１基は石室巾２*m*、長さ３*m*、他の１基は石室材が露出するのみで、石室規模は測れない。高島出土とされる宗沢節雄氏所蔵の土製丸玉、水晶切子玉、碧玉管玉、直刀を出土したのは、この古墳群であろうか。

以上の周辺古墳のほかに、図２から少しはずれる塩生集落の東南300*m*のあたりの丘陵斜面に３基の横穴式石室を残す横山古墳群がある。また、広江・浜遺跡から少し離れるが、東方へ直線距離で2.5Km余の旧郷内北部、現倉敷市児島林から児島福江へかけての丘陵斜面には古墳時代後期後半に始まる須恵器窯址群があることも、一応指摘しておく必要があろう。

五、周辺の奈良・平安・中世の遺跡

奈良時代以降の遺跡については、判明したものはきわめて少ない。中世の土器片が採集される地点は多いが、遺跡として、とりあげ得る程には至っていないのが現状である。

たゞ、広江・浜遺跡をめぐっては、遺跡の北方の広江の東へ向いて入る谷で、広江北地東古墳群（N）の東方の丘陵で、奈良時代の須恵質陶棺形蔵骨器の出土があり（間壁葭子「火葬骨を蔵した小陶棺二例」古代学11巻３号1964年11月）、更に東に進んだ旧郷内地区に入る倉敷市曽原では、瀬戸大橋架橋関連道路予定地内で1978年岡山県教育委員会の調査により、緑釉陶片や布目瓦の出土があり、中世墳墓の発見もあった。また、直接的な遺跡とはいえないが、広江・浜遺跡の東南方丘陵上の天石門別保布羅（あめのいわとわけほふら）神社（図２のY）には、古い様式を示す凝灰質砂岩製と思われる石造層塔があり、大和高市郡竜福寺の「竹野王塔」に類似する（巌津政右衛門「岡山の石造美術」日本文教出版社岡山文庫55　1973年12月）。付近の古代・中世集落との関係がしのばれる。

Ⅱ章　遺跡の地形と調査経過

一、遺跡地の状況（図版第一・二、図2・4・5）

遺跡は、西から東へ向いて入った広江の谷あいの出口南側の山裾扇状地形の一角に位置する。この付近では、図2で見られる山裾の標高5*m*～6*m*の等高線のあたりまでは花崗岩の露岩があり、それよりも低い部分で扇状地形の堆積層が西に向って広がっている。扇状地形部分は、原則的には、海岸に堆積した砂層からなり、砂層上に背後の斜面から流出した土砂が山ぎわに行くほど厚く堆積している状況が見られるのである。

この広江・浜付近が、遺跡であることは、地方の研究者の間では、昭和初年から周知されていたらしく、安原豊「福田町誌」（1953年）には、師楽遺跡として明記されていた。ところが、1966年（昭和41年）には、広江の南の呼松地区にあった倉敷市第三福田小学校が老朽化し、また工場地帯に接して生徒増が著しいため、移転新築されることゝなった。その際、新校地決定には、広江地区・呼松地区を主要な学区とする三福小の通学範囲の中央的位置となるように決められたというが、遺跡の所在に対する事前の配慮は全くなかった。そのため、整地作業と校舎の基礎工事が終了した段階で、ようやく遺跡の存在に気付くといった有様であった。

図4・5で見るように山裾の東北に校舎が、南西にグランドが造成されたのであるが、1966年の当初の建設時点には、図5の中に「A」の記号を記した建物（体育館）は計画になく、「B」の記号を記した教室と「E」を記した一階建の管理棟を建設したのであった。その年の5月、遺跡が工事で破壊されていることに気付いた時には、校舎敷地内の山寄りのやゝ高くなった部分は削平され、その土は、湿地水田があった運動場部分の埋め土に運ばれていた。そのため、校地は全体として4*m*の等高線が通らない4*m*以下の高さでほゞ平坦になっていたが、学校設計段階の測量図によると、B校舎の東部を4*m*、中央部を3.5*m*の等高線が南北に通過する地形であったことが知られ、図5の地形図には旧状を記したわけである。

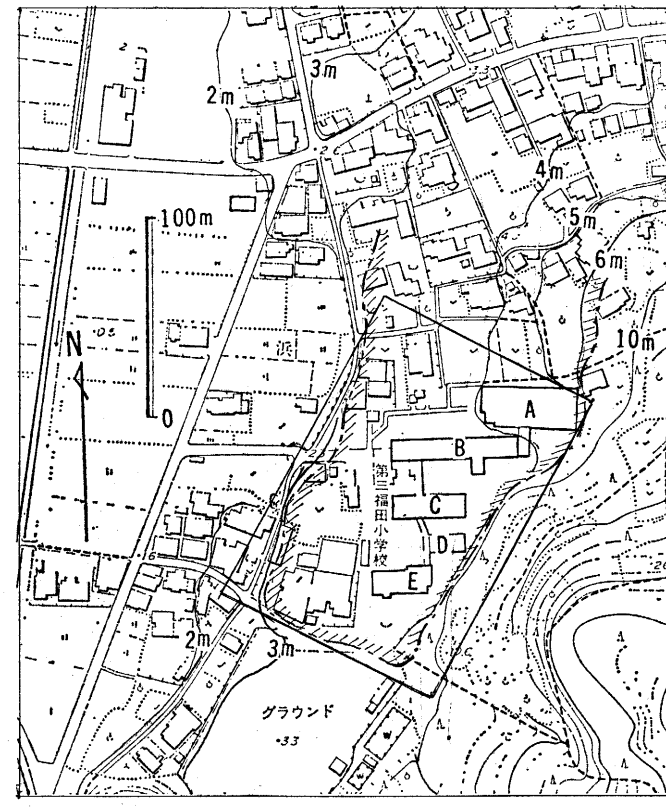


図4. 遺跡付近の地形

二、調査の経過（図5）

校舎建設の地下掘り下げにより、土器片などの出土が著しくなった段階で、倉敷市教育委員会内部ではす

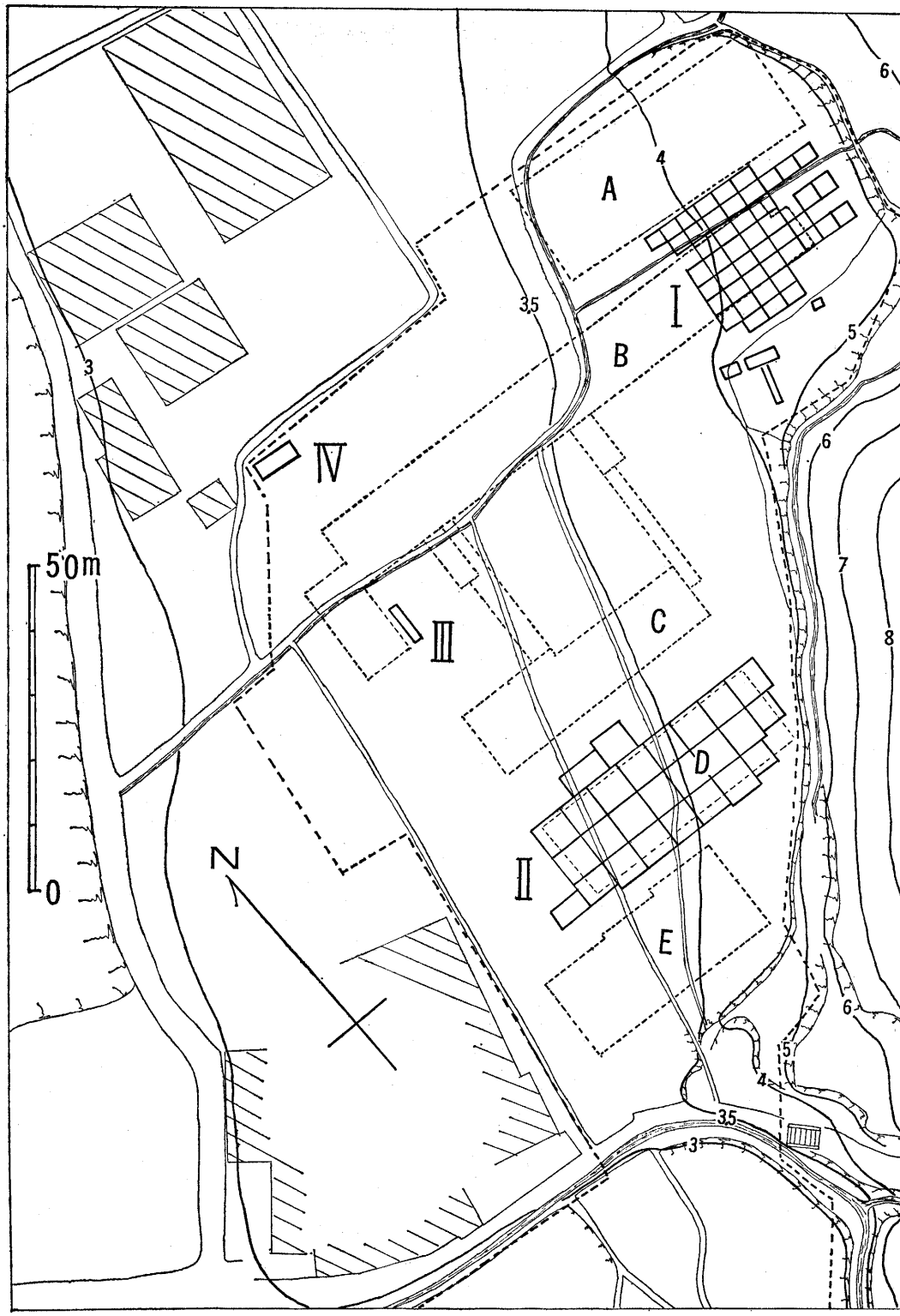


図5. 調 査 地 点 の 状 況